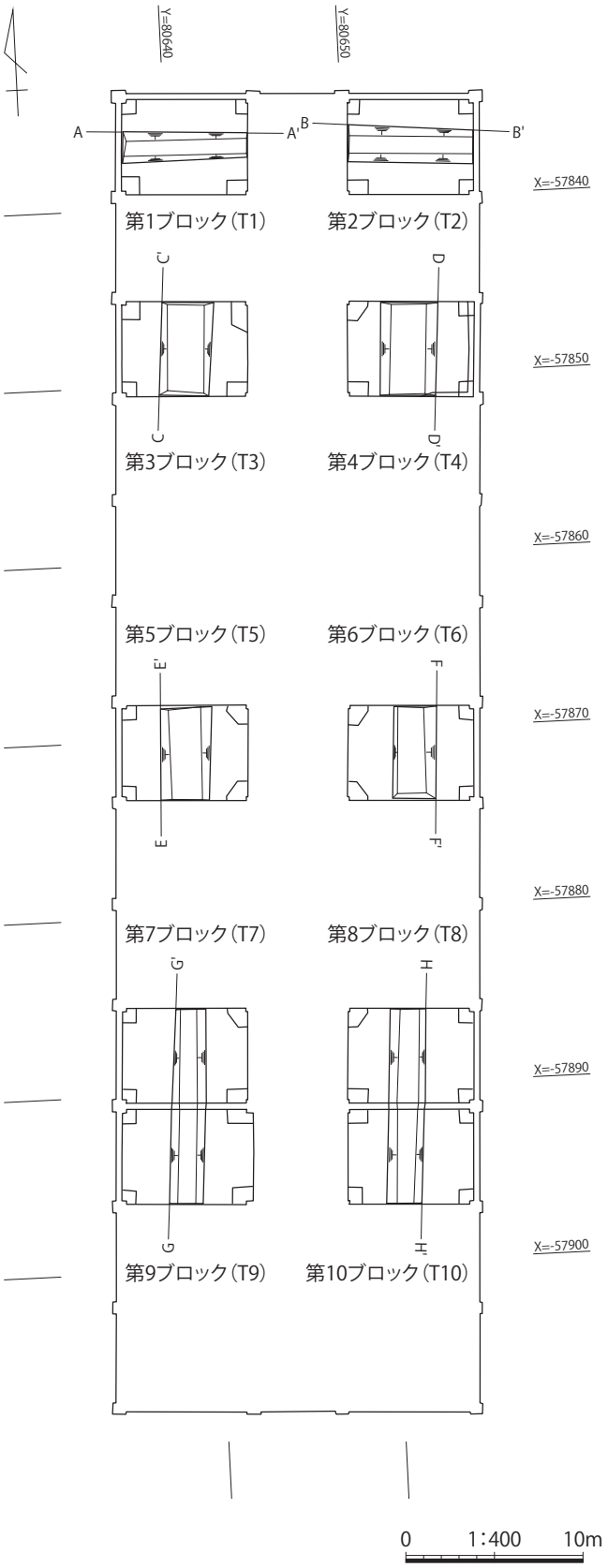
検出したSD06の東西方向に延びる屋敷境溝の連続性を確認するために設定した南北トレンチである。T5・6は１区の第３遺構面において、調査区中央～南側で検出した黄褐色軟砂岩（屋敷地の造成土）の連続性を確認するために設定した南北トレンチである。T7・9およびT8・10については、１区では調査区外となるが、堀尾期絵図から想定した17世紀初頭～前半の東西方向の屋敷境溝を確認するために設定した南北トレンチである。

２区の遺構面の認定は、１区の調査成果に基づいて２区の調査成果を整合すると、いずれのトレンチも現地表面から100～120㎝下までは建物基礎の撹乱により１区の第１遺構面に対応する遺構面は消失している。

２区では、撹乱を取り除いた段階で検出した標高0.60～0.70m付近に堆積する灰色粘質土または黄灰色シルト質軟砂岩が１区の第２遺構面、標高0.40～0.50m付近に堆積する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（堀尾期の造成土）が１区の第３遺構面、標高0.10～0.20m付近に堆積する黒褐色粘質土（旧地表面）が１区の第４遺構面にそれぞれ対応するものと考えている。

２区の大きな調査成果として、T3・4で検出した屋敷境溝は１区で検出したSD01・06の東側延長線上にあたり、２区ではその連続性を確認できたことが挙げられる。また、T7・9およびT8・10で検出した東西方向の屋敷境溝SD09は、SD06と同時期に併存していた遺構と考えている。これらの２条の屋敷境溝の検出位置から、堀尾期における「林吉兵衛」の屋敷地の規模を想定復元することが可能となった。屋敷地の規模の詳細については第５章第３節を参照されたい。

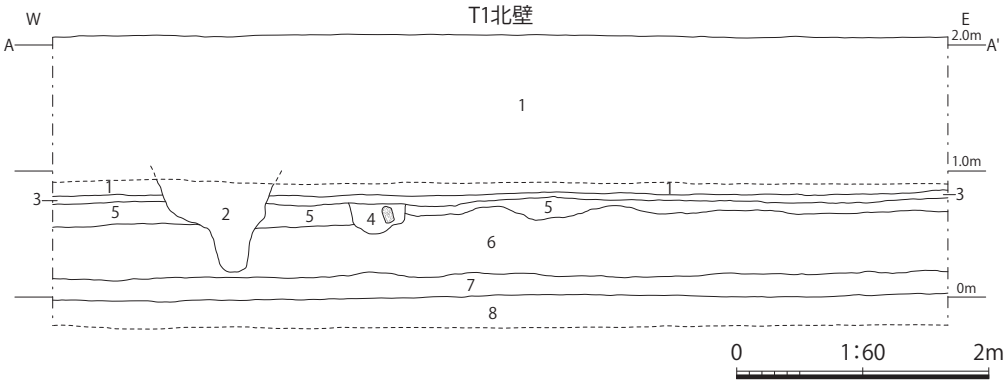


第108図　２区　調査トレンチ位置図

第２項　２区の遺構と遺物

第１ブロック（T1）（第 109 図）

現地表面は標高 2.10ｍで、現地表面から 120㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T1 では、標高 0.70ｍで１区の第２遺構面に対応する淡灰色粘土（第５層）、標高 0.60ｍで１区の第３遺構面に対応する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第６層）、標高 0.20ｍで１区の第４遺構面に対応する黒褐色粘質土（第７層）を確認した。遺物は小片のため図示できなかったが、淡灰色粘土（第５層）から 17 世紀代前半の肥前陶器が出土している。

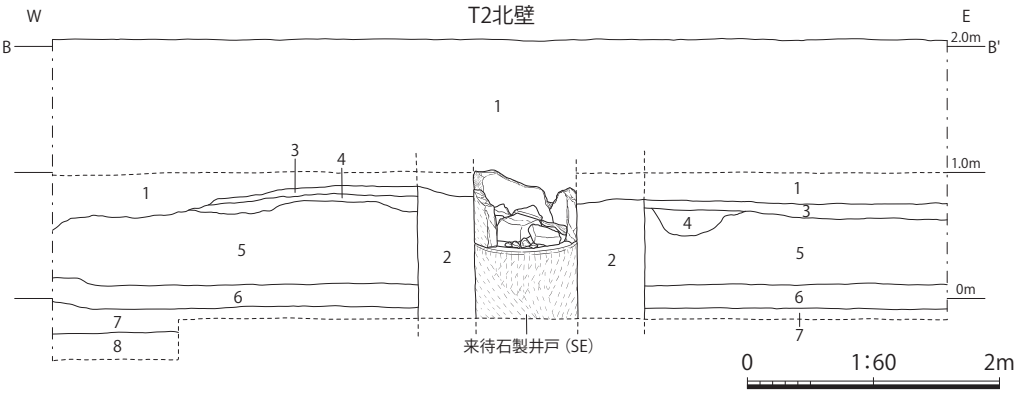


1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　建物基礎の撹乱層(砕石) 7.5R 4/3
3　黒色有機粘質土 2.5Y 2/1
4　暗灰色粘質土(柱穴) 10G 3/1
5　淡灰色粘土 5G 3/1
6　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
7　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
8　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1

第 109 図　T1 トレンチ北壁土層図

第２ブロック（T2）（第 110 図）

現地表面は標高 2.10ｍで、現地表面から 120㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T2 では、標高 0.60ｍで１区の第３遺構面に対応する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第５層）、標高 0.15ｍで１区の第４遺構面に対応する黒褐色粘質土（第６層）を確認した。トレンチの中央付近では、来待石製井戸を１基検出した。検出面は標高 1.00ｍで、井戸の掘り方には直径 10㎝前後の円礫が裏込石として使用され、掘り方の規模は幅 1.80ｍ、深さ 1.20ｍ以上を測る。井戸側上部は近現代の撹乱によって消失するが、直径 80㎝、高さ 60㎝を測る来待石製の井筒を２段検出した。



1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　灰色礫層(SE01裏込石) N 7
3　黒色有機粘質土 2.5Y 2/1
4　淡灰色粘土と黄褐色粘土ブロックの混合土 5G 3/1
5　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
6　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
7　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
8　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1

第 110 図　T2 トレンチ北壁土層図

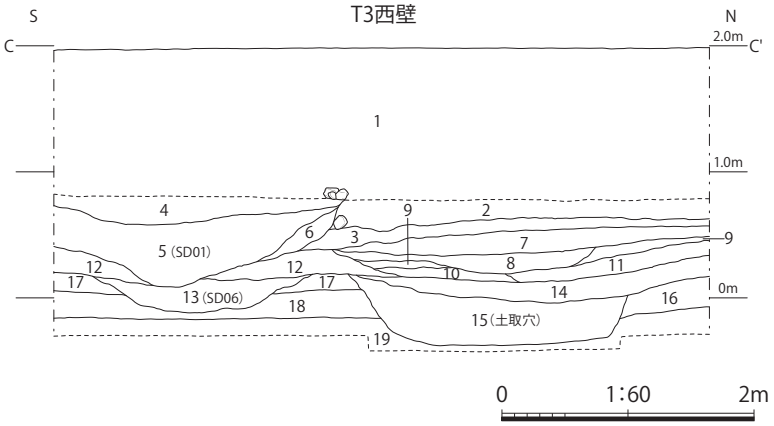
第 3 ブロック（T3）（第 111 図）

現地表面は標高 2.00ｍで、現地表面から 120㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。トレンチ内の南側では、1 区の第 2 遺構面で検出した SD01 と第 3 遺構面で検出した SD06 の東西方向に延びる屋敷境溝の続きを確認した。1 区と同様にいずれも屋敷境溝は素掘り溝で 2 時期あり、土層断面での規模は、上位の標高 0.70ｍで検出した SD01 は南北幅 2.30ｍ以上、深さ 70㎝、下位の標高 0.20ｍで検出した SD06 は南北幅 1.70ｍ、深さ 25㎝を測る。

また、トレンチ内の北側では、標高 0.20ｍ付近で南北幅 2.00ｍ、深さ 50㎝を測る土取穴を検出している。標高 0.20ｍで城下町形成以前の旧地表面である黒褐色粘質土（第 17 層）を確認した。

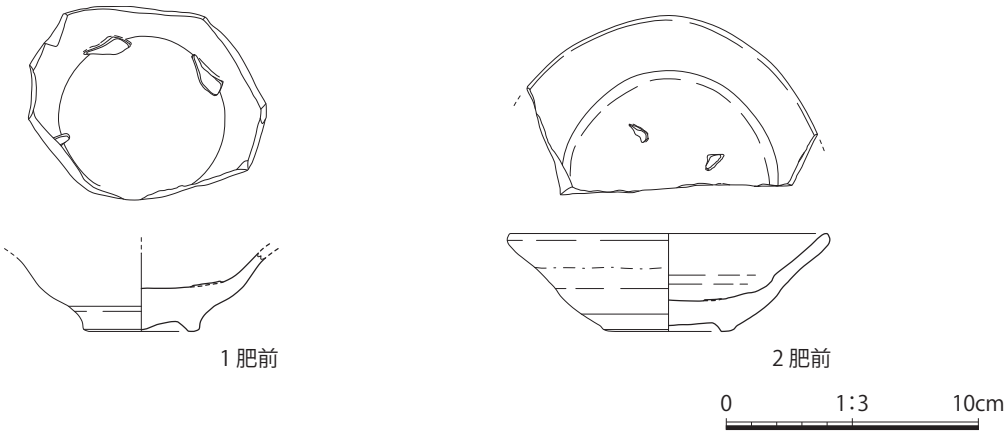
T3 トレンチ出土遺物（第 112 図）

ここでは T3 のトレンチ内で検出した屋敷境溝 SD06 の埋土から出土した遺物を掲載する。112-1・2 は国産陶器で、肥前陶器の折縁皿である。いずれも内外面に灰釉を施し、見込みに 2 ～ 3 箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期（1594 ～ 1610 年代）。



1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　橙褐色粘質土(山土造成土) 10YR 7/8
3　オリーブ灰色粘質土 10Y 6/1
4　淡緑灰色粘質土 10Y 4/1
5　灰白色粘土(SD01埋土) N 6
6　淡灰白色粘土 N 7
7　暗灰色粘質土 N 5
8　黒色有機粘質土2.5Y 2/1
9　灰色シルト質粘土 5BG 6/1
10　暗灰色有機質土10Y 5/1
11　明灰色粘質土 5G 6/1
12　灰茶褐色粘質土 10YR 6/1
13　灰色粘土(SD06埋土) 2.5GY 5/1
14　黒色有機粘質土と暗茶褐色粘土の混合土 10YR 4/2
15　淡茶灰色粘土(土取穴埋土) 2.5Y 4/2
16　黒色粘質土 7.5Y 3/1
17　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
18　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
19　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1

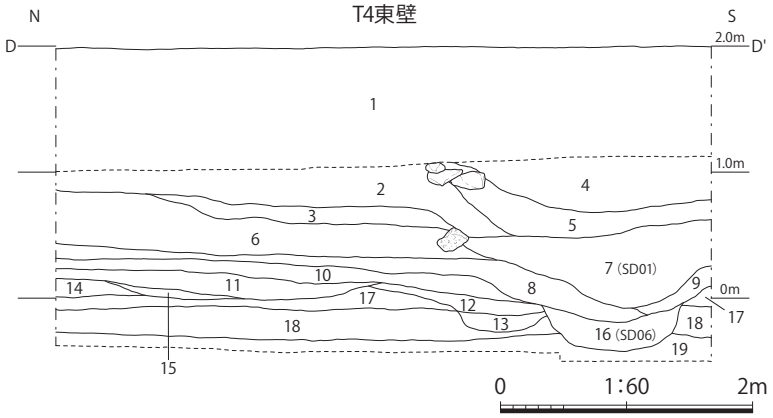
第 111 図　T3 トレンチ西壁土層図



第 112 図　T3 トレンチ出土遺物

第４ブロック（T4）（第 113 図）

現地表面は標高 2.00ｍで、現地表面から 100㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。トレンチ内の南側では、T3 で検出した屋敷境溝 SD01・06 の続きを確認した。このトレンチ調査によって SD01・06 は、１区から T4 までの約 27ｍ間においては東西方向に直線的に延びる屋敷境溝であることが判明した。標高 0.70ｍで１区の第２遺構面に対応する暗灰色粘質土（第６層）、標高 0.35ｍで１区の第３遺構面に対応する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第 10 層）、標高 0.05 ～ 0.10ｍで１区の第４遺構面に対応する黒褐色粘質土（第 17 層）を確認した。

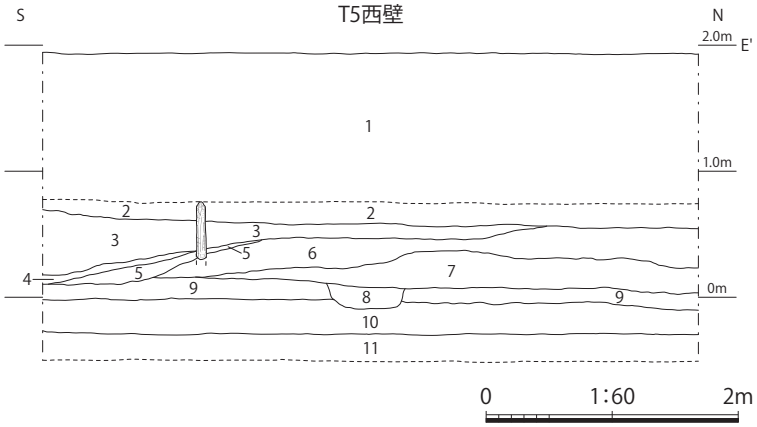


1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　橙褐色粘質土(山土造成土) 10YR 7/8
3　オリーブ灰色粘質土 10Y 6/1
4　淡緑灰色粘質土 10Y 4/1
5　緑灰色粘質土 5Y 6/2
6　暗灰色粘質土 N 5
7　灰白色粘土(SD01埋土) N 6
8　灰茶褐色粘質土 2.5Y 4/1
9　暗灰褐色粘質土 2.5GY 3/1
10　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
11　黒色有機粘質土 2.5Y 2/1
12　淡青灰色粘土 10G 5/1
13　灰色シルトと黒褐色粘質土の混合土 5BG 3/1
14　緑白色軟砂岩 7.5GY 7/1
15　黒色粘質土 5GY 3/1
16　灰色粘土(SD06埋土) 2.5GY 5/1
17　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
18　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
19　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1

第 113 図　T4 トレンチ東壁土層図

第５ブロック（T5）（第 114 図）

現地表面は標高 1.90ｍで、現地表面から 120㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T5 では、標高 0.70ｍで１区の第２遺構面に対応する黄灰色シルト質軟砂岩（第６層）、標高 0.35ｍで１区の第３遺構面に対応する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第７層）、標高 0.10 ～ 0.15ｍで１区の第４遺構面に対応する黒褐色粘質土（第９層）を確認した。ここでは１区の調査区南側に堆積する土層の広がりを捉えることができた。

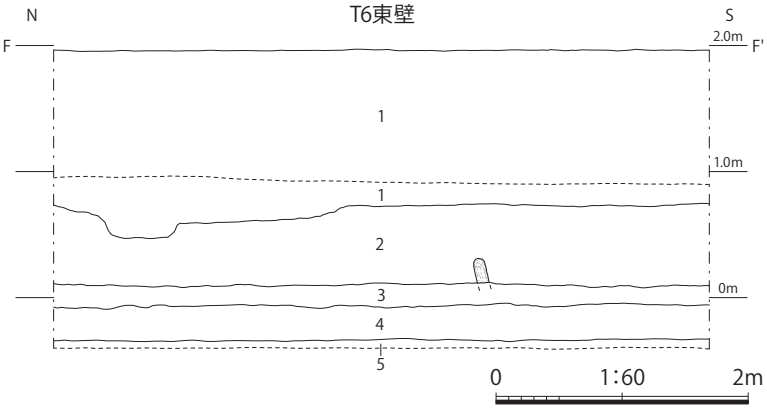


1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　橙褐色粘質土(山土造成土) 10YR 7/8
3　灰色粘質土と淡緑灰色軟砂岩ブロックの混合土 10Y 4/1
4　暗灰色有機質粘土 10G 2/1
5　淡灰色シルト N 5
6　黄灰色シルト質軟砂岩 7.5YR8/8
7　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
8　淡暗灰色シルト 10G 4/1
9　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
10　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
11　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1

第 114 図　T5 トレンチ西壁土層図

第６ブロック（T6）（第 115 図）

現地表面は標高 1.95ｍで、現地表面から 120㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T6 では、標高 0.70ｍで１区の第３遺構面に対応する灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第２層）、標高 0.10ｍで１区の第４遺構面に対応する黒褐色粘質土（第３層）を確認した。ここでは堀尾期の造成土である灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第２層）がほかの場所と比べてやや高い位置にあり、屋敷地内における造成土の使用が部分的に異なっている可能性が考えられる。

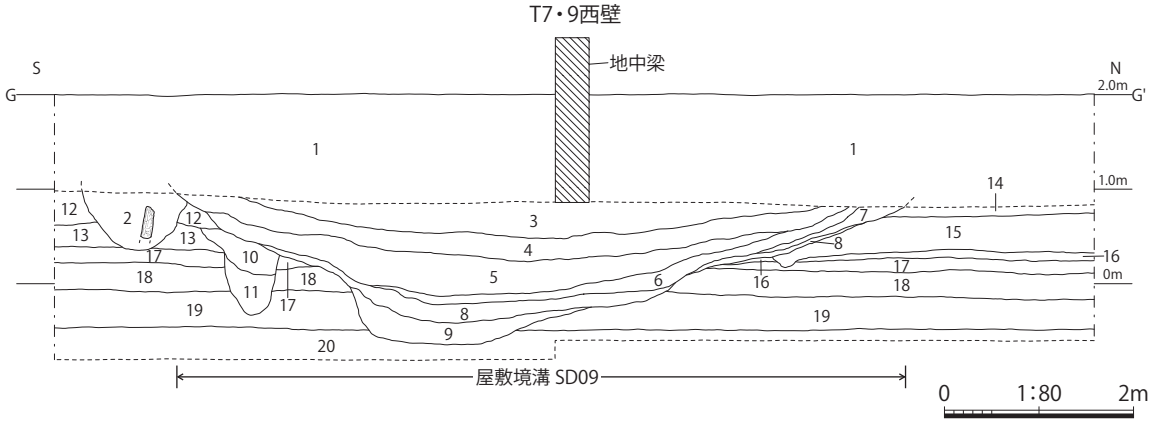


1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
3　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
4　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
5　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1

第 115 図　T6 トレンチ東壁土層図

第７・９ブロック（T7・9）（第 116 図）

現地表面は標高 2.00ｍで、現地表面から 110㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T7・9 では、標高 0.80 ～ 0.90ｍで東西方向に延びる屋敷境溝 SD09 を検出し、２つのトレンチ内にわたる U 字状の素掘り溝の掘り方を確認した。土層断面で SD09 の規模は、南北幅 7.60ｍ、深さ 1.50ｍを測る。溝を掘り直した痕跡は見られず、溝埋土にラミナ層を含む（第５層）。検出した SD09 を境に、北側の屋敷地では黄褐色軟砂岩（第 15 層）、南側の屋敷地では灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土（第 13 層）を堀尾期の造成土として使用しており、１区で確認した屋敷境溝を境に屋敷地によって造成土の使用が異なるということが、このトレンチ内においても確認することができた。



1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5YR 6/1
2　灰色粘質土とオリーブ灰色軟砂岩の混合土 5Y 6/1
3　オリーブ灰色粘土 5Y 8/2
4　黄灰色軟砂岩(砂岩ブロック含む) 2.5Y 8/4
5　茶褐色有機質粘土(ラミナ層) 10YR 3/3
6　黒色有機質粘土 7.5YR 3/1
7　暗灰色粘土 7.5YR 4/1
8　黒褐色粘土 10YR 2/1
9　淡黒褐色粘土 10YR 2/2
10　灰白色粘質土 2.5Y6/1
11　淡青灰色シルト 5PB6/1
12　明灰色シルト 5Y 6/1
13　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
14　赤橙色軟砂岩(山土造成土) 2.5YR 7/8
15　黄褐色軟砂岩(山土造成土) 2.5Y 8/6
16　暗灰色有機粘質土 N 3
17　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
18　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
19　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1
20　灰色シルト質粘土(自然堆積層) 2.5GY 5/1

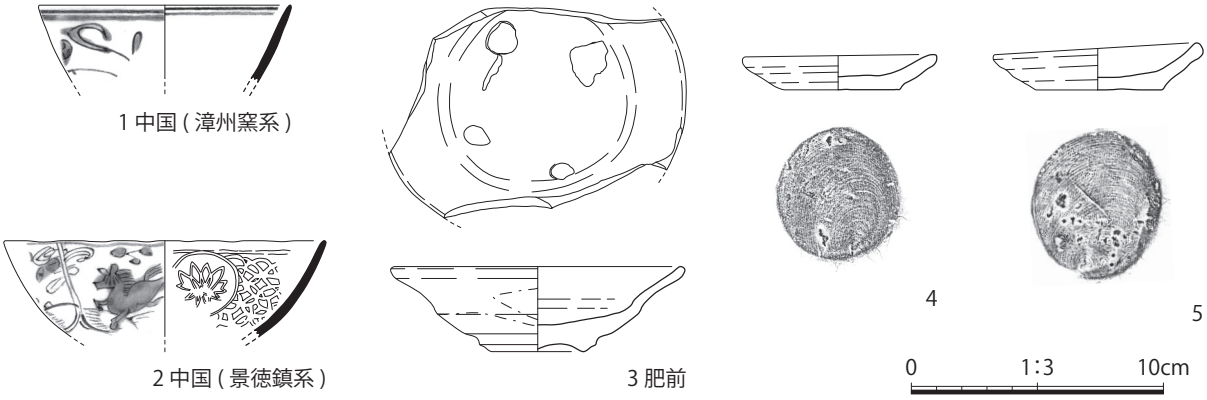
第 116 図　T7・9 トレンチ西壁土層図

T7 トレンチ出土遺物（第 117 図）

ここでは T7 のトレンチ内で検出した屋敷境溝 SD09 の埋土から出土した遺物を掲載する。117-1・2 は中国磁器で、117-1 は漳州窯系の青花碗、117-2 は景徳鎮系の芙蓉手の青花碗である。16 世紀代末～ 17 世紀代初頭のもので、117-1 は森分類青花碗 F1 群、117-2 は森分類青花碗 I1 群に該当する。

117-3 は国産陶器で、肥前陶器の折縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期（1594 ～ 1610 年代）。

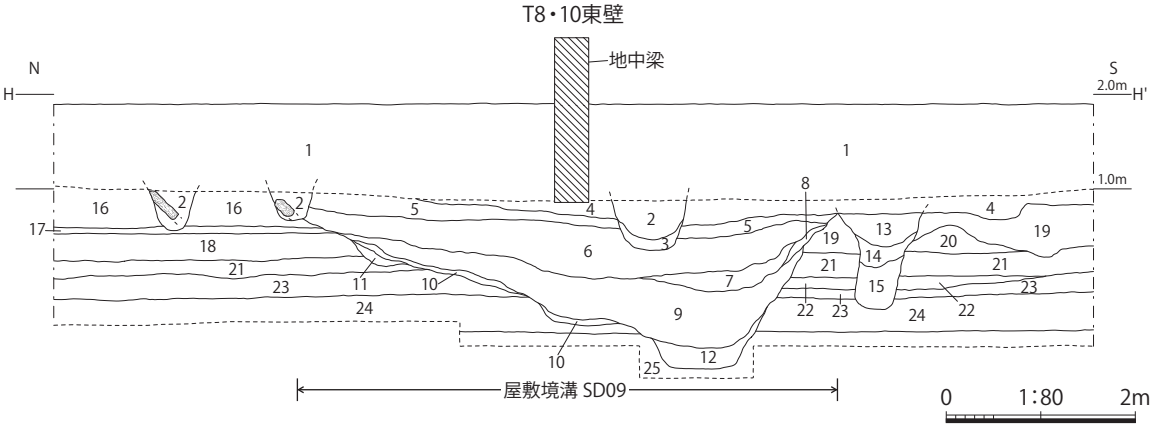
117-4・5 は土師器皿である。ロクロ成形の在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。



第 117 図　T7 トレンチ出土遺物

第 8・10 ブロック（T8・10）（第 118 図）

現地表面は標高 1.95ｍで、現地表面から 100㎝下までは建物基礎の撹乱により遺構面は消失している。T8・10 では、T7・9 で検出した屋敷境溝 SD09 の続きを確認した。標高 0.90ｍで屋敷境溝の掘り方を検出し、土層断面での規模は、南北幅 6.00ｍ、深さ 1.50ｍを測る。SD09 は、T7 ～ 10 のトレンチ内においては、東西方向に直線的に延びる屋敷境溝であることが判明した。



1　砂利と灰色粘土ブロックの混合土(撹乱層) 2.5Y 6/1
2　灰色粘質土とオリーブ灰色軟砂岩の混合土 5Y 6/1
3　暗黒茶色粘土 7.5YR 2/1
4　淡灰色粘質土 10YR 7/1
5　オリーブ灰色粘土 5Y 8/2
6　黄灰色軟砂岩(砂岩ブロック含む) 2.5Y 8/4
7　淡灰白色粘土 10YR 7/2
8　暗灰色粘土 10Y 2/1
9　茶褐色有機質粘土(ラミナ層) 10YR 3/3
10　黒褐色粘土 10YR 2/1
11　暗灰色砂質土 5G 2/1
12　淡黒褐色粘土 10YR 2/2
13　暗茶灰色粘質土 7.5YR 4/1
14　灰白色粘質土 2.5Y 6/1
15　淡青灰色シルト 5PB 6/1
16　緑灰色軟砂岩(山土造成土) 5Y 6/2
17　黄褐色軟砂岩(山土造成土) 2.5Y 8/6
18　暗灰色有機粘質土 N 3
19　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土 5BG 4/1
20　淡黒褐色粘質土 10YR 4/1
21　黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR 3/2
22　黒褐色砂質土 10YR 2/2
23　灰色細砂(自然堆積層) 5B 6/1
24　青灰色細砂(自然堆積層) 5B 5/1
25　灰色シルト質粘土(自然堆積層) 2.5GY 5/1

第 118 図　T8・10 トレンチ東壁土層図

第３章　註

(17) 松江歴史館の発掘調査成果の詳細は、松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011『松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡(殿町 287 番地)(殿町 279 番地外)発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 139 集で報告されている。

(18) 松江地方裁判所の発掘調査成果の詳細は、松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団 2015『広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所合同庁舎新営工事に伴う松江城下町遺跡（母衣町 68）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 164 集で報告されている。

(19) 来待石は、松江市の西部に位置する松江市宍道町来待周辺から産出される凝灰質砂岩である。古くは古墳時代の石室などに使用され、江戸時代には灯篭・石仏・五輪塔などに使用されている。松江城下町遺跡では 18 世紀代以降の屋敷地内の縁石や道路側溝である石組水路などに多く用いられる。

(20) 令和 4 年 9 月に伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課の赤松氏と松江市松江城・史料調査課の西尾氏を招聘して松江城下町遺跡（母衣町 50 外）の出土陶磁器指導会を実施した。

(21) 便槽遺構の検出事例として、兵庫県伊丹市に所在する伊丹郷町遺跡では、18 世紀代後半～ 19 世紀代中頃の町屋の敷地内にある建物（母屋）の裏地で埋甕や埋桶の便槽遺構の検出が多いと報告されている。松江城下町遺跡では、18 世紀代前半～ 19 世紀代中頃の便槽遺構の検出事例として、松江市南田町に所在する松江城下町遺跡 (南田町 132 外) の第 5 遺構面で検出した埋桶 SK22・埋甕 SJ01 が挙げられ、この遺構は建物（母屋）の裏地で検出している。今回の調査で検出した SK01・05・06 は、建物跡は検出できなかったが屋敷地内の裏地にあたる遺構と想定される。これらはいずれも検出位置が共通する便槽遺構と捉えることができ、屋敷地内における裏地利用の一端を示すものと考えられる。

(22) 布志名焼は、松江市街地の南西部に位置する松江市玉湯町布志名周辺で焼成された焼物の総称である。布志名焼の開窯は 18 世紀代後半頃から始まるとされ、窯元の系譜は舟木系・土屋系・永原系の 3 系統に大別される。布志名焼窯では、日用品に加えて中国漳州窯の交趾焼、ベトナム北部の安南焼、国産の美濃焼（志野・織部）・唐津焼・備前焼などの様々な写物が作陶されている。また、布志名焼の系譜は出雲地方の陶器窯である楽山焼が山口の萩焼を分流とする陶技的系譜上の位置付けがあり、楽山焼の系譜に続く布志名焼へと技術が伝播しているものと考えられている。

(23) ぼてぼて茶碗は布志名焼の陶器で、内外面に青地釉・黒釉・呉須釉・黄釉などが施釉される丸碗または腰張碗である。ぼてぼて茶は、この茶碗に茶の花と番茶を入れて専用の茶筅で泡立て、その中に煮しめや冷飯などを入れて混ぜて飲むという、江戸時代後半頃から出雲地方に伝わる風習である。

(24) 大海崎石は、松江市街地の東部に位置する松江市大井町および大海崎町周辺や松江市朝酌町に所在する和久羅山から産出される角閃石粗面安山岩（和久羅山デイサイト）である。斑晶はほとんど見られず、石の色味は灰色のものが多いが、淡黄色や赤褐色を呈するものもある。この石材は、松江城の城郭や内堀・外堀などの石垣に使用され、松江城下町遺跡では 17 世紀代初頭～前半の屋敷地内の建物礎石や道路側溝である石組水路などに多く用いられる。

(25) 島石は、松江市街地の東部に位置する松江市八束町に所在する大根島および江島周辺から産出される堅硬多孔質玄武岩（大根島玄武岩）である。黒灰色を呈し、多孔質であることが特徴的である。松江城下町遺跡では大海崎石の使用よりも後出するようで、17 世紀代後半以降の屋敷地内の建物礎石や石積井戸などに多く用いられる。

(26) 島状整地とは、屋敷地の建物の周囲に土取穴や溝を掘削し、掘削の際に生じた残土で建物を構築する部分にマウンド状の高まりを持たせる。その後の段階で、高まり周囲の低位部に土砂を投入することにより、屋敷地の平坦化を行う造成工法のひとつである。松江城下町遺跡では、これまでの調査成果から 17 世紀代初頭の城下町形成段階から島状整地を採用していることが明らかとなっている。

(27) 佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問の大橋康二氏にご教示をいただいた。岸岳系陶器は、1580 年代～ 1590 年代に佐賀県北波多村の岸岳城周辺で窯業が成立した段階の肥前陶器創始期の製品のことである。岸岳系古唐津と呼ばれる一群の唐津焼が、北松浦党の盟主であった波多三河守の庇護のもと岸岳城周辺の窯でつくられたと考えられている。岸岳系陶器は、藁灰釉を主体とする窯場と、長石釉と灰釉をセットで生産する窯場に分けられる。16 世紀代末の文禄・慶長の役によって、肥前陶器の生産規模が拡大する以前の段階に位置付けられ、目積みには適さない藁灰釉を多用することや量産するほどの需要がなかったものと推定されることから、ほとんど目積みは行われていないことが特徴である。

(28) 御日待ち（日待）とは、特定の日に一晩お籠りして日の出を拝む民俗行事のことである。家の日待祭の場合は各家に、講中や地区全体の日待祭の場合は当番宿に神職が訪れる。出土した土師器皿の底部外面には「卯月　御日待ち　三日」と墨書されていることから、年号は不明となるが、4 月 3 日に日待祭が行われた際に用いられた土師器皿と考えられる。

(29) 木簡の片面に墨書される「堀尾山城守」は、当該期の松江藩主である堀尾忠晴のことを指している。その裏面下段に墨書される「奥田新右衛門」は荷物の送り主で、上段の「林吉兵衛殿参」は届け先を示している。松江城下町遺跡において「堀尾山城守」と墨書された荷札木簡の出土は今回が初見で、届け先の「林吉兵衛」は堀尾期松江城下町絵図に記載されている屋敷地名義の人名と一致している。一方で、送り主の「奥田新右衛門」は出雲・隠岐堀尾山代守家中給知帳に記載が見られるが、堀尾期松江城下町絵図には屋敷地の記載が無く、当該期の書状から江戸詰めの家臣であったことが判明している。これらの状況を踏まえると、堀尾忠晴の荷物を江戸詰めの奥田新右衛門を介して出雲の林吉兵衛宛てに送ったものと理解することができ、この木簡から 17 世紀代前半の堀尾氏家臣間の交友関係を垣間見ることができる。

(30) 1 区の第 4 遺構面で検出した大型土坑状遺構 SX01 の土壌分析は、文化財調査コンサルタント株式会社の渡邉正巳氏にご教示をいただいた。

第 4 章　自然科学分析

松江城下町遺跡（母衣町 50 外）出土の動物遺存体

広島大学総合博物館　埋蔵文化財調査部門　石丸恵利子

1．はじめに

松江城下町遺跡は、松江城を中心として、その周辺に広がる近世遺跡である。これまでに松江歴史館調査地点（松江市殿町 287･279 外）、松江地方裁判所地点（松江市母衣町 68）、城山北公園線（大手前通り）地点（松江市殿町・母衣町・米子町・南田町）、アルファステイツ母衣町Ⅱ地点（松江市母衣町 100 外）において、当時の食環境や動物資源利用の様相を知ることができる動物遺存体が出土している（石丸・江田 2011、石丸 2018 など）。

令和 2 年 8 月から令和 3 年 3 月までに実施された松江法務総合庁舎調査地点（松江市母衣町 50 外）の 1 区において、17 世紀前半の第 2 遺構面と 17 世紀初頭～前半の第 3 遺構面から、貝殻や魚骨、イヌやニホンジカなどの哺乳類の骨が出土した。本調査地点は、松江歴史館から東へ約 150m に位置し、堀尾期および京極期の松江城下町絵図によると、第 2 遺構面では北半部が町屋と南半部が武家地、第 3 遺構面では北半部が空白地と南半部が武家地に推定されている[31]。

本稿では、松江法務総合庁舎調査地点において出土した動物遺存体資料の特徴を報告するとともに、当地での動物資源利用の様相について考察を行う。

2．動物遺存体の特徴

資料は、遺構埋土の掘り下げの際、現場で目視によるピックアップ法で採取されたものである。巻貝 2 種、二枚貝 5 種、魚類 4 種、爬虫類 1 種、鳥類 2 種、哺乳類 6 種の 61 点を確認することができ、表 4 にまとめた。各資料の出土地点や観察事項、計測値等については表 5･6 にまとめた[32]。以下では、分類群ごとに特徴を記す。

(1) 腹足綱（巻貝）

サザエ　第 3 遺構面の SK30 で殻長 89㎜以上の殻体 1 点（No.20）、第 3 遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）で殻長 80.1㎜から 84.4㎜の殻体 3 点（No.43 ～ 45）、殻軸 1 点（No.45）、殻頂部破片 1 点（No.55）、長軸が 31.3㎜から 33.9㎜の蓋 4 点（No.46 ～ 49）の合計 10 点を確認した。殻体には棘が認められ、すべて有棘のサザエであった。これまで松江城下町遺跡から出土したサザエは、ほとんどが有棘のものであり、その特徴と一致する。

無棘の現生標本ではあるが、殻長 100.7㎜の蓋の長軸は 41.6㎜であり、その比率（蓋長軸：殻長 =1：2.42）から見積ると、黒褐色有機質粘土の殻体と蓋は同程度の大きさのものに復元でき、殻長 80㎜から 85㎜と大きさが揃っている特徴が認められる。殻体と蓋に同一個体のものが含まれている可能性もある。

テングニシ　第３遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）で殻長 160㎜以上と 200㎜以上を測る２点を確認した（No.40・41）。殻体外面の結節が尖った結節型で、結節型は外海で見られるとされる。松江城下町遺跡では、これまでテングニシの殻体や蓋が一定量確認されており、よく利用された貝類のひとつであることが窺える。

（2）二枚貝綱

サルボウ　第３遺構面の SK30 でサルボウの右殻を１点確認した（No.21）。殻長 44.3㎜以上、殻高 40.6㎜を測るもので、現在市場に主に出回る殻長 35㎜と比較して大きな個体だといえる。松江城下町遺跡では多く確認されている種であるが、本調査区では１点のみが確認された。

イタヤガイ　第２遺構面の SK24 でイタヤガイの平らな左殻を１点確認した（No.1）。殻長 124.7㎜を測り、大型で立派な個体だといえる。イタヤガイも松江歴史館調査地点で一定量出土しており、瀬戸内地域の近世城下町などでもよく利用された種のひとつである（石丸 2009）。

イワガキ　第３遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）で右殻を２点確認した（No.53・54）。殻長 70.9㎜（殻高 86.3㎜）と 75.1㎜で、いずれも殻長 70㎜以上を測る個体であった。瀬戸内地域の広島城跡ではマガキが主だが、松江城下町遺跡ではイワガキが一定量出土している点で特徴が異なる（石丸 2009）。現在は養殖も行われ、山陰地方は夏のイワガキの産地のひとつとして知られている。

ヤマトシジミ　第３遺構面の SK30 で左右合わせて 200 個程度出土しているが、ここではその一部を報告する。右殻３点と左殻１点を確認した（No.23）。殻長 36.0㎜から 37.4㎜を測り、左殻の合せ貝になる右殻は確認できなかった。本資料も通常市場に出回っている殻長 25㎜前後のものと比較して大型のものだといえる。松江城下町遺跡では最も多く出土している種であり、本調査区においても最も多く確認された。

ハマグリ　第３遺構面の SK30 で右殻２点と左殻１点、左右不明１点の４点を確認した（No.22）。第３遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）からは左殻３点が出土している（No.50 ～ 52）。SK30 から出土した資料は、殻高 33.5㎜（右殻）と殻高 41.0㎜（左殻）を測り、欠損のため正確ではないが殻高 40.6㎜以上のもの（右殻）と左右不明の殻縁片はそれよりも大きな個体であった。一方、黒褐色有機質粘土（ゴミ層）から出土した資料は、殻高 48.6㎜、52.6㎜、59.2㎜を測り、SK30 から出土した資料よりも大型であった。

（3）硬骨魚綱

スズキ属の一種　第３遺構面の SD06 でスズキ属の歯骨左が１点が出土している（No.32）。全長 49.5㎝の現生スズキの骨格標本よりも大型で、全長 55 ～ 60㎝の大型個体のものに復元される。後方部の下方が切断されており、解体調理における刃物の痕と考えられるが、頭部を左右あるいは頭部を細かく分離するなどの調理法が想定される。

ブリ属の一種　第３遺構面の SK27 でブリ属の主鰓蓋骨左が１点確認された（No.19）。主鰓蓋骨の前方部下方の破片で、切断痕に加えて複数の切創も観察できた。内側（右側面）から刃物が複数回押し付けられた結果、切断されたものと考えられる。体長 57㎝のブリの現生骨格標本と比較してさらに大きく、より大型個体であったことが分かる。

マダイ　第 3 遺構面の SK27 で上後頭骨が 1 点出土している（No.18）。全長 45㎝の現生骨格標本より小さな個体であり、全長 40㎝程度であったと考えられる。解体痕などの調理痕は確認できなかった。松江城下町遺跡で最も多く出土している魚種はマダイもしくはマダイ亜科であるが、本調査区では 1 点のみ確認された。

カジキ亜目の一種？　第 2 遺構面の SD01 で椎骨 1 点を確認した（No.8）。種の同定には至らないものであるが、かなり大型の個体であり、マグロ属とは形態が異なるものである。椎体が頭方－尾方方向に長いタイプで、バショウカジキの標本と比較したところ類似するタイプの椎骨であった。カジキ類の可能性はあるが、別種の標本と比較したうえで判断する必要がある。椎体の側面に切創が認められた。また、一端の下方には斜め方向に刃物の痕跡が観察でき、その部分から折れて欠損した状態となっており、解体調理されたことが分かる。

（4）爬虫綱

スッポン　第 3 遺構面の SD06 でスッポンの腹甲骨板（剣上腹骨板の左右各 1 点、下腹骨板右 1 点、中腹骨板右 1 点）が 4 点確認された（No.33 ～ 36）。大きさ的に揃っており、同一個体のものである可能性が高い。甲羅の前後長が 18㎝のオスの現生骨格標本よりも大きい個体であった。

（5）鳥綱

サギ科の一種　第 3 遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）でサギ科と考えられる上腕骨右 1 点を確認した（No.39）。近位端の一部が欠損しているが、アオサギ大の個体の近位から遠位部破片である。

ツル科の一種　第 2 遺構面の SD01 でツル科の上腕骨左 1 点を確認した（No.6）。マナヅル大で遠位側面に複数の削られたような痕跡と切創が 3 箇所認められた。

他の鳥類　鳥類は合計 7 点出土しており、上記の資料以外に、第 2 遺構面の SD01 から種不明の大腿骨右 1 点（No.3）、脛足根骨左 2 点（No.4・5）、尺骨左 1 点（No.7）、また第 3 遺構面の SD06 から複合仙骨 1 点を確認した（No.31）。大腿骨（No.3）はニワトリよりも細身で長く、近位の形態はサギ科に似るものである。遠位端に切断されたと考えられる痕跡が認められた。脛足根骨の一方（No.5）はツル科に似るもので、もう一方（No.4）は形態が No.5 とほぼ同一であるが少し小さい個体である。いずれも遠位側に切断の痕跡が認められる。尺骨（No.7）はツル科とはやや形態が異なり、コウノトリに似るものである。複合仙骨はニワトリ大のものであった。以上のことから、複数の鳥類が含まれている可能性が指摘できる。

（6）哺乳綱

ヒト　第 2 遺構面の SK18 でヒトの大腿骨左が 1 点確認されている（No.17）。両端部が欠損した近位部から遠位部片で、埋設の過程で両端部の海綿質は消失したものと考えられる。切創などの人為的な痕跡は観察されなかった。

イヌ　第 2 遺構面の SD01 でイヌの上腕骨右 1 点（No.13）と大腿骨左 2 点（No.14・15）、また第 3 遺構面の SK36 から上腕骨右 1 点（No.24）、橈骨右 1 点（No.25）、尺骨右 1 点（No.26）の合計 6 点が出土している。尺骨以外の資料はほぼ完形で、うち大腿骨 1 点の骨幹部後方面に長軸と同方向に切創の可能性がある痕跡を確認することができた。

ネコ　第 2 遺構面の SD01 で尺骨左 1 点（No.2）、第 3 遺構面の SD06 で肩甲骨右 1 点（No.29）と前頭骨から頭頂骨、後頭骨にわたる頭蓋骨片 1 点（No.30）を確認することができた。尺骨の遠位には鋭い刃物による切断の痕跡が認められた。

テン？　第 2 遺構面の SD01 でほぼ完形で両端部が未化骨の脛骨左が 1 点出土している（No.16）。大きさからするとテンの可能性があるものである。幼獣標本と比較できていないが、ネコの幼獣の可能性もある。

イノシシ属　第 2 遺構面の SD01 でイノシシ属の肩甲骨左が 1 点出土している（No.12）。近位端が未化骨の若い個体のものである。ブタの可能性もあるが、形態で区別できないことからイノシシ属とした。近位内側面に長軸に対して垂直方向に複数の切創が、また後方内側面には斜め方向の 2 本の切創が認められた。

ニホンジカ　哺乳類のうち最も多くの資料が確認されたのがニホンジカで、第 2 遺構面の SD01 で橈骨右（No.9）と上腕骨左（No.10）、肩甲骨左（No.11）が各 1 点、第 3 遺構面の SD06 で橈骨右（No.27）と中手骨右（No.28）が各 1 点、また第 3 遺構面の黒褐色有機質粘土（ゴミ層）で大腿骨右（No.37）と中手骨右（No.38）が各 1 点の合計 7 点が出土している。SD01 の上腕骨と肩甲骨には一部未化骨の部分がある若獣のもので、骨端癒合時期から上腕骨は 2 歳以下の個体と考えられる（山崎 2016）。

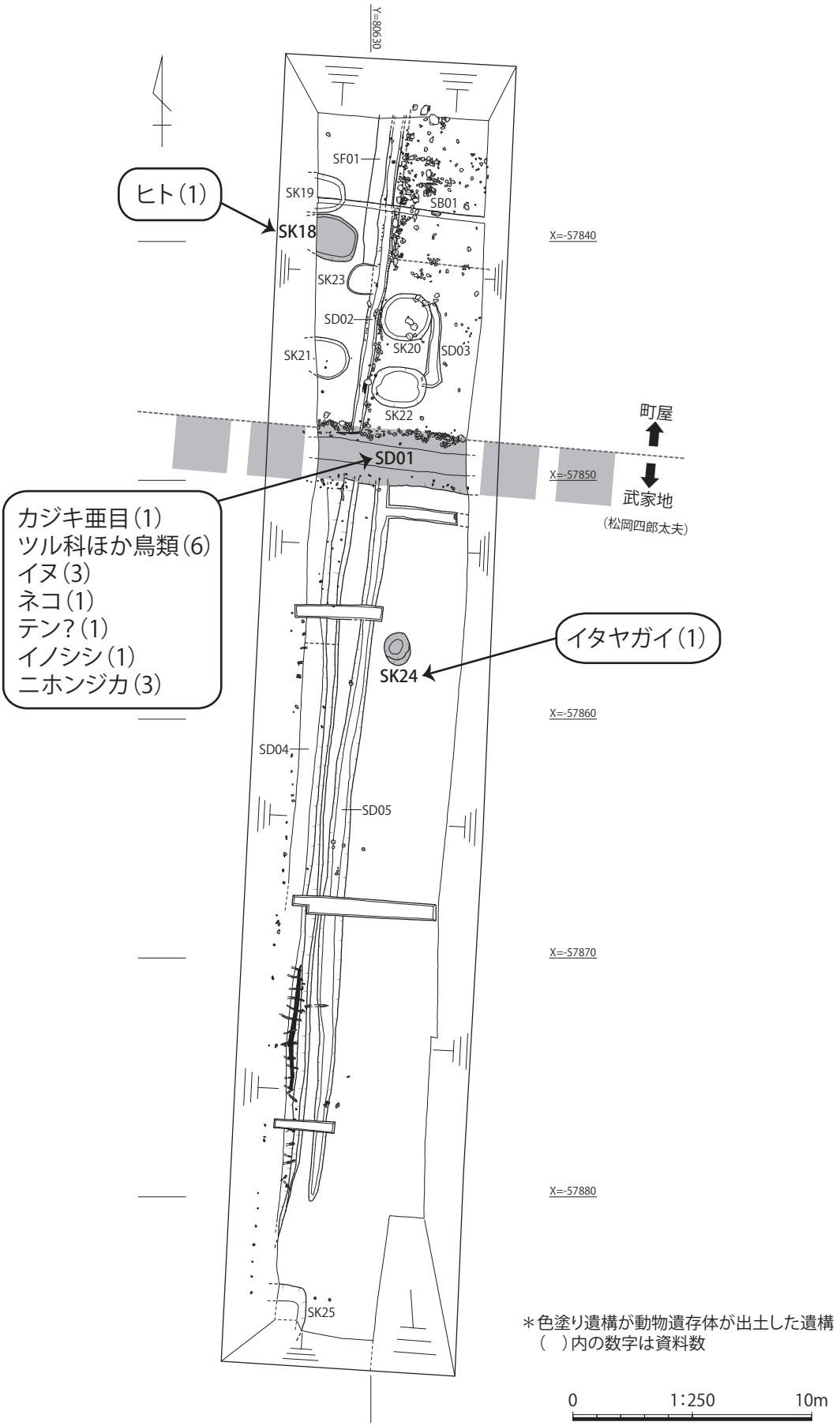
SD06 の橈骨と中手骨は両端部とも化骨済の成獣のものであり、3 歳から 4 歳以上の個体だといえる。また、黒褐色有機質粘土の大腿骨と中手骨もほぼ完形であるが、大腿骨は両端部に未化骨の部分が残り、中手骨も遠位端は未化骨の部分が確認できる。若い個体のもので、3 歳以下のものと推測される。骨角器の素材として利用されることの多い中手骨 2 点は、いずれもほぼ完形で加工の痕跡は認められないため、食肉用として四肢部分が持ち込まれて廃棄された可能性が示唆される。

3．遺構別の出土動物相の特徴

本調査区は、当該期の松江城下町絵図により、時期によって町屋と武家地、空白地と武家地であったことを知ることができる。以下では、時期別および調査地点別に出土動物相を比較し、各地点での動物資源利用の様相を考察してみたい。

第 2 遺構面：17 世紀前半（第 119 図）　第 2 遺構面で確認された SD01 は、東西方向に延びる排水機能を持つ素掘溝で、その北側の町屋と南側の武家地を明確に画する屋敷境である（第 119 図）。溝より北側の町屋の場所からは、1 部位のみであるがヒトの大腿骨が確認され、SK18 は町屋の空閑部分に形成された土壙墓の可能性がある。松江城下町遺跡では、城山北公園線調査における第 10 ブロックの米子町の町屋にあたる場所から新生児や乳幼児の骨が複数出土している（大藪 2014）。また、溝より南側の武家地内にある SK24 からはイタヤガイが 1 点のみ出土し、屋敷地内のゴミ穴に廃棄された貝殻だと推測される。

SD01 からは、魚類、鳥類、哺乳類の複数種 16 点の資料が取り上げられ、カジキ類の可能性がある椎骨、ネコの尺骨、イノシシの肩甲骨、ツル科の上腕骨など半数の 8 点に切創や切断痕が観察され、解体されたのちに廃棄されたものと理解することができる。第 2 遺構面では SD01 以外にも SD02・



第 119 図　1 区　第 2 遺構面動物遺存体出土遺構平面図

SD04・SD05 などの背割溝や屋敷地内の排水溝とされる遺構も検出されているが、それらから動物遺存体は出土していない。そのため、小規模な溝に生活ゴミなどを積極的に廃棄することはなかったものと考えられる。

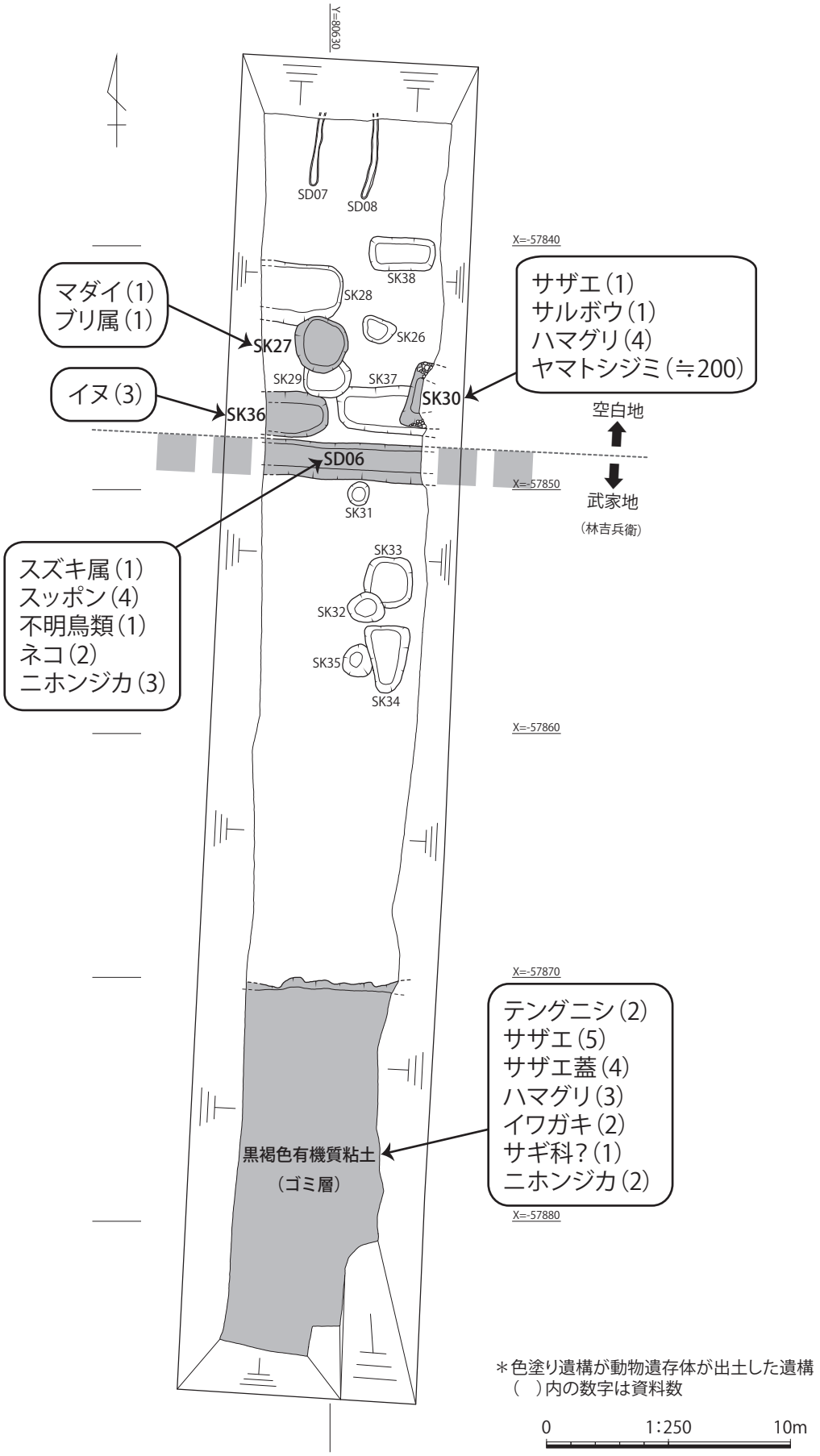
第 3 遺構面：17 世紀初頭～前半（第 120 図）　本時期においても、SD06 が北側の空白地と南側の武家地との境界を画する排水機能を持つ屋敷境と推定されている（第 120 図）。溝より北側の空白地では 3 つの土坑から動物遺存体が出土し、SK27 からはマダイとブリ属の魚類のみ 2 点が、SK30 からはサザエやヤマトシジミなど 4 種の貝類のみが、SK36 からはイヌのみ 3 点が出土している。魚類には解体痕が認められることから、SK27 と SK30 は調理後にそれらを廃棄したゴミ穴だといえる。なお、SK30 は東側調査区外にもおよぶため、さらに多くの貝類が廃棄されていた可能性がある。また、調査の結果、SK36 は土取穴と理解されているが、それらの穴にイヌが投棄されたもしくはイヌの埋葬土壙である可能性も示唆される。以上のように、空白地が生活残滓を廃棄する場所として利用されていた状況が窺える。SD06 からは、スズキ属、スッポン、鳥類、ネコ、ニホンジカの計 10 点が出土している。前述の SD01 と同様に溝からは多様な動物種が出土することが特徴だといえるが、鳥類や哺乳類などの大きめの動物遺存体が多い傾向が認められる。

南側の武家地の南半部で検出したゴミ層を造成土とする黒褐色有機質粘土（ゴミ層）からは、テングニシやサザエ、ハマグリなどの貝類とサギ科と考えられる上腕骨、ニホンジカの大腿骨など計 19 点が確認され、廃棄土坑などに含まれた資料が再堆積して残存した可能性も考えられる。ゴミ層のため資料の性格は不詳だが、城下町造成初期段階に殻長 80㎜を超えるサザエや 160㎜を超えるテングニシ、殻高 86㎜以上のイワガキなどが利用されたことを知ることができる。第 3 遺構面では SD06 につながるような溝は確認されておらず、敷地内の廃棄場所は第 2 遺構面とは異なった状況である。

4．まとめ

本稿では、松江法務総合庁舎調査地点（母衣町 50 外）から出土した動物遺存体について、巻貝 2 種、二枚貝 5 種、魚類 4 種、爬虫類 1 種、鳥類 2 種、哺乳類 6 種の 20 種を報告した。また、町屋と武家地およびその屋敷境に区別して出土状況を考察した。各敷地のわずかな範囲ではあるが、第 2 遺構面の町屋ではヒト、武家地では貝類が確認された。また屋敷境からはカジキ類の可能性がある大型魚類の椎骨など、解体痕のある資料が多く確認された。町屋では土坑が複数確認されていることから、それらに生活残滓が投棄されていた可能性もあるが、その量は多くなかったと推測される。なお、城山北公園線調査における第 10 ブロックの米子町の町屋では、加工痕のある牛角芯や四肢骨の大量出土から骨製品の加工場があったと考えられ、本調査区の町屋はそれとは異なる機能を持った場所であったと考える。さらに、町屋では敷地内に大人も埋葬していた可能性が示唆された。

第 3 遺構面では、堀尾期絵図では空白地とされる部分に多くの廃棄土坑が認められた。その他の共伴遺物も考慮する必要はあるが、土坑ごとに魚類のみ、あるいは貝類のみのように種類が限定される特徴が認められた。屋敷境からの出土は第 2 遺構面と同様に多様な種が認められた。南側の武家地では、貝類を中心に鳥類と哺乳類が少量認められたが、松江歴史館調査地点の同時期の武家屋敷地



第 120 図　1 区　第 3 遺構面動物遺存体出土遺構平面図

の出土状況と比較して、「魚類が認められない以外は貝類が主体で、鳥類と哺乳類が少量認められる」という点で共通するなどの特徴が示された。

松江城下町遺跡では、街路整備事業や新営建物建設などに伴う発掘調査の成果により、武家地や町屋の一部ではあるが、それらの場所での動物資源利用の様相が明らかとなってきた。これまでの調査成果から町屋の骨角細工工房での営みやイヌとのかかわりなどの考察も可能となった（石丸 2021）。

今後は、各調査地点での武家屋敷地の出土動物資料の比較や共伴遺物との関係、また時期的な変化にも注目し、松江城下町遺跡での動物資源利用の実態をさらに明らかにできければと考えている。

第 4 章　註

（31）調査担当者の松江市スポーツ・文化振興財団埋蔵文化財課小山泰生氏のご教示による。

（32）動物遺存体に付記した No. は表 6 の資料番号を指し、第 4 章本文中および写真図版 43 ～ 46 の資料番号と同一である。

参考文献

・阿部永監修 2008 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明著『日本の哺乳類』（改定 2 版）東海大学出版会

・石丸恵利子 2009「広島城下町の動物資源利用 - 広島城跡広島法務総合庁舎地点出土の動物遺存体 -」『広島城跡法務総合調査地点 - 広島市中区上八丁堀所在 -』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 16 集 財団法人広島市文化財団編　付編 3-1pp.1-48

・石丸恵利子 2018「松江城下町遺跡における動物資源利用」『松江城下町遺跡第 1 ブロック（殿町 198-7 外）第 13 ブロック（南田町 108-1 外）第 14 ブロック（南田町 101-21 外）第 16 ブロック（南田町 130-6 外・134-1 外）総括編』城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 8、松江市教育委員会・松江市スポーツ・文化振興財団 pp.185-192

・石丸恵利子・江田真毅 2011「松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）にみられる松江藩の家老屋敷における動物資源利用」『松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）発掘調査報告書－松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書－自然科学分析・写真図版編』松江市文化財調査報告書第 139 集、松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、pp.37-57

・石丸恵利子 2021「松江城下町の食環境と動物資源利用—松江城下町遺跡出土動物遺存体の分析を通して－」『松江城研究』3、pp.41-58

・大藪由美子 2014「松江城下町遺跡から出土した江戸時代の子供の人骨」『松江城下町遺跡第 1 ブロック（東側）第 6 ～ 10 ブロック・第 12 ブロック』城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 3、松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団、pp.264-269

・奥谷喬司編著 2017『日本近海産貝類図鑑』第二版、東海大学出版部

・高田榮一・大谷勉 2011『原色爬虫類・両生類検索図鑑』北隆館

・中坊徹次編 2013『日本産魚類検索　全種の同定』第三版、東海大学出版会

・山崎 健 2016「ニホンジカの骨端癒合時期」『動物考古学』第 33 号、日本動物考古学会、pp.35-48

・森岡弘之編修 2008 宇田川龍男原著『原色新鳥類検索図鑑』北隆館

・Driesch, Angela Von Den 1976 *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1*, Peabody Museum Press, Cambridge

表 4　松江城下町遺跡（母衣町 50 外）出土動物遺存体種名一覧

	綱	目	科	属 / 種
軟体動物門 Mollusca	腹足綱 Gastropoda	古腹足目 Vetigastropoda	サザエ科 Turbinidae	サザエ *Turbo cornutus*
		新生腹足目 Caenogastropoda	テングニシ科 Melongenidae	テングニシ *Hemifusus tuba*
	二枚貝綱 Bivalvia	フネガイ目 Arcoida	フネガイ科 Arcidae	サルボウ *Scapharca kagoshimensis*
		カキ目 Ostreoida	イタヤガイ科 Pectinidae	イタヤガイ *Pecten albicans*
			イタボガキ科 Ostreidae	イワガキ *Crassostrea nippona*
		マルスダレガイ目 Veneroida	シジミ科 Corbiculidae	ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
			マルスダレガイ科 Veneridae	ハマグリ *Meretrix lusoria*
	硬骨魚綱 Osteichthyes	スズキ目 Perciformes	スズキ科 Percichthyidae	スズキ属の一種 *Lateolabrax japonicus* sp.
			アジ科 Carangidae	ブリ属の一種 *Seriola* sp.
			タイ科 Sparidae	マダイ *Pagrus major*
			カジキ亜目の一種 Xiphioidei fam., gen. et sp. indet.	
	爬虫綱 Reptilia	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	スッポン *Pelodiscus sinensis*
	鳥綱 Aves	コウノトリ目 Ciconiiformes	サギ科の一種 Ardeidae gen. et sp. indet.	
		ツル目 Gruiformes	ツル科の一種 Gruidae gen. et sp. indet.	
	哺乳綱 Mammalia	霊長目 Primates	ヒト科 Hominidae	ヒト *Homo sapience*
		食肉目 Carnivora	イヌ科 Canidae	イヌ *Canis familiaris*
			ネコ科 Felidae	ネコ *Felis catus*
			イタチ科 Mustelidae	テン？ *Martes melampus*
		偶蹄目 Artiodactyla	イノシシ科 Suidae	イノシシ属 *Sus scrofa*
			シカ科 Cervidae	ニホンジカ *Cervus nippon*

＊種名は、奥谷編著 (2017)、中坊編 (2013)、高田・大谷 (2011)、森岡編 (2006)、阿部監修 (2008) により、命名者・年号は除いた。

表 5　遺構別出土動物相

		【町屋】			【屋敷境】	【武家地】
		SK18			SD01	SK24
第 2 遺構面	17C 前半	ヒト (1)			カジキ亜目 (1) ツル科ほか鳥類 (6) イヌ (3) ネコ (1) テン？ (1) イノシシ (1) ニホンジカ (3)	イタヤガイ (1)
		【空白地】			【屋敷境】	【武家地】
		SK27	SK30	SK36	SD06	黒褐色有機質粘土
第 3 遺構面	17C 初頭～前半	マダイ (1) ブリ属 (1)	サザエ (1) サルボウ (1) ハマグリ (4) ヤマトシジミ (≒ 200)	イヌ (3)	スズキ属 (1) スッポン (4) 不明鳥類 (1) ネコ (2) ニホンジカ (2)	テングニシ (2) サザエ (5) サザエ蓋 (4) ハマグリ (3) イワガキ (2) サギ科？ (1) ニホンジカ (2)

＊（　）内の数字は資料点数

表 6　松江城下町遺跡（母衣町 50 外）動物遺存体一覧

資料No.	遺構面	遺構名	分類群	種名	部位	部分	左右	数量	観察	計測値 (mm)
1	第 2 遺構面	SK24	二枚貝綱	イタヤガイ	―	―	L	1	―	殻長 :124.71、殻高 :105.5
2	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	ネコ	尺骨	近位～遠位部	L	1	遠位は切断あり（前方から後方にかけて斜め：左上から右下方向）。近位化骨済、一部欠損。	DPA:13.22,SDO:10.44
3	第 2 遺構面	SD01	鳥綱	不明	大腿骨	近位～遠位	R	1	骨頭と遠位端切断ありか？（骨頭は欠損の可能性）。近位はサギ科に似る、ニワトリより細身で長い。	GL:90mm 以上
4	第 2 遺構面	SD01	鳥綱	不明	脛足根骨	骨幹部～遠位部？	L	1	NO.5 に似るがやや小。骨幹部側欠損、遠位側は切断？	―
5	第 2 遺構面	SD01	鳥綱	不明	脛足根骨	骨幹部～遠位部	L	1	ツル科に似る。骨幹部側は欠損、遠位は切断。	―
6	第 2 遺構面	SD01	鳥綱	ツル科	上腕骨	ほぼ完形	L	1	マナヅル大、端部欠損あり、遠位側面に複数の削られたような痕跡と切創が全 3 カ所あり。	GL:212.8
7	第 2 遺構面	SD01	鳥綱	不明	尺骨	ほぼ完形	L	1	コウノトリに似る。ツルとは異なるか（橈骨関節面に稜なし）。近位端欠損。	GL:275mm 以上
8	第 2 遺構面	SD01	硬骨魚綱	カジキ亜目？	椎骨	―	―	1	側面に切創、後方下方切断あり。バショウカジキ標本に類似するタイプか？	―
9	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	近位部～遠位部	R	1	両端部欠損、表面の摩滅顕著。	―
10	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	遠位	L	1	若獣、一部未化骨あり。	Bd:37.48,BT:33.02
11	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	ほぼ完形	L	1	若獣、近位一部未化骨。	HS:145.92,SLC:16.71, LG:26.34,BG:24.64
12	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	イノシシ属	肩甲骨	遠位欠損	L	1	幼獣、近位未化骨、近位内側面に長軸に対して垂直に複数の切創、後方内側面に斜の 2 本の切創。	GLP:23.93, SLC:16.15,BG:15.76
13	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	イヌ	上腕骨	ほぼ完形	R	1	―	GL:153.4,Dp:34.65, Bp:29.6,Bd:29.58
14	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	イヌ	大腿骨	ほぼ完形	L	1	骨頭・大転子に欠損あり。	GL:158.39,GLC:162.06. Bp:34.89,Bd:28.05
15	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	イヌ	大腿骨	完形	L	1	骨幹部後方面に長軸方向に切創？	GL:154.15,GLC:153.77, Bp:33.02,Bd:28.72
16	第 2 遺構面	SD01	哺乳綱	テン？	脛骨	ほぼ完形	L	1	幼獣、両端部未化骨か。ネコの幼獣の可能性もあり。	GL:72.66
17	第 2 遺構面	SK18	哺乳綱	ヒト	大腿骨	近位部～遠位部	L	1	―	―
18	第 3 遺構面	SK27	硬骨魚綱	マダイ	上後頭骨	―	―	1	―	③ 33.63, ④ 2.08, ⑤ 13.18
19	第 3 遺構面	SK27	硬骨魚綱	ブリ属	主鰓蓋骨	前方下方破片	L	1	内側から刃物が入る痕跡が多数あり切断。	体長 57cm より大
20	第 3 遺構面	SK30	腹足綱	サザエ	―	―	―	1	棘あり。	殻長 :89mm 以上
21	第 3 遺構面	SK30	二枚貝綱	サルボウ	―	―	R	1	―	殻長 :44.26 以上、殻高 40.64
22	第 3 遺構面	SK30	二枚貝綱	ハマグリ	―	―	―	4	R2,L1, 不明 1	R: 殻長ー , 殻高 33.49、R: 殻長 50.8 以上 , 殻高 40.6 以上、L: 殻長 49.04, 殻高 40.96
23	第 3 遺構面	SK30	二枚貝綱	ヤマトシジミ	―	―	―	4	R3,L1	"R: 殻長 36.52,36.04,37.21, 殻高 32.81,37.22,32.79, L: 殻長 37.35 殻高 33.25"
24	第 3 遺構面	SK36	哺乳綱	イヌ	上腕骨	完形	R	1	―	GL:154.35,Bd25.78:, Dp:35.71,Bd:30.18
25	第 3 遺構面	SK36	哺乳綱	イヌ	橈骨	完形	R	1	―	GL:150.5,Bp:16.55,　Bd:21.61
26	第 3 遺構面	SK36	哺乳綱	イヌ	尺骨	遠位端欠損	R	1	―	DPA:19.27,　SDO:18.03
27	第 3 遺構面	SD06	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	完形	R	1	大型。	GL:221.91,Bp:41.93,Bd:41.06
28	第 3 遺構面	SD06	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	完形	R	1	大型。	GL:212.36,Bp:32.01,Bd32.44
29	第 3 遺構面	SD06	哺乳綱	ネコ	肩甲骨	―	R	1	―	HS:14.68, SLC:12.38,GLP:14.45
30	第 3 遺構面	SD06	哺乳綱	ネコ	頭蓋骨	―	―	1	―	―
31	第 3 遺構面	SD06	鳥綱	不明	複合仙骨	―	―	1	ニワトリ大。	―
32	第 3 遺構面	SD06	硬骨魚綱	スズキ属	歯骨	―	L	1	後方下方が斜に切断。	⑤ 9.24, ⑥ 9.27, ⑦ 9.5, ⑨ 12.15, ⑬ 3.6
33	第 3 遺構面	SD06	爬虫綱	スッポン	剣上腹骨板	―	L	1	標本オスより大。33 ～ 36 は同一個体のものと考えられる。	―
34	第 3 遺構面	SD06	爬虫綱	スッポン	剣上腹骨板	―	R	1	―	―
35	第 3 遺構面	SD06	爬虫綱	スッポン	下腹骨板	―	R	1	―	―
36	第 3 遺構面	SD06	爬虫綱	スッポン	中腹骨板	―	R	1	―	―
37	第 3 遺構面	ゴミ層	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	ほぼ完形	R	1	近位未化骨、遠位も接合面残る。	Bd:49.28
38	第 3 遺構面	ゴミ層	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	ほぼ完形	R	1	遠位端未化骨、遠位端欠損。	Bp:28.87
39	第 3 遺構面	ゴミ層	鳥綱	サギ科？	上腕骨	近位～遠位部	R	1	近位端の一部欠損、アオサギ大。	Bp:26.83
40	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	テングニシ	―	―	―	1	大型、結節型。	殻長 200 以上、殻幅 104
41	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	テングニシ	―	―	―	1	やや大型、結節型。	殻長 160mm 以上
42	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	―	―	―	1	有棘。	殻長 84.04、殻幅 66.96
43	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	―	―	―	1	有棘。	殻長 84.39
44	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	―	―	―	1	有棘。	殻長 80.09
45	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	殻軸	―	―	1	棘不明。	―
46	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	蓋	―	―	1	―	長軸 33.92、短軸 30.09
47	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	蓋	―	―	1	―	長軸 33.46、短軸 30.07
48	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	蓋	―	―	1	―	長軸 32.68、短軸 29.26
49	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	蓋	―	―	1	―	長軸 31.28、短軸 28.21
50	第 3 遺構面	ゴミ層	二枚貝綱	ハマグリ	―	―	L	1	―	殻長 78.64、殻高 59.19
51	第 3 遺構面	ゴミ層	二枚貝綱	ハマグリ	―	―	L	1	―	殻長 61.13、殻高 48.6
52	第 3 遺構面	ゴミ層	二枚貝綱	ハマグリ	―	―	L	1	―	殻高 52.61
53	第 3 遺構面	ゴミ層	二枚貝綱	イワガキ	―	―	R	1	―	殻長 70.88、殻高 86.31 以上
54	第 3 遺構面	ゴミ層	二枚貝綱	イワガキ	―	―	R	1	―	殻長 75.12
55	第 3 遺構面	ゴミ層	腹足綱	サザエ	―	―	―	1	殻頂部。	―

＊計測値欄のアルファベット記号は、Driesch(1976) による。

第 5 章　総括

松江法務総合庁舎新営工事に先立ち、発掘調査対象範囲において、1 区と 2 区に調査区を分けて本発掘調査を実施した。前章までに発掘調査の成果を示し、今回の調査で検出した遺構と遺物についての報告を行った。本章ではこれらの調査成果に基づき、第 1 節では本遺跡で検出した遺構面の時期と変遷を整理することで各時期の特徴を述べる。第 2 節では本遺跡で出土した陶磁器に重点を置いて各時期の陶磁器組成について検討を行う。第 3 節では 17 世紀代初頭～前半の堀尾期における屋敷地の規模の想定復元と造成工法を中心とした考察を加える。いずれも調査成果と併せて、調査地周辺の絵図資料や文献記録などの検討を含めながら、調査報告のまとめとしたい。

第 1 節　遺構面の時期と変遷

第 1 項　遺構面の時期区分

今回の調査は、1 区では広範囲の調査面積を確保することが可能であったため、面的な調査を行うことができたが、2 区では現庁舎の建物基礎および地中梁が残っていた場所にあたり、狭小な調査面積しか確保することができず、トレンチ調査に切り替えて調査を行った。そのため、本節では重層的な遺構面の調査を実施することが可能であった、1 区の調査成果を中心とした時期区分を提示する。

遺構面の時期区分は、年代が古い順に第Ⅰ～Ⅳ期の 4 つの区分とした。時期区分の内訳は、第Ⅰ期を城下町形成以前、第Ⅱ期を堀尾氏が松江城築城および城下町建設を開始して松江を統治し始めた 17 世紀代初頭～前半（堀尾期）、第Ⅲ期を京極氏が松江を統治していた 17 世紀代前半（京極期）、第Ⅳ期を松平氏が松江を統治していた江戸時代後半～終末期の 19 世紀代前半～中頃（松平期）の 4 時期である。以下では、各時期の遺構面の変遷について詳述する。

第 2 項　遺構面の変遷

第Ⅰ期【城下町形成以前】（第 121 図）

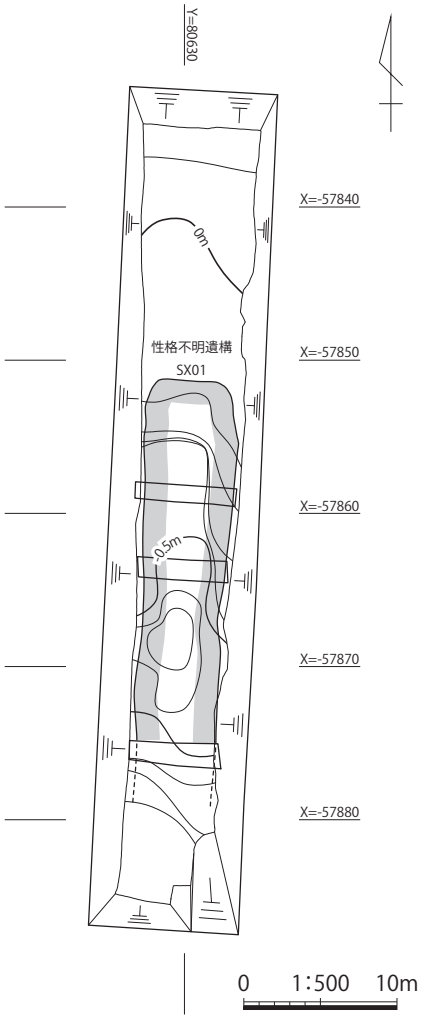
検出遺構　1 区の第 4 遺構面で検出した遺構群を第Ⅰ期に位置付けた。当該期の遺構は、性格不明遺構 1 基（SX01）を検出した。

遺構面の様相　今回の発掘調査で検出した最も古い時期の遺構面は、標高 0.00 ～ 0.10mに堆積する土壌分解が進んだ有機質の黒褐色粘質土を検出した第 4 遺構面で、城下町形成以前の旧地表面に位置付けている。調査地周辺の母衣町地内に所在する松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29 外)[33] で検出した旧地表面（第 5 遺構面）では、水田の畦畔や耕作面を検出した水田跡が見つかっているが、本遺跡で同様の遺構は確認できなかった。

調査区の中央～南端で検出した SX01 は、平面形は長楕円形を呈し、規模は上縁長軸 30.00m以上、短軸 6.00m、深さ 50 ～ 100㎝を測る。掘り方は歪んだ U 字状を呈し、調査区内の北側から南側に向かって浅くなっている。SX01 は、城下町形成以前の旧地表面の直下で検出した遺構で、旧地表面を形成する黒褐色粘質土が堆積する以前の段階に人為的に掘り込まれ、埋土は自然に堆積したものと

捉えている。埋土中には植物片や微細な有機物が含まれ、アナジャコの可能性がある生痕も確認した。

土壌分析による AMS 年代測定の結果、SX01 の埋土の堆積時期は 15 世紀中頃（1422 ～ 1454calAD）の年代値を示すという成果が得られた。遺構の時期は城下町形成以前の中世後半に位置付けられるものの、遺構の性格については土坑なのか溝なのか用途不明な点があるため、今後の調査事例の増加を待ちたい。



第 121 図　第 4 遺構面遺構配置図

第Ⅱ期【17 世紀代初頭～前半】（第 122・123 図）

検出遺構　1 区の第 3 遺構面で検出した遺構群を第Ⅱ期に位置付けた。当該期の遺構は、溝 3 条（SD06 ～ 08）、土坑 13 基（SK26 ～ 38）のほかに、調査区南側で武家地の屋敷地内における造成土と第 3 遺構面の整地段階に施された黒褐色有機質粘土（ゴミ層）の広がりを確認した。

遺構面の様相　第 3 遺構面は、標高 0.30 ～ 0.50mで検出した遺構面である。この時期に該当する絵図に堀尾期松江城下町絵図（1620 ～ 1633 年）があり、1 区が比定する地点には北側に空白地[34]、南側に武家地が描かれている（第 7 図および第 122 図）。

空白地と武家地は、東西方向の界線によって明確に区画されており、屋敷境溝 SD06 がこの境界線にあたるものと考えている。SD06 は、堀尾期のなかでも城下町形成に際して掘削された初期段階の遺構に位置付けられ、空白地と武家地の排水を集約するための素掘り溝で、空白地と武家地との境界を画するための屋敷境である。

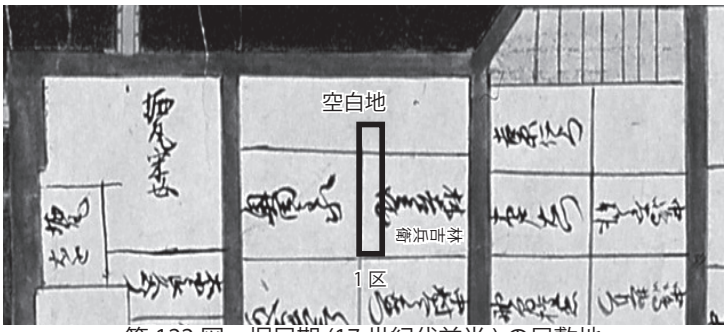
南側の武家地については、堀尾期絵図に「林吉兵衛」の記載があり、第 3 遺構面の武家地側の造成土から出土した荷札木簡（第 104 図 -1）からも当地の屋敷地の拝領者が窺える。この荷札木簡は、片面に「堀尾山城守　荷物」、その裏面に「林吉兵衛殿参　奥田新右衛門」の墨書をもち、木簡に書かれている「林吉兵衛」が堀尾期絵図に記載される屋敷主の名前と一致するという点で、当地が「林吉兵衛」の屋敷地であることを裏付けている。なお、木簡に書かれている「堀尾山城守」は当該期の藩主である堀尾忠晴のことを指し、現存する書状などから慶長 16（1611）年～寛永 10（1633）年の 22 年間にわたって「堀尾山城守」と呼称されていることが分かっており、荷札木簡と共伴して出土した陶磁器の年代は、慶長期後半～寛永期前半に絞ることが可能である点を指摘しておきたい。

さらに、第 3 遺構面の空白地と武家地の遺構配置に目を転じてみると、土坑（SK26 ～ 38）が多いことが特徴的である。特に空白地でその様相が顕著に見られ、埋土に動物遺存体を含む廃棄土坑

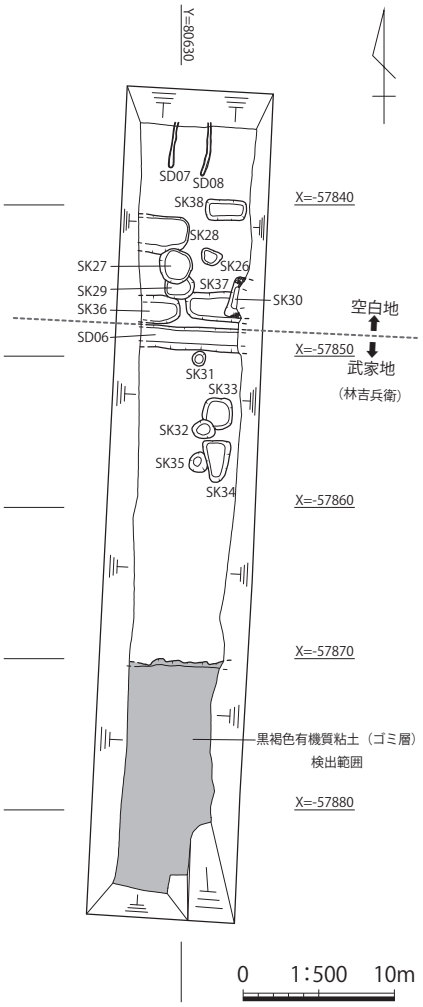
（SK27・30）も確認している。このことは、空白地が生活残滓を廃棄する場所として利用されていたものと捉えることができ、当該期の空白地の利用形態を示している。(35)

また、SD06 の北側に隣接する位置で検出した SK36・37 は、長軸 2.20 ～ 3.50m以上、短軸 1.80mを測る大型土坑で、埋土の最下層は無遺物層であることから、当初は城下町建設時の造成土採掘を目的とした土取穴として機能していたが、土坑を埋め戻す段階で有機物（ゴミ）も投入している。

当該期の造成工法は、SD06 を境に南側で島状整地を確認している。島状整地に利用された土砂は、南側の武家地では緑灰色シルト質軟砂岩が使用されている。一方で、空白地では灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土が使用されていることから、空白地と武家地では「造成に時期差が生じている」ことや「造成土の供給場所が異なる」ということが考えられる。



第 122 図　堀尾期 (17 世紀代前半) の屋敷地



第 123 図　第 3 遺構面遺構配置図

第Ⅲ期【17 世紀代前半】（第 124 ～ 127 図）

検出遺構　1 区の第 2 遺構面で検出した遺構群を第Ⅲ期に位置付けた。当該期の遺構は、礎石建物跡 1 棟（SB01）、溝 5 条（SD01 ～ 05）、通路跡 1 条（SF01）、土坑 8 基 (SK18 ～ 25) を検出した。

遺構面の様相　第 2 遺構面は、標高 0.50 ～ 0.60mで検出した遺構面である。この時期に該当する絵図に寛永年間松江城家敷町之図（1634 ～ 1637 年）があり、1 区が比定する地点には北側に町屋、南側に武家地が描かれている（第 8 図および第 124 図）。

町屋と武家地は、堀尾期絵図と同様に東西方向の界線で南北に区画されており、屋敷境溝 SD01 がこの境界線にあたるものと考えている。SD01 の検出位置は、第 3 遺構面の屋敷境溝 SD06 と同じ位置につくられており、南北の屋敷地の境界は変わっていない。武家地で検出した南北溝 SD04 は、京極期絵図に記載がある「松岡四郎太夫」と「奥田主水」の東西に配置された屋敷地の境界となる背割溝として位置付けられる。背割溝は、一般的に他の屋敷境溝と比べて規模が大きい。

そして、ここでは調査区北側で検出した町屋の遺構群についてまとめておきたい。当該期の町屋の遺構は、第 2 遺構面で検出した礎石建物跡 SB01 およびその付属施設である区画境溝 SD02 が該当す

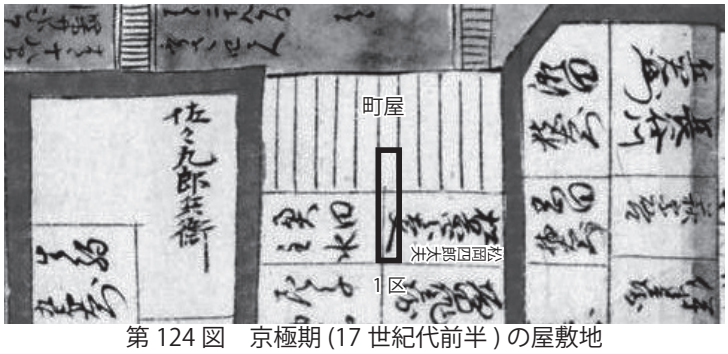
る。これらの遺構は、京極期絵図に見る短冊状に配置された町屋の遺構群として捉えることができる（第 124 図）。SB01 の規模は、南北桁行 6.00m以上、東西梁行 4.50m以上を測り、建物の主軸方位はＮ－ 4°－Ｅである。遺構の検出位置から、母屋の南西角付近を検出したものと考えられ、平面形は南北方向に長い建物を想定している。SB01 の西側で検出した南北溝 SD02 は、町屋の敷地を区画するための敷地境溝で、排水機能をもつ（第 126 図）。

これらの町屋を構成する建物と敷地境溝のセット関係は、数多くの町屋の発掘調査が進められている大阪府や兵庫県などの城下町遺跡で確認されており、17 世紀代前半の遺構群に類例がある。このうち、大坂城下町遺跡（船場城下町）の発掘調査では、町屋の構造について詳細な検討がなされている（第 127 図）。この発掘成果では、「船場城下町は 40 間間隔で東西南北の道路を敷設し、整然とした碁盤目の正方形街区で、その中の敷地は短冊状地割となっている。町屋の敷地の規模は、間口が概ね３～４間、奥行が概ね 10 ～ 15 間で、道路側に間口を開く小規模な敷地で隣地とは溝で区切られている。母屋は通りに面した間口付近に礎石建物や掘立柱建物が配置され、裏地（敷地の奥側）は空閑地あるいはゴミ捨て場（廃棄土坑）となっている。」と報告されている。[36]

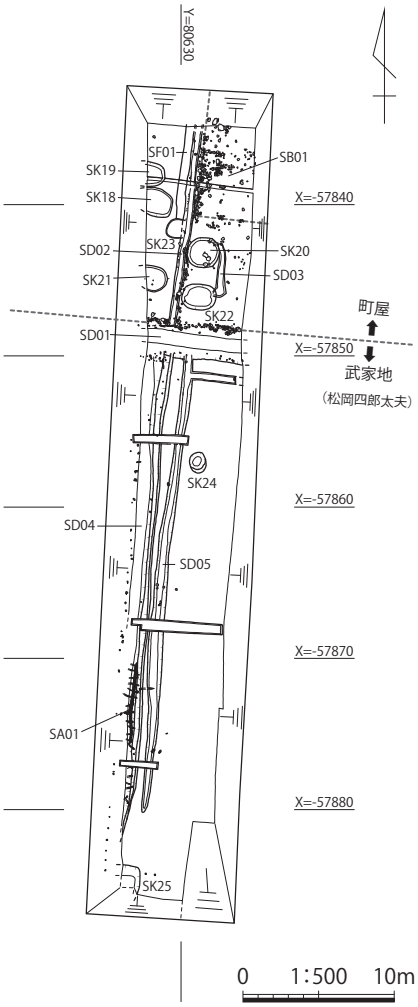
今回の調査で検出した町屋の遺構群について、大坂城下町遺跡で検出された町屋の構造と比較すると「母屋が道路側に配置される」、「敷地の裏地部分に空閑地をもち、その一画に廃棄土坑がある」、「隣地とは溝で区切られている」という共通点が見られる。

また、第２遺構面の陶磁器組成から当該期の年代を捉えると、肥前陶器の生産地の年代観では、1594 ～ 1610 年代の胎土目製品に加えて 1610 ～ 1630 年代の砂目製品（溝縁皿）が共伴する時期にあたる。松江での詳細な陶磁器編年は確立していないため、肥前の陶磁器編年を参考にすると、第２遺構面の陶磁器組成は「1620 年代～ 1630 年代」となる。[37]

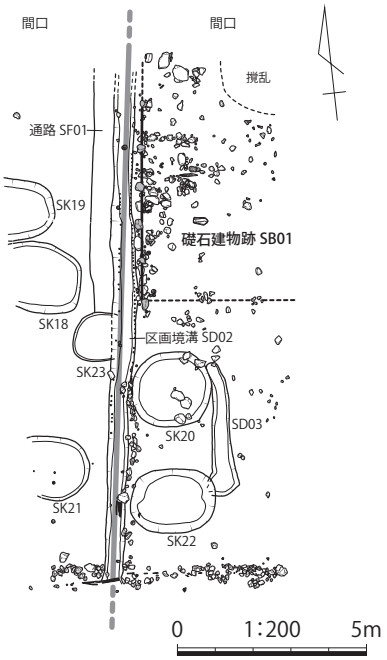
この時期は、松江では 1633 ～ 1638 年の間に堀尾氏→京極氏→松平氏と藩主が目まぐるしく交代する時期に該当し、当然、家臣の屋敷地も入れ替わっており、遺構面との関連が注目される。第２遺構面で検出した町屋跡は、京極期絵図に見る「町屋」に比定することが可能であることから、当該期の遺構に位置付けることができる重要な成果が得られた。



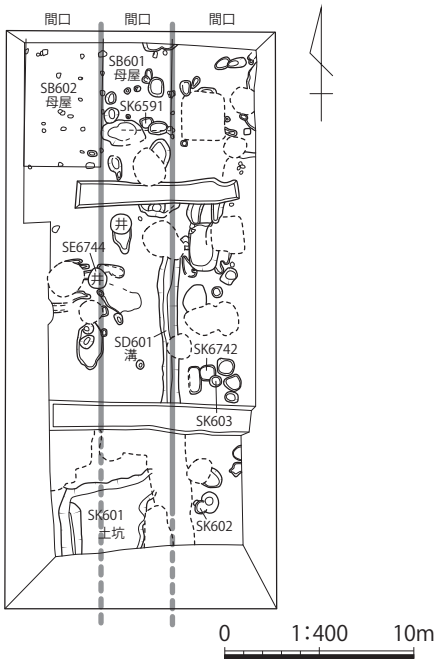
第 124 図　京極期 (17 世紀代前半) の屋敷地



第 125 図　第２遺構面遺構配置図



第 126 図　17 世紀代前半の松江の町屋跡 (今回調査)



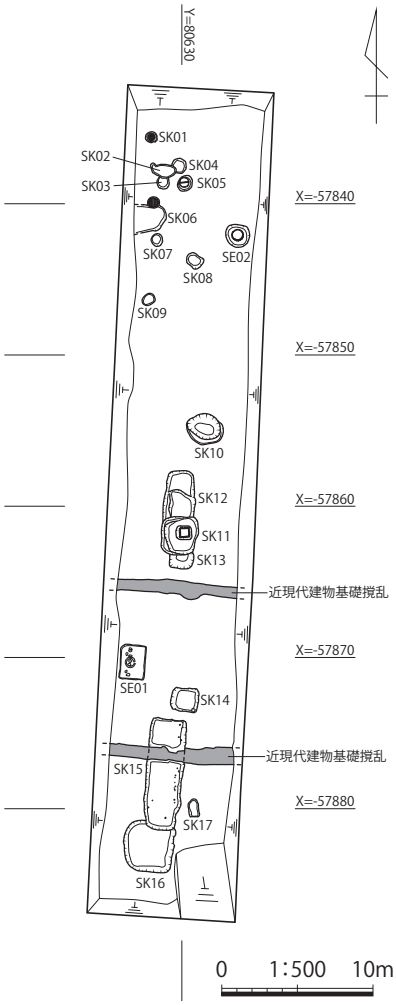
第 127 図　17 世紀代前半の大坂の町屋跡 (船場城下町)

第Ⅳ期【19 世紀代前半～中頃】（第 128 図）

検出遺構　1 区の第 1 遺構面で検出した遺構群を第Ⅳ期に位置付けた。当該期の遺構は、土坑 17 基 (SK01 ～ 17)、来待石製井戸 1 基（SE01）、木枠井戸 1 基（SE02）を検出した。

遺構面の様相　第 1 遺構面は、標高 1.00 ～ 1.20mで検出した遺構面である。調査区の北側で検出した SK01・05・06 は土坑中に埋桶をもつもので、これらは便槽遺構と捉えている。調査区の中央～南側で検出した土坑 SK11・12・15・16 は、長軸 2.50 ～ 7.40 m、短軸 2.10 ～ 3.30mを測る大型廃棄土坑である。

第 1 遺構面の陶磁器組成は、17 世紀代後半～ 18 世紀代後半までの陶磁器が極端に少なく、19 世紀代前半～中頃が主体で、明治以降の近代の陶磁器が少量入る。この「17 世紀代後半～ 18 世紀代後半までの陶磁器が極端に少ない」という点については、屋敷地内の利用形態に起因するものと考えている。その理由として、当該期の松平期絵図を通して今回の調査地を概観すると、1 区はいずれも武家地の屋敷地内の裏地部分に該当する。今回の調査では 17 世紀代後半～ 18 世紀代後半の遺構は木枠井戸 SE02 以外に検出していないため、この時期の屋敷地内の裏地は空閑地となっていたことが考えられ、19 世紀代になると生活残滓を廃棄する場所として利用されていたものと想定している。



第 128 図　第 1 遺構面遺構配置図

第２節　松江城下町遺跡（母衣町 50 外）の陶磁器組成

前述した時期区分に基づき、ここでは各時期の産地別陶磁器組成をまとめておきたい。陶磁器組成を提示するにあたり、本節では第Ⅰ期は陶磁器が出土していないため、第Ⅱ～Ⅳ期の３つの時期を対象とする（表７～９）。

本節で扱った各時期の陶磁器の詳細は、第Ⅱ期は堀尾期の木簡が出土して屋敷主と時期が特定できる「第３遺構面の林吉兵衛屋敷」、第Ⅲ期は絵図の記載から京極期に限定できる「第２遺構面の町屋跡」から出土した陶磁器をそれぞれ取り扱う。第Ⅳ期は建物跡や屋敷境溝が確認できなかったため、「第１遺構面の遺構内および遺構面」から出土した陶磁器を一括して取り扱っている。

［第Ⅱ期］　17 世紀代初頭～前半（堀尾期：1 区　第 3 遺構面　林吉兵衛屋敷）

第Ⅱ期は、堀尾氏が富田から松江に移り、松江城築城および城下町建設を行って松江の統治を始めた 17 世紀第１四半期にあたる時期である。

貿易陶磁器

青磁の出土が無く、白磁の皿が１点出土するが、大半は青花で占められている。青花の小坏・碗・皿は景徳鎮系と漳州窯系である。景徳鎮系の小坏は口縁部が端反の小坏（小坏Ⅰ類）がある。碗は饅頭心の碗（碗Ｅ群）が無く、底部が平坦な碗（碗Ｇ群）や底部が高台内に窪む碗（碗Ｈ群）が主体である。皿は口縁部が内湾する皿（皿Ｅ群）が主体である。漳州窯系の青花の碗・皿には蓮子碗（碗Ｃ群粗製）や鍔皿（皿Ｆ群粗製）がある。白磁は体部を緩く内湾させる皿（皿 E1 群）がある。

国産陶磁器

肥前陶器が大半を占める状況で、瀬戸美濃陶器と備前が少量出土する。瀬戸美濃陶器は、柿釉黒釉掛け分けの丸碗・灰釉内禿皿・鉄釉折縁皿・青織部の変形皿がある。生産地の年代観で大窯製品編年第４段階前半 (1590 ～ 1600 年代) のものが主体である。備前は徳利と擂鉢があり、乗岡編年近世 1c 期 (1600 ～ 1620 年代) のものが主体である。

肥前陶器は、生産地の年代観で九陶Ⅰ -1 期（1580 年代～ 1594 年頃）の岸岳系陶器の碗が２点と皿が１点出土しているが、主体となるのは九陶Ⅰ -2 期（1594 ～ 1610 年代）のものである。碗は丸碗・天目形碗・筒形碗・杉形碗があり、鉄釉や灰釉を施すものが多い。皿は胎土目が中心だが、目積みをしない段階の皿が少量見られる。出土量が多いのは丸皿と折縁皿の組み合わせで、なぶり口の口縁をもつ皿が含まれる。碗皿類の高台は露胎で、透明釉に鉄絵を施した絵唐津が目立ち、鉄絵文様は細かく表現されて丁寧に描かれるものと簡素なものが共伴する。肥前擂鉢は口縁端部を丸くおさめるものと内側に若干尖らせるものがあり、口縁部周辺から胴部上方に鉄釉を施すものが多い。

表７　第Ⅱ期（第３遺構面）　産地別陶磁器組成

遺構面	遺構名	貿易陶磁器			国産陶器									国産磁器			
		中国青磁	中国白磁	中国青花	肥前陶器	瀬戸美濃陶器	京信系陶器	萩系陶器	在地系陶器	肥前擂鉢	備前擂鉢	堺・明石擂鉢	須佐擂鉢	肥前磁器	瀬戸美濃磁器	淡路磁器	在地系磁器
第３面	SD06			●	●	●											
	ゴミ層				●	●				●	●						
	遺構外		●	●	●	●				●	●						

［第Ⅲ期］　17 世紀代前半（京極期：1 区　第 2 遺構面　町屋跡）

第Ⅲ期は、堀尾氏が寛永 10（1633）年まで松江を統治するが嗣子無く断絶し、続いて京極氏が寛永 11（1634）年～寛永 14（1637）年まで統治した 17 世紀第 2 四半期にあたる時期である。

貿易陶磁器

青磁と白磁の皿が数点出土するが、大半は青花で占められている。青花の小坏・碗・皿・鉢はすべて景徳鎮系である。景徳鎮系の小坏は口縁部が端反の小坏（小坏Ⅰ類）がある。碗は底部が平坦な碗（碗 G 群）や底部が高台内に窪む碗（碗 H 群）が主体である。皿は口縁部が内湾する皿（皿 E 群）が主体で、芙蓉手の輪花皿（皿 G2 群）が入る。鉢は型押成形の芙蓉手の鉢（碗 I2 群）がある。

国産陶磁器

肥前陶器が大半を占める状況は第Ⅱ期と変わらず、引き続き瀬戸美濃陶器と備前が少量出土する。瀬戸美濃陶器は緑灰釉折縁皿があり、生産地の年代観で大窯編年第 4 段階後半 (1600 ～ 1610 年代) のものが主体である。備前は擂鉢があり、乗岡編年近世 2a 期（1620 ～ 1640 年代）のものが主体である。

肥前陶器は、生産地の年代観で九陶Ⅰ -2 期（1594 ～ 1610 年代）のものが主体となるが、九陶Ⅱ期（1610 ～ 1650 年代）のものも少量入るようになる。碗は丸碗・天目形碗・杉形碗があり、全面施釉（畳付無釉）をするものが含まれる。皿は胎土目が減少する段階で、この時期の絵唐津の鉄絵文様は簡素なものが多くなる。第Ⅱ期と大きく異なる点は、この時期から砂目が中心となることである。砂目の刷毛目皿や二彩手皿が出土することが特徴的で、口縁部に溝を設ける溝縁皿が入るようになる。肥前擂鉢は口縁部上端を水平にして内側に尖らせ、口縁部周辺のみに鉄釉を施すものが多い。

表 8　第Ⅲ期（第 2 遺構面）　産地別陶磁器組成

遺構面	遺構名	貿易陶磁器			国産陶器									国産磁器			
		中国青磁	中国白磁	中国青花	肥前陶器	瀬戸美濃陶器	京信系陶器	萩系陶器	在地系陶器	肥前擂鉢	備前擂鉢	堺・明石擂鉢	須佐擂鉢	肥前磁器	瀬戸美濃磁器	淡路磁器	在地系磁器
第 2 面	SB01				●												
	SD02			●	●												
	SK18			●	●												
	SK19				●												
	SK20			●	●												
	SK21				●												
	SK22				●	●											
	SK23				●												
	遺構外	●	●	●	●	●				●	●						

［第Ⅳ期］　19 世紀代前半～中頃（松平期：1 区　第 1 遺構面）

京極氏が断絶となった後、松平氏が寛永 15（1638）年に松江の統治を始め、明治時代を迎えて廃藩置県が実施されるまでの 233 年間、松平氏十代にわたって藩政が続いた。

本章第 1 節第 2 項第Ⅳ期で述べたように、本遺跡では 17 世紀代後半～ 18 世紀代後半までの陶磁器がほぼ抜けており、この時期の陶磁器は数点を確認するに留まる。そのため、第Ⅳ期の主体となる時期は、松平期後半～終末期の 19 世紀第 1 ～ 2 四半世紀にあたる時期となっている。

国産陶磁器

第Ⅳ期は、17 世紀代後半～ 18 世紀代後半までに肥前陶磁器を主体としていた組成から、19 世紀

代になると在地系陶器と肥前磁器が主体になるという大きな変化が見られ、国内各地において中小規模の在地の陶磁器窯が出現する時期と重なる。[38] 在地系陶器と肥前磁器が大半を占める状況で、肥前系陶器、京信系陶器、萩系陶器、堺・明石擂鉢、須佐擂鉢、瀬戸美濃磁器、淡路磁器が少量出土する。

在地系陶器は、19 世紀代前半の布志名焼と石見焼が主体である。布志名焼の碗は丸碗・腰張碗がある。皿は丸皿・方形皿・折縁皿があり、織部写しの皿が含まれる。碗皿類以外にも灯明皿・汁差・捏鉢・擂鉢などがあり、バリエーションが多くなる。石見焼は、皿・鉢・擂鉢・徳利がある。皿は見込みに目跡をもつものが多い。肥前系陶器は、上野焼の三官飴壷がある。京信系陶器は 18 世紀代前半のもので、胴部外面に注連縄文を施した半球碗がある。萩系陶器は、腰張碗・甕形碗がある。

肥前磁器は、生産地の年代観で九陶Ｖ期（1780 ～ 1860 年代）のものが主体となるが、19 世紀代後半（明治以降）の型紙摺りの端反碗や平碗が少量含まれる。碗は広東碗・筒丸碗・腰張碗があるが、本遺跡では 19 世紀代前半の端反碗と小丸碗を含まないことが特徴的である。皿は蛇ノ目凹形高台の皿や底部外面にハリ支えの痕跡をもつ大皿がある。瀬戸美濃磁器の碗は端反碗、皿は丸皿・方形皿がある。淡路磁器は、珉平焼の丸皿がある。瀬戸美濃磁器と淡路磁器については、19 世紀代中頃～後半の量産磁器の一群と考えられる。[39] 在地系磁器は、肥前磁器を模倣した丸皿や型押成形の菊花皿があり、これらは在地の磁器窯で焼成された意東焼の製品である可能性が高い。[40]

表９　第Ⅳ期（第１遺構面）　産地別陶磁器組成

遺構面	遺構名	貿易陶磁器			国産陶器									国産磁器			
		中国青磁	中国白磁	中国青花	肥前陶器	瀬戸美濃陶器	京信系陶器	萩系陶器	在地系陶器	肥前擂鉢	備前擂鉢	堺・明石擂鉢	須佐擂鉢	肥前磁器	瀬戸美濃磁器	淡路磁器	在地系磁器
第１面	SK01								●					●			
	SK02												●	●			
	SK03						●							●			
	SK04													●			
	SK05								●				●	●			
	SK06								●				●	●			
	SK07								●					●			
	SK08								●				●	●			
	SK09													●			
	SK10				●			●	●				●	●	●		●
	SK11						●	●	●					●	●		
	SK12								●					●			●
	SK15						●		●			●		●	●		
	SK16						●	●	●					●			
	SK17								●					●			
	SE01								●				●	●			
	SE02				●									●			
	遺構外						●		●				●	●	●	●	●

今回の調査では、堀尾期（第Ⅱ期）と京極期（第Ⅲ期）の遺構面を面的に確認することが可能であったため、ここでは堀尾期と京極期の陶磁器組成の違いをまとめておきたい。

堀尾期における貿易陶磁器の占める割合は２割、国産陶磁器は８割を示す。このうち国産陶磁器は肥前陶器が大半を占め、瀬戸美濃陶器と備前が少量出土する。肥前陶器は胎土目製品が主体で、碗皿類の施釉は藁灰釉・透明釉・鉄釉があり、高台は露胎である。この時期に肥前磁器は出土しない。

京極期における貿易陶磁器の占める割合は１割、国産陶磁器は９割を示す。肥前陶器が大半を占める状況は変わらないが、堀尾期と大きく異なる点はこの時期に砂目製品が主体となることで、碗皿類の施釉は灰釉・透明釉があり、高台は露胎のものと全面施釉（畳付無釉）を施すものが混在する。京極期には、砂目の刷毛目皿や二彩手皿が出土し、溝縁皿が入るようになることが特徴である。

第３節　堀尾期における屋敷地の規模と造成工法

本節では、１区と２区の調査成果を整合し、各調査区で検出した屋敷境溝の検出位置を基に、第１項では堀尾期（17 世紀代初頭～前半）における屋敷地の規模の想定復元、第２項では城下町初期造成段階～造成完了段階までを中心とした堀尾期の屋敷地の造成工法について若干の考察を行いたい。

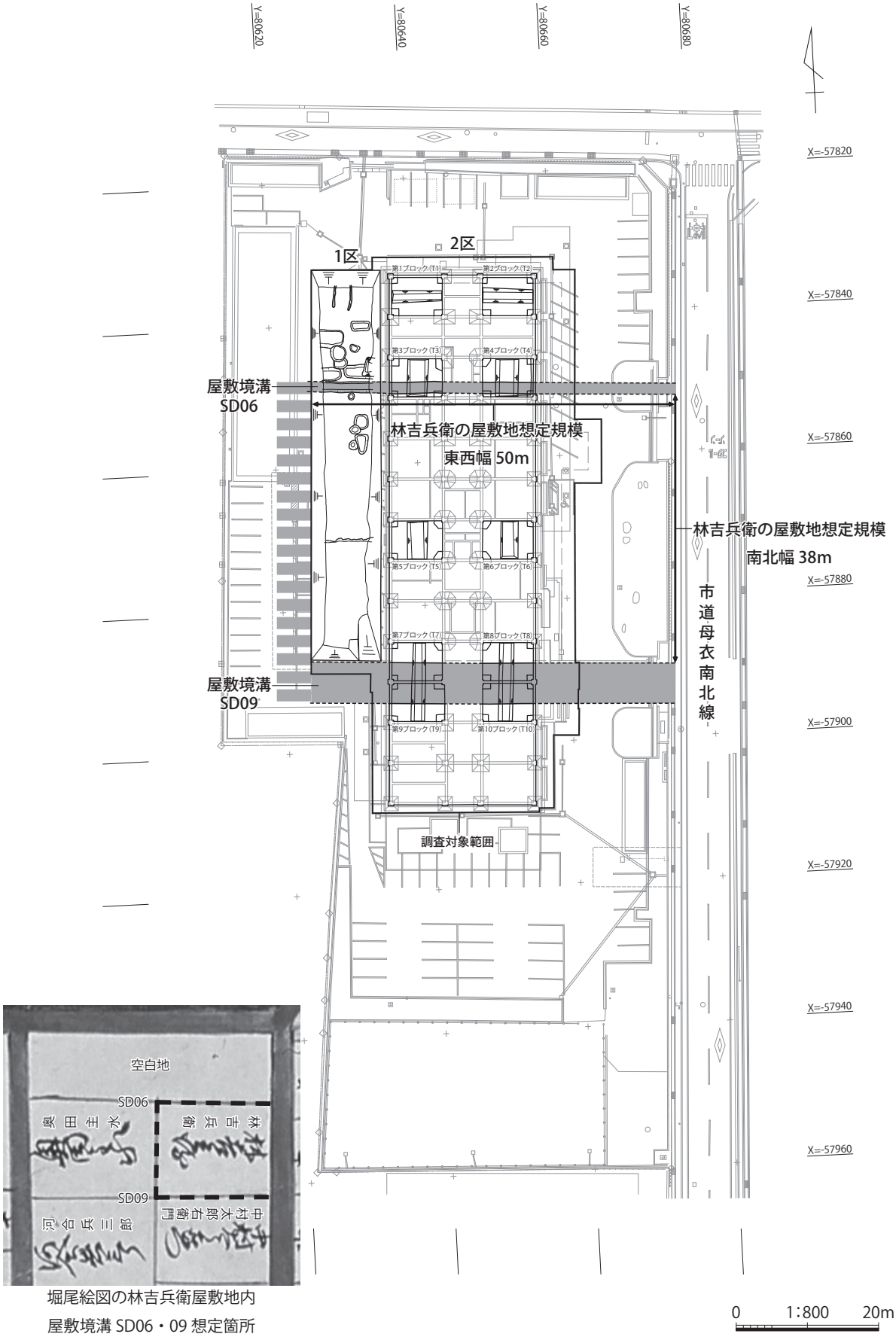
第１項　堀尾期における屋敷地の規模

堀尾期における「林吉兵衛」屋敷地の規模の想定復元（第 129 図）

現存する松江城下町の武家屋敷の規模を記した史料に、19 世紀代中頃に作成された「嘉永５（1852）年　御家中屋敷割帳写（島根県立図書館所蔵）」が残されている。この史料は、松江藩が藩士たちの屋敷地を管理するために、武家屋敷一筆ごとの間口・奥行・居住者の変遷等を記したものである。この史料の奥付には「天和３（1683）年から嘉永５（1852）年までに成る」とあり、松平期における約 170 年間の情報である。一方で、現段階において堀尾期～松平期前半（17 世紀代初頭～前半）の武家地や藩施設などの屋敷地の規模を記した詳細な史料は見つかっていないため、ここでは今回の調査成果から得られた情報を基に、堀尾期における屋敷地の規模の想定復元を試みる。

屋敷地の規模を復元するにあたり、その対象は調査地が比定する堀尾氏の家臣である「林吉兵衛」の屋敷地を取り扱い、第 129 図に図示した。屋敷地の規模を示す基準として、屋敷地の南北幅の推定規模は、北端は１区の第３遺構面および２区の T3・4 トレンチで検出した東西方向に延びる屋敷境溝 SD06 の南側肩部を基点とし、南端は２区の T7 ～ 10 トレンチで検出した東西方向に延びる屋敷境溝 SD09 の北側肩部までの幅を根拠とした。そして、屋敷地の東西幅の推定規模は、東端は既存の市道母衣南北線の西側側溝を基点とし、西端は１区の第３遺構面には基準となる境界が無いため、屋敷境の位置はほぼ変化しないということを積極的に捉えて、１区の第２遺構面で検出した南北方向に延びる屋敷境溝 SD04（背割溝）の東側肩部までの幅で補い、これを根拠としている。

これらの屋敷境溝の位置関係から、堀尾期における「林吉兵衛」の屋敷地の規模は、南北幅 38m、東西幅 50mを測り、面積は 1900㎡（約 575 坪）の広大な屋敷地が配置されていたものと想定復元する。なお、当該期の空白地と武家地（林吉兵衛）の境界に位置する SD06 の溝幅は南北幅 1.50m であるのに対し、武家地（林吉兵衛）と武家地（中村太郎右衛門）の境界に位置する SD09 の溝幅は南北幅 6.00 ～ 7.60mとなっており、空白地と武家地の境界に位置する SD06 と比べて、隣り合う武家地の境界に位置する SD09 の溝幅が４～５倍程度大きいということが指摘できる。この状況から、武家地間の境界は空白地との境界よりも明確に区画されていたことが考えられ、階層の違いが起因している可能性がある。また、堀尾期の重臣屋敷の調査を実施した松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）では、北屋敷と南屋敷を分断する東西方向の屋敷境溝 SD01 を検出しており、この屋敷境は溝の北側肩部（北屋敷側）に明確な遮蔽物は存在せず、南側肩部（南屋敷側）のみに掘立柱塀が構築されており、当該期の屋敷境は北屋敷が管理していた可能性があるという見解に至っている。屋敷境の管理・所有については、隣接する屋敷地同士の些細な遣り取りにまでおよぶ可能性があることから、今後の調査事例の増加を待ちたい。



堀尾絵図の林吉兵衛屋敷地内
屋敷境溝 SD06・09 想定箇所

第 129 図　堀尾期における屋敷地の規模（想定復元）

第２項　堀尾期における屋敷地の造成工法

本項では、これまでに松江市母衣町地内で実施した松江城下町遺跡の発掘調査で確認している島状整地の検出事例を用いながら、堀尾期における屋敷地の造成工法についてまとめておきたい。

屋敷地の造成工法（第 130 図）

屋敷地の造成工法は、これまでの松江城下町遺跡の調査成果から屋敷地内全域を一律に造成するのではなく、建物を建てる範囲については先行して造成を行っていることが判明している。

これと同じ造成工法が四国の徳島城下町で用いられており、「島状整地」と呼称されている。徳島城下町での島状整地は、16 世紀代後半以降の武家地において通例的に見られる造成工法で、吉野川の河口に立地する低湿地に形成された徳島城下町ならではの工法として認識されていたが、松江城下町でも 17 世紀代初頭の城下町形成段階から島状整地を採用していることが明らかとなっている。(41)

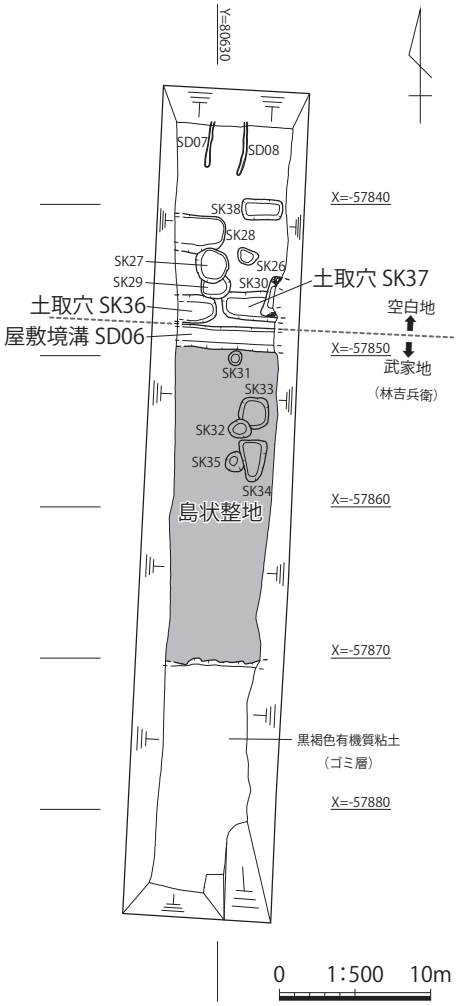
今回調査を実施した 1 区の第 3 遺構面では、屋敷境溝 SD06 を境に南側の武家地で島状整地が施されている状況を確認した（第 130 図）。北側の空白地では灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土を造成土に使用しているのに対し、南側の武家地では島状整地の基盤層として緑灰色シルト質軟砂岩を造成土に使用している。これらは、空白地と武家地では造成土の使用が異なるということを示しており、2 区では部分的な検出に留まったが、1 区の様相と連続する造成土の広がりを確認することができた。

島状整地の検出事例（第 131・132 図）

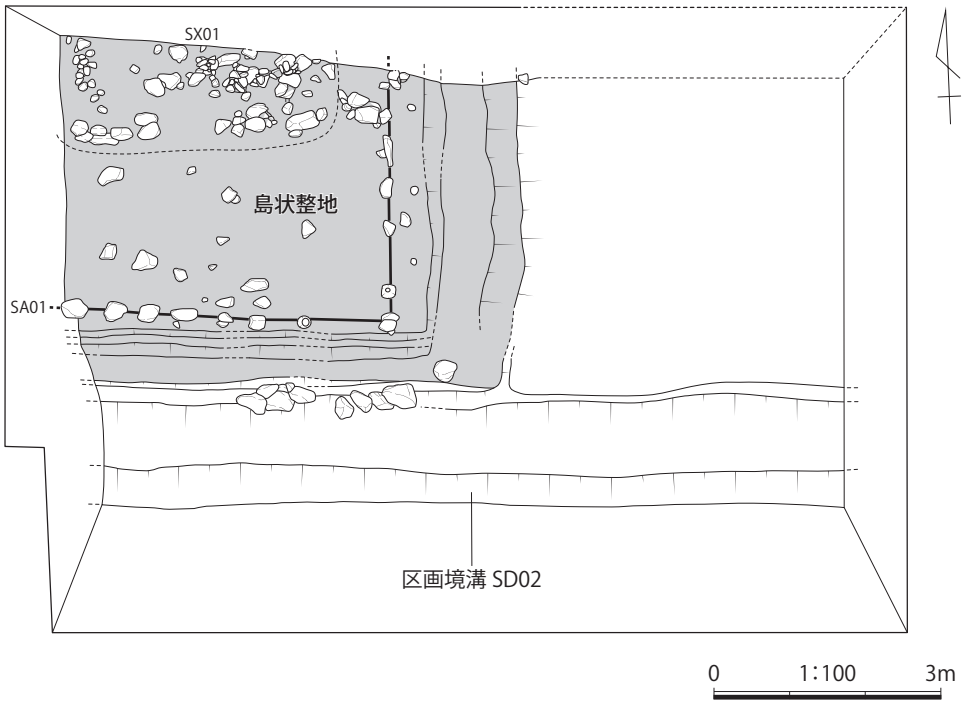
ここでは、松江市母衣町地内における堀尾期（城下町形成段階）の島状整地の検出事例を 2 つ挙げておきたい。

本遺跡から南東へ約 300m 離れた場所に所在する松江城下町遺跡（母衣町 180-28・29 外）では、街区の縁辺部にある道路と屋敷地の境界にあたる区画境溝を掘削した際に生じた残土を屋敷地内の造成土として使用し、建物予定地には層厚 30 ～ 60㎝で盛土造成が施されている（第 131 図）。また、本遺跡から南東へ約 150m 離れた場所に所在する松江城下町遺跡 (母衣町 68) では、屋敷境を掘削した際に生じた残土および屋敷境の縁辺部に規模の大きな土取穴を掘削することで土砂を獲得し、これを屋敷地内の造成土として使用していた。建物予定地には層厚 30 ～ 40㎝で盛土造成が施されている（第 132 図）。

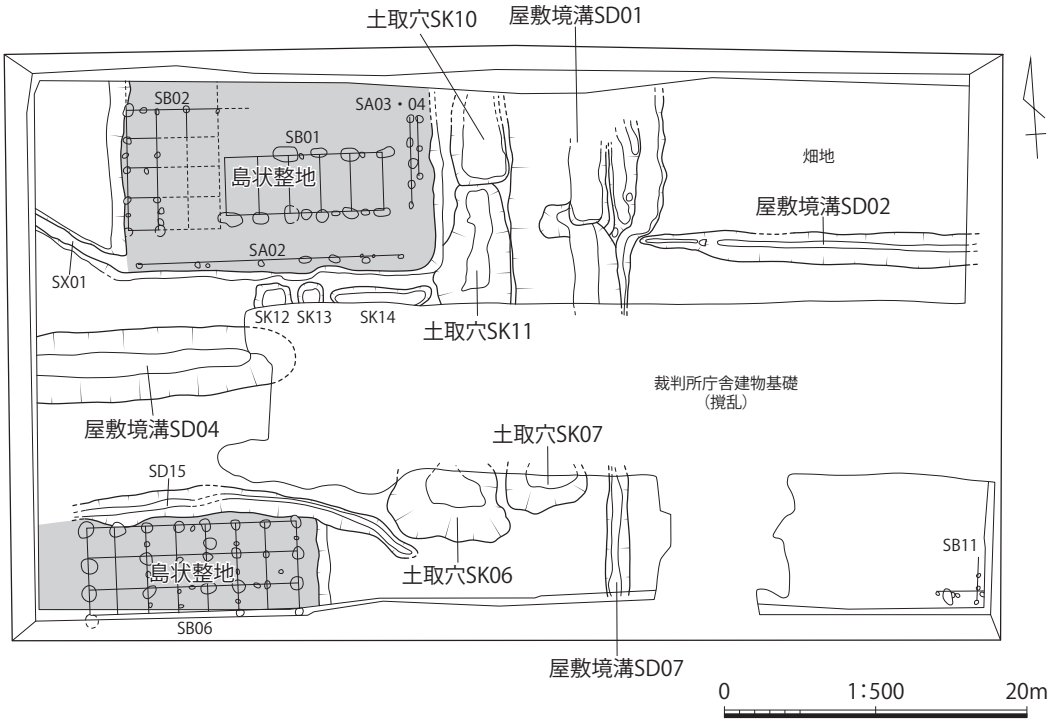
島状整地は低湿地を抱えた土地における地盤の嵩上げ工法と考えられ、松江城下町遺跡の事例では屋敷境溝と近接する位置に土取穴が掘削されるという点が特徴的である。今後は松江城下町遺跡において、島状整地の事例が増加することで、通例的に検出される造成工法となるであろう。



第 130 図　堀尾期における屋敷地の造成工法



第 131 図　堀尾期における屋敷地の造成工法　事例 1：松江城下町遺跡（母衣町 180-28・29 外）第 4 遺構面



第 132 図　堀尾期における屋敷地の造成工法　事例 2：松江城下町遺跡（母衣町 68）第 3 遺構面

第４節　結語

前節までに各遺構面の時期と変遷に加えて、陶磁器組成や堀尾期における屋敷地の規模と造成工法について、その特徴を整理してきた。以下では、松江城下町遺跡（母衣町 50 外）の京極期における土地利用にかかわる問題点を要約しながら、今後の課題に触れることでまとめとしたい。

【絵図資料から分かること】

本遺跡の町屋跡について、まずは京極期（1634 ～ 1637 年）の絵図資料から分かることを整理しておきたい。ここでは「1 区の第 2 遺構面で検出した町屋跡が、京極期絵図に描かれている町屋の記載と一致する」ということを前提とする。当地における町屋の立地を考察すると、本遺跡は東西方向に流れる外堀（北田川）沿いの南岸に所在し、松江城の東側に配置された重臣屋敷から、通りを挟んだ東隣の武家地の街区北端にあたる。以下では、絵図資料から分かることを①～③に提示する。

①京極期絵図である「寛永年間松江城家敷町之図（丸亀市立資料館所蔵）」（第 8 図）に見る本遺跡が該当する部分に「町屋」の文字表記はなく、南北方向の短冊状区画が描かれているのみである。

②上記の京極期絵図とは別に、「雲隠両国太守京極若狭守忠高御時代城下町絵図（島根県立図書館所蔵）」のように、橋北部分（大橋川より北の地域）のみを描いた京極期絵図が 6 点所在する。これらはいずれも同系統の絵図の写しと考えられており、本遺跡が該当する部分には短冊状区画が描かれず、東西方向に長い区画のなかに「蔵屋敷」の文字表記が見られる[42]。

③「近世初期における松江城下町の空間的特性」『論集　松江城Ⅰ』（大矢・渡辺 2023）の論考によると、宮城県に所在する京極期絵図である「雲州松江之図（宮城県図書館所蔵）」に見る本遺跡が該当する部分に「町屋」の文字表記が見られる[43]。

このように絵図資料からのアプローチでは、本遺跡がどのような機能をもつ施設であったかは資料的制約もあり、現時点で絵図からは「町屋」あるいは「蔵屋敷」ということを確定付けることは難しい。また、当地が町屋であったと仮定した場合、京極期絵図では南北方向の短冊状区画となっているが、松平期絵図では 3 ～ 4 軒の武家地が配置されるようになることから、京極期の町屋が松平期にどこへ移ったのかについては疑問が残る。

【本遺跡の調査成果から新たに分かったこと】

京極期絵図に見る「当地に町屋が存在していた」という点については、これまで信憑性に欠けていたが、今回の調査成果である町屋跡の遺構検出によって、武家地のなかの町屋の存在を再認識するとともに、丸亀市立資料館所蔵の「寛永年間松江城家敷町之図」の記載内容を裏付けることが可能となった。そして、本遺跡の町屋の構造は、大坂の町屋と比較すると「母屋が道路側に配置され、敷地の裏地部分に空閑地をもち、隣地とは溝で区切られている」という共通点が見られることが新たに分かった。また、今回の調査では考古学の知見から、堀尾期～京極期に至る遺構面を面的に確認することができ、非常に貴重な資料を得られたことが大きな成果となった。

以上のことから、本遺跡の京極期における機能は「町屋」であった可能性が高いものと考える。しかし、絵図資料から確定的な根拠は見出せず、今後は松江城下町遺跡の発掘調査において、末次・白潟地区などの町屋の調査事例の蓄積と文献史料などを含めた多方面からの検証が必要である。

これからの展望

松江城下町遺跡では、陶磁器類・木製品・金属製品・銭貨などの生活道具、瓦や柱材などの居住関連遺物、動物遺存体などの多種多様な遺物が出土している。これらの資料についても、今後の段階で再整理・分類作業や分析・鑑定などが進められることによって、新たな理解へと繋がるであろう。

近世陶磁研究においては、陶磁器の分類やセット関係との付け合わせを行うことを始点として、その成果を基に陶磁器の評価と遺構の性格との相互関係を精査していくことが、遺物を年代の指標とする考古学の立場から重要であることは間違いない。

そして、近世城下町は発掘調査だけではなく、文献史学や自然科学分析から得られる成果も重要である。今後は松江城下町遺跡を様々な分野の視点から見直し、各分野との共同研究を継続的に進めることで、より豊かな松江の城下町像が解明されていくことを期待したい。

第５章　註

(33) 松江城下町遺跡（母衣町 180-28・29 外）の発掘調査成果の詳細は、松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団 2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書３　第６章第７ブロック』松江市文化財調査報告書第 156 集で報告されている。

(34) 本報告に表記した「空白地」の定義は、「堀尾期絵図のなかで明確な界線により区画されているが、屋敷主の名前が書かれていない場所」のことを指す。

(35) 堀尾期の空白地の利用形態として、今回の調査ではゴミ捨て場として利用されていることが判明した。城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡（南田町 132 外）の発掘調査では、当該期の堀尾期城下町絵図を見ると武家地の北側に位置する空白地となっているが、ここでは畠地として利用されていたことが明らかとなっている。この状況から、松江城下町における空白地の利用形態は周辺の立地環境によって異なることが想定される。

(36) 松尾信裕　2012「中世から近世の町屋の形」『関西近世考古学研究 20 －関西における町屋敷の変遷－』関西近世考古学研究会から引用した。

(37) 村上伸之　2015「肥前有田の磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会を参考とした。村上氏は、肥前陶器の胎土目製品に加えて砂目製品が入る段階について、「有田の窯場で砂目積みが主体となる段階である。溝縁皿が出現して皿類の主体となるが、まだいくらか胎土目積み段階に近い様相の製品や器形も残る。鉄絵もいくらか残るが、量的には大半を占める溝縁皿には鉄絵は施されない。釉薬は少量の鉄釉を除けば透明釉に限られ、濃い緑色の灰釉は認められなくなる。」と指摘され、その年代を 1620 年代～ 1630 年代としている。

(38) 赤松和佳　2022「19 世紀における陶磁器生産と消費における問題提起」『関西近世考古学研究 28 － 19 世紀における陶磁器生産と消費－』関西近世考古学研究会を参考とした。赤松氏は、19 世紀代に国内各地で中小規模の陶磁器窯が開窯する最大の理由について「陶磁器需要の裾の広がりによるものと思われ、その需要に応えるには、最先端の陶磁器生産技術を導入することが必須である。」と述べられている。

(39) 19 世紀代中頃～後半の量産磁器には、肥前磁器・瀬戸美濃磁器・京焼系磁器などがあり、その流通圏は東海・関東のみならず、西日本へも拡大している。この時期は、清朝磁器を模倣した端反碗の生産拡大に象徴され、特に瀬戸窯では端反碗を中心とした碗類・型打皿・神酒徳利に焼成器種を絞るなどして、磁器生産および流通戦略を明確化している。

(40) 意東焼は、松江市東出雲町下意東に所在していた磁器窯である。松江藩では藩の奨励策として、天保４（1833）年に肥前磁器をはじめとする陶磁器の輸入を禁止するなどして藩内で陶磁器を管理するために意東焼を藩営（藩窯）として開窯する。しかし、この磁器窯の操業は軌道に乗ることができず、弘化元（1844）年に廃窯となる。

(41) 松江城下町遺跡において、これまでに「島状整地」を確認した遺跡は、母衣町では松江城下町遺跡 (母衣町 68：松江地方裁判所)、松江城下町遺跡 (母衣町 115：中電付属建物)、松江城下町遺跡 (180-29・29 外) があり、ここでは 17 世紀代初頭の堀尾期の遺構面に相当する。また、南田町では松江城下町遺跡 (134-1 外)、松江城下町遺跡 (南田町 132 外)、松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) があり、ここでは 17 世紀代前半の 1638 年を上限とする松平期の与力屋敷の建物が構築されて機能していた遺構面に相当する。このことは、島状整地が松江城下町では 17 世紀代初頭に限られた造成工法ではなく、初期造成以後も実施され、時期を問わない通例的な造成工法となっていたことを示すものと考えている。

(42) 西島太郎　2011「京極期松江城下町図と分限帳－諸本の比較検討－」『松江歴史館研究紀要　第１号』松江歴史館を参考とした。西島氏は、京極期松江城下町図と分限帳についての基礎的考察を行い、「松江城下町図の善本は丸亀市立資料館所蔵の「寛永年間松江城家敷町之図」（丸亀本）であり、分限帳の基準となるものは、作成年月日が記されている内閣文庫本「京極高次分限帳」であることが明確になった。」とまとめられている。

(43) 前掲註（15）大矢・渡辺（2023）の論考から引用した。

陶磁器

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
16-1	1面	SK01	陶器	碗	丸形	―	灰釉	14.2	5.2	8.3	在地系(布志名)	―	19C 代前半	木桶内から出土。
18-1	1面	SK02	磁器	小坏	丸形	雨降文	染付	7.6	3.0	4.5	肥前	V	1820～1860	畳付無釉。
18-2	1面	SK02	磁器	碗	筒形	鳥文・竹笹櫛歯文	染付	7.4	4.7	6.6	肥前	V	1820～1860	胴部外面に窪みあり。
20-1	1面	SK03	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	―	―	(5.0)	須佐	―	19C 代前半	佐伯分類Ⅱ群 A 類。
20-2	1面	SK03	磁器	皿	丸形	花卉文	染付	(9.6)	(4.6)	1.8	肥前	V	1780～1860	畳付無釉。
24-1	1面	SK06	磁器	碗	半球形	草花文五弁花文	染付	(15.8)	(6.5)	7.1	肥前	V	1780～1810	木桶内から出土。見込みにコンニャク印判。
29-1	1面	SK10	陶器	碗	底広形	―	透明釉	(11.6)	(4.9)	5.1	萩系	―	19C 代前半	見込みに 5 箇所の目跡。
29-2	1面	SK10	陶器	皿	方形	宝文	黄釉	(9.1)	(6.8)	1.8	在地系(布志名)	―	19C 代前半	布志名焼の上手物か。
29-3	1面	SK10	陶器	皿	丸形	幾何学文	緑釉	(11.6)	(5.6)	2.1	在地系(布志名)	―	19C 代前半	布志名焼の織部写し。
29-4	1面	SK10	陶器	壷	卵形	―	鉄釉	(7.4)	(4.8)	12.2	肥前系(上野)	―	19C 代前半	三官飴の壺。底部に糸切り痕。
29-5	1面	SK10	陶器	壷	胴丸形	―	白濁釉鉄釉	(7.2)	(8.9)	14.5	在地系	―	19C 代前半	胴部外面に青呉須で「御神水」。
29-6	1面	SK10	磁器	碗	広東形	萩文火焔宝珠文	染付	(10.2)	(5.5)	5.2	肥前	V	1780～1810	見込みに火焔宝珠文。
29-7	1面	SK10	磁器	碗	直口形	襷文	青磁釉	(11.7)	(3.9)	6.5	肥前	V	1780～1810	青磁釉の碗。
29-8	1面	SK10	磁器	碗	端反形	鶴文・帆掛舟渦繋ぎ文	染付	10.2	4.4	6.0	在地系	―	19C 代前半	見込みに帆掛舟文。
29-9	1面	SK10	磁器	皿	稜皿形	紗綾形文の陰刻	白磁	9.3	4.9	1.5	美濃	―	19C 代中頃	量産品の白磁の丸皿。
29-10	1面	SK10	磁器	仏花瓶	盤口形	―	青磁釉	(7.9)	(5.5)	14.9	肥前系(波佐見)	V	1820～1860	括れ部に鳥形の粘土を貼り付け。
31-1	1面	SK11	陶器	碗	腰張形	―	透明釉	(9.6)	(4.6)	6.7	萩系	―	19C 代前半	畳付無釉。
31-2	1面	SK11	陶器	皿	折縁形	草文	透明釉	(12.8)	6.7	4.3	在地系(布志名)	―	19C 代前半	見込みに 3 箇所の目跡。
31-3	1面	SK11	陶器	皿	木盃形	花唐草文帆掛舟	白濁釉	(13.6)	6.8	4.0	在地系	―	19C 代前半	半磁器の皿。
31-4	1面	SK11	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(21.3)	(10.5)	5.3	在地系(石見)	―	19C 代後半	見込みに目跡が残る。
32-1	1面	SK11	陶器	汁差	円筒形	―	鉄釉	8.1	5.4	10.7	在地系(布志名)	―	19C 代後半	胴部片側に把手。
32-2	1面	SK11	陶器	徳利	肩丸形	―	透明釉	(3.3)	(7.8)	19.7	在地系(石見)	―	19C 代後半	胴部外面に黒呉須で「武代店」。
32-3	1面	SK11	陶器	捏鉢	浅丸形	―	黄釉鉄釉	(25.3)	(12.4)	8.5	在地系(布志名)	―	19C 代前半	見込みに目跡が残る。
32-4	1面	SK11	磁器	碗	丸形	蔓草文五弁花文	染付	(9.0)	3.4	6.1	肥前	V	1780～1810	見込みに手描きの五弁花。
32-5	1面	SK11	磁器	碗	端反形	市松文菊花文	染付	10.0	4.0	6.1	肥前	―	19C 代後半(明治以降)	型紙摺りの碗。
32-6	1面	SK11	磁器	瓶	円筒形	草花文	染付	―	(7.8)	(23.6)	在地系(意東焼か)		19C 代前半	底部無釉。
33-1	1面	SK12	陶器	碗	腰張形	―	青地釉	(9.4)	5.0	7.3	在地系(布志名)	―	19C 代前半	ぼてぼて茶碗。
33-2	1面	SK12	陶器	鉢	―	―	透明釉	―	8.0	(5.0)	在地系(石見)	―	19C 代前半	見込みに目跡が残る。
33-3	1面	SK12	磁器	碗	広東形	草花文葉文	染付	(11.5)	6.4	6.3	肥前	V	1780～1810	見込みに葉文。漆継ぎ痕あり。
33-4	1面	SK12	磁器	皿	丸形	半菊花文五弁花文	染付	13.0	7.3	3.8	在地系	―	19C 代前半	肥前磁器の皿の模倣品。
36-1	1面	SK15	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(32.1)	(13.7)	15.0	在地系(布志名)	―	19C 代前半	畳付無釉。
36-2	1面	SK15	陶器	擂鉢	―	―	来待釉	(34.1)	(13.4)	13.7	在地系(石見)	―	19C 代前半	高台外側端部を面取りする。
37-1	1面	SK15	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(36.0)	―	(11.0)	堺・明石	―	19C 代中頃	口縁帯に 2 条の凹線。
37-2	1面	SK15	磁器	碗	端反形	鳥・雲文雷文帯	染付	(10.2)	(3.8)	5.6	肥前	―	19C 代後半(明治以降)	見込みに簡略した環状松竹梅文。
37-3	1面	SK15	磁器	鉢	八角形	幾何学文花卉文	染付	14.0	6.6	6.7	肥前	V	1820～1860	見込みに花卉文。
39-1	1面	SK16	陶器	碗	甕形	―	青灰釉	(10.1)	(4.1)	7.9	萩系	―	19C 代前半	全体的に貫入が入る。
39-2	1面	SK16	陶器	灯明皿	丸形	―	鉄釉	(8.4)	(5.0)	1.9	在地系(布志名)	―	19C 代前半	底部に糸切り痕。
41-1	1面	SK17	陶器	脚付坏	―	宝珠文	黄釉	(8.6)	(5.7)	4.2	在地系(布志名)	―	19C 代後半	黒呉須で 3 箇所に大小の宝珠文。
41-2	1面	SK17	磁器	碗	平形	瓔珞文鶴文・菊花文	染付	11.8	4.0	4.2	肥前	―	19C 代後半(明治以降)	型紙摺りの碗。
43-1	1面	SE01	陶器	灯明皿	丸形	―	透明釉	10.0	4.5	2.0	在地系(石見)	―	19C 代前半	底部無釉。
43-2	1面	SE01	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	―	―	(5.7)	須佐	―	19C 代前半	佐伯分類Ⅱ群 B 類。
46-1	1面	SE02	陶器	碗	端反形	山水文清水の押印	透明釉	(11.5)	(5.1)	7.1	肥前	Ⅲ	1650～1690	京焼風陶器の碗。
46-2	1面	SE02	陶器	碗	半球形	刷毛目	透明釉	―	5.6	(5.7)	肥前	Ⅲ	1650～1690	刷毛目碗。
47-1	1面	遺構外	陶器	碗	半球形	注連縄文	透明釉	―	(3.7)	(5.4)	京信系	―	18C 代前半	呉須絵。高台は露胎。
47-2	1面	遺構外	陶器	碗	腰張形	―	緑灰釉	―	4.6	(6.6)	須佐	―	19C 代前半	高台は露胎。
47-3	1面	遺構外	陶器	碗	腰張形	―	青地釉	―	4.8	(3.5)	在地系(布志名)	―	19C 代前半	ぼてぼて茶碗。
47-4	1面	遺構外	陶器	皿	稜皿形	―	黄釉緑釉	9.4	5.1	2.1	在地系(布志名)	―	19C 代前半	碁笥底状の高台。
47-5	1面	遺構外	磁器	小坏	平形	雲文	染付	(6.4)	(2.7)	2.9	肥前	V	1820～1860	畳付無釉。

陶磁器

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
47-6	1面	遺構外	磁器	猪口	桶形	矢羽根文	染付	(5.6)	(3.5)	4.5	肥前	Ⅳ	1750～1780	畳付無釉。
47-7	1面	遺構外	磁器	猪口	桶形	水仙文	染付	(6.6)	(5.0)	5.5	肥前	Ⅳ	1700～1750	畳付無釉。
48-1	1面	遺構外	磁器	碗	端反形	雲文・風景文 花文	染付	(8.1)	(3.0)	4.2	瀬戸美濃	―	19C 代前半	見込みに花文。
48-2	1面	遺構外	磁器	碗	端反形	草花文 花文	染付	(9.4)	(3.7)	4.1	瀬戸美濃	―	19C 代前半	焼き継ぎ痕あり。
48-3	1面	遺構外	磁器	碗	端反形	雷文帯 蓮弁文	染付	(9.9)	(4.0)	5.5	肥前	Ⅴ	1850～1860	見込みに簡略した環状松竹梅文。
48-4	1面	遺構外	磁器	碗	広東形	四方襷 七宝文	染付	(10.9)	(6.1)	6.4	肥前	Ⅴ	1810～1840	見込みに簡略した環状松竹梅文。
48-5	1面	遺構外	磁器	蓋	端反形	富士山文 襷文	染付	摘み (3.5)	(8.9)	2.4	瀬戸美濃	―	19C 代前半	見込みに「太化年製」の銘款。
48-6	1面	遺構外	磁器	皿	方形	紗綾形文 梅花文の陽刻	染付	7.8	3.6	2.3	美濃	―	19C 代後半 (明治以降)	量産品の角形手塩皿。
48-7	1面	遺構外	磁器	皿	綾皿形	鳥文	染付	9.0	4.8	1.5	美濃	―	19C 代前半	体部内面の片側に鉄釉掛け流し。
48-8	1面	遺構外	磁器	皿	丸形	龍文の陰刻	黄釉	(9.8)	(6.4)	2.1	淡路 (珉平焼)	―	19C 代後半 (明治以降)	量産品の型押成形の皿。
48-9	1面	遺構外	磁器	皿	丸形	輪宝文 唐草文	染付	9.8	6.1	1.8	肥前	Ⅴ	1810～1820	見込みにコンニャク印判。
48-10	1面	遺構外	磁器	皿	菊花形	舟人物 遠山文	染付	(12.3)	(7.4)	3.0	肥前	Ⅴ	1780～1820	蛇ノ目凹形高台。
48-11	1面	遺構外	磁器	皿	菊花形	草花文	染付	(13.2)	(7.3)	3.8	在地系	―	19C 代後半	型押成形。肥前磁器の皿の模倣品。
48-12	1面	遺構外	磁器	蓋付鉢	丸形	花卉文	染付	(15.4)	―	4.5	肥前	Ⅴ	1820～1860	48-13 とセット。
48-13	1面	遺構外	磁器	蓋付鉢	半筒形	花卉文	染付	(15.3)	(9.4)	4.8	肥前	Ⅴ	1820～1860	48-12 とセット。
52-1	2面	SB01	陶器	小坏	杉形	―	灰釉	6.4	3.1	3.9	肥前	Ⅱ	1610～1650	高台は露胎。
52-2	2面	SB01	陶器	皿	端反形	―	灰釉	(11.4)	4.7	3.8	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。
52-3	2面	SB01	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(12.2)	(5.6)	3.0	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。高台内に井桁状の墨書あり。
54-1	2面	SD01	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(12.4)	(4.4)	3.6	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
54-2	2面	SD01	陶器	皿	溝縁形	―	透明釉	(12.3)	4.2	2.9	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
54-3	2面	SD01	陶器	皿	折縁形	刷毛目文	透明釉	(23.8)	―	(4.7)	肥前	Ⅱ	1610～1650	刷毛目皿。
54-4	2面	SD01	陶器	火鉢	浅筒形	刷毛目文	緑釉 鉄釉	(17.8)	(6.4)	6.8	肥前	Ⅱ	1610～1650	胴部外面に刷毛目文。
54-5	2面	SD01	陶器	甕	―	―	鉄釉	―	(14.8)	(9.9)	肥前	―	17C 前半	胴部内面に同心円状の当て具痕。
56-1	2面	SD02	磁器	鉢	端反形	―	青花	(12.2)	―	(7.0)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	芙蓉手の鉢。森分類青花碗 I2 群。
56-2	2面	SD02	陶器	向付	方形か	鉄絵	透明釉	―	―	(3.2)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	鉄絵の四方皿。
56-3	2面	SD02	陶器	皿	丸形か	―	藁灰釉	―	(4.8)	(2.6)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	見込みに目跡無し。
59-1	2面	SD04	磁器	小坏	端反形	筍文 松毬文	青花	(8.7)	(4.0)	5.2	中国 (景徳鎮系)	―	17C 初頭	森分類青花小坏 I 類。高台内に「大明成化年製」の銘款。
59-2	2面	SD04	陶器	碗	呉器形	―	透明釉	―	(4.6)	(5.8)	肥前	Ⅱ	1630～1650	呉器手碗。
59-3	2面	SD04	陶器	皿	溝縁形	―	灰釉	(12.4)	(4.2)	2.2	肥前	Ⅱ	1630～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
59-4	2面	SD04	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(25.8)	―	(7.9)	肥前	Ⅱ	1620～1630	口縁部周辺のみに鉄釉。
61-1	2面	SK18	陶器	碗	天目形	―	鉄釉	(11.2)	(5.4)	8.0	肥前	Ⅱ	1610～1650	高台は露胎。
61-2	2面	SK18	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(10.7)	(4.9)	2.9	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	見込みに目跡無し。
61-3	2面	SK18	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(15.2)	(4.4)	4.0	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
64-1	2面	SK20	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	―	(4.8)	(3.5)	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
66-1	2面	SK21	陶器	碗	腰張形	―	灰釉	―	(5.0)	(4.5)	肥前	Ⅱ	1610～1650	高台は露胎。
68-1	2面	SK22	陶器	小坏	丸形	―	藁灰釉	(5.6)	(2.5)	3.8	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胴部下方から高台は露胎。
68-2	2面	SK22	陶器	皿	折縁形	鎬文の陰刻	緑灰釉	(10.2)	―	(1.8)	瀬戸美濃	―	1590～1610	口縁部のみ残存。
68-3	2面	SK22	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(12.2)	(3.7)	3.4	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	見込みに目跡無し。高台内に井桁状の墨書あり。
70-1	2面	SK23	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(14.3)	(4.8)	4.4	肥前	Ⅱ	1610～1650	畳付に砂目積みの痕跡あり。
73-1	2面	SK25	磁器	小坏	端反形	花卉文	青花	(7.5)	―	(3.0)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花小坏 I 類。
73-2	2面	SK25	磁器	小坏	端反形	山水文	青花	(9.5)	―	(3.2)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花小坏 I 類。
73-3	2面	SK25	磁器	碗	丸形	草文 蝶文	青花	(11.2)	4.2	6.3	中国 (景徳鎮系)	―	17C 前半か	森分類青花碗 G 群。高台内に「大明成化年製」の銘款。
73-4	2面	SK25	磁器	皿	折縁形	―	青花	(20.1)	―	(2.9)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	芙蓉手の輪花皿。森分類青花皿 G2 群。
73-5	2面	SK25	陶器	碗	杉形	―	灰釉	(10.4)	(5.2)	7.2	肥前	Ⅱ	1610～1650	高台は露胎。
73-6	2面	SK25	陶器	皿	溝縁形	―	灰釉	12.5	4.4	3.4	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
73-7	2面	SK25	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(30.9)	―	(7.0)	肥前	Ⅱ	1620～1630	口縁部周辺のみに鉄釉。
74-1	2面	SK25	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(31.7)	―	(5.8)	肥前	Ⅱ	1630～1650	口縁部周辺のみに鉄釉。
74-2	2面	SK25	陶器	擂鉢	―	―	―	(34.6)	―	(4.8)	備前	―	1620～1640	乗岡編年近世 2a 期。

陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
74-3	2面	SK25	磁器	碗	―	字文	染付	―	―	(2.8)	肥前	Ⅱ-1	1630 年代	天目形の碗か。胴部外面に「福」の文字銘。
74-4	2面	SK25	磁器	碗	腰張形	雷文 水草文	染付	(9.8)	(5.0)	9.8	肥前	Ⅱ-1	1610～1630	畳付から高台内無釉。
74-5	2面	SK25	磁器	碗	丸形	二重圏線 草花文	染付	(10.5)	4.7	6.7	肥前	Ⅱ-2	1630～1640	畳付無釉。
74-6	2面	SK25	磁器	碗	天目形	―	鉄釉	―	(3.9)	(4.9)	肥前	Ⅱ-2	1640～1650	高台は露胎。
74-7	2面	SK25	磁器	碗	丸形	―	青磁釉	(11.5)	4.9	7.3	肥前	Ⅱ-2	1630～1650	畳付無釉で砂粒付着。
74-8	2面	SK25	磁器	皿	鍔縁形	花唐草文 蝶文	染付	14.8	6.4	2.8	肥前	Ⅱ-1	1620～1630	畳付無釉で砂粒付着。
74-9	2面	SK25	磁器	皿	丸形	草文 口銹	染付	(13.2)	(6.1)	3.25	肥前	Ⅱ-1	1620～1640	畳付無釉。
74-10	2面	SK25	磁器	皿	輪花形	瓜文	染付	(13.4)	4.8	3.1	肥前	Ⅱ-2	1630～1640	型打成形の輪花皿。畳付無釉で砂粒付着。
74-11	2面	SK25	磁器	皿	折縁形	―	白磁	(14.2)	(6.0)	3.7	肥前	Ⅱ-2	1630～1650	畳付無釉。
75-1	2面	遺構外	磁器	小坏	―	―	透明釉	―	(3.1)	(2.3)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。
75-2	2面	遺構外	磁器	小坏	腰張形	草花文	青花	(7.2)	―	(3.6)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花小坏Ⅲ類。
75-3	2面	遺構外	磁器	碗	丸形	牡丹文	青花	(10.5)	―	(3.4)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花碗 H 群。
75-4	2面	遺構外	磁器	皿	稜花形	花卉文	青磁釉	(16.4)	―	(2.2)	中国 (龍泉窯系)	―	16C 末～ 17C 初頭	口縁部のみ残存。
75-5	2面	遺構外	陶器	小坏	丸形	―	灰釉	6.0	3.0	3.4	肥前	Ⅱ	1610～ 1650	被熱を受けている。
75-6	2面	遺構外	陶器	碗	筒丸形	―	透明釉	(10.1)	(4.5)	7.3	肥前	Ⅱ	1630～ 1640	全面施釉。漆継ぎ痕あり。
75-7	2面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(12.6)	4.9	3.3	肥前	Ⅰ-2	1594～ 1610	見込みに目跡無し。
75-8	2面	遺構外	陶器	皿	折縁形	草文	透明釉	―	4.4	(2.9)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	絵唐津。胎土目皿。目跡 4 箇所。
75-9	2面	遺構外	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	―	4.6	(4.3)	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
75-10	2面	遺構外	陶器	皿	溝縁形	―	灰釉	(14.0)	4.0	3.3	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
75-11	2面	遺構外	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(13.0)	4.3	3.7	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 4 箇所。
75-12	2面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	10.8	6.3	2.2	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
75-13	2面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	11.5	4.7	2.6	京都系	―	―	手づくね成形。内面に「の」字状のナデ上げ調整。
75-14	2面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	11.6	3.9	3.1	京都系	―	―	手づくね成形。内面に「の」字状のナデ上げ調整。
78-1	3面	SD06	磁器	碗	丸形	草花文	青花	(12.3)	―	(3.2)	中国 (漳州窯系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花碗 C 群粗製。
78-2	3面	SD06	磁器	碗	―	雨龍文	青花	―	(6.0)	(1.5)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花碗 H 群。高台内に方形枠と「祥」の文字銘。
78-3	3面	SD06	磁器	皿	丸形	端花文	青花	(10.4)	(6.0)	2.1	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花皿 E 群。畳付無釉で砂粒付着。
78-4	3面	SD06	磁器	皿	端反形	襷文	青花	(13.4)	(6.7)	3.2	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花皿 B2 群。内面に「長春富貴」、裏に「大明年造」の銘款。
78-5	3面	SD06	磁器	盤	―	植物文	青花	―	(14.3)	(2.4)	中国 (漳州窯系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花皿 F 群粗製。高台周辺に砂粒付着。
78-6	3面	SD06	陶器	碗	端反形	―	灰釉	(10.5)	(4.6)	7.1	肥前	Ⅱ	1610～1650	胴部下方から高台は露胎。
78-7	3面	SD06	陶器	碗	―	―	灰釉	―	(4.0)	(5.2)	肥前	Ⅱ	1610～1650	胴部下方から高台は露胎。
78-8	3面	SD06	陶器	皿	折縁形	鎬文の陰刻	鉄釉	(9.2)	―	(1.4)	瀬戸美濃		1590～1610	口縁部のみ残存。
78-9	3面	SD06	陶器	皿	丸形	―	藁灰釉	(10.7)	(3.9)	3.4	肥前	Ⅰ-1	1580～1594	岸岳系の皿。見込みに目跡無し。
78-10	3面	SD06	陶器	皿	丸形	―	藁灰釉	(11.2)	(3.8)	3.4	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	体部下方から高台は露胎。見込みに目跡無し。
78-11	3面	SD06	陶器	皿	丸形		透明釉	(10.6)	(3.8)	3.2	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。
78-12	3面	SD06	陶器	皿	端反形	―	灰釉	(12.6)	(4.5)	4.0	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。碁笥底状の高台。
78-13	3面	SD06	陶器	皿	方形	草文	透明釉	(12.5)	(4.0)	4.4	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	絵唐津の四方向付。胎土目皿。目跡 4 箇所。
78-14	3面	SD06	陶器	皿	丸形	口銹	透明釉	(13.2)	(4.4)	4.5	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 4 箇所。
79-1	3面	SD06	陶器	擂鉢	―	―	木灰釉	(28.1)	―	(6.7)	肥前	Ⅰ	1590～1620	胴部内面に同心円状の当て具痕。
79-2	3面	SD06	土師器	皿	―	―	―	12.2	3.2	2.9	京都系	―	―	手づくね成形。内面に「の」字状のナデ上げ調整。
79-3	3面	SD06	土師器	皿	灯明皿	―	―	(17.1)	(12.0)	2.4	京都系	―	―	手づくね成形。
83-1	3面	SK27	陶器	碗	半筒形	草文	透明釉	(10.5)	―	(4.8)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	簡素な文様の絵唐津。
83-2	3面	SK27	陶器	皿	丸形	―	灰釉	10.1	4.5	3.5	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	体部下方から高台は露胎。見込みに目跡無し。
85-1	3面	SK28	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(10.7)	(4.2)	2.3	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 4 箇所。碁笥底状の高台。
85-2	3面	SK28	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(10.3)	(4.3)	3.5	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。
85-3	3面	SK28	陶器	皿	溝縁形	―	灰釉	(13.6)	(4.2)	3.9	肥前	Ⅱ	1610～1650	砂目皿。目跡 3 箇所。
88-1	3面	SK30	陶器	碗	丸形	草文	透明釉	(10.6)	(4.1)	6.2	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	簡素な文様の絵唐津。
88-2	3面	SK30	陶器	碗	天目形	―	鉄釉	(10.8)	(4.0)	6.7	肥前	Ⅱ	1610～1650	胴部下方から高台は露胎。
95-1	3面	SK36	磁器	碗	―	―	青花	―	(4.7)	(2.5)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	芙蓉手の碗。森分類青花碗 I 群。

陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
95-2	3面	SK36	陶器	碗	丸形	―	藁灰釉	(11.1)	(4.1)	5.6	肥前(山瀬窯か)	Ⅰ-1	1580～1594	岸岳系の碗。胎土に 1mm 前後の長石を含む。
95-3	3面	SK36	陶器	碗	半球形	―	透明釉	(11.1)	(4.1)	6.3	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胴部下方から高台は露胎。
95-4	3面	SK36	陶器	碗	杉形	口銹	藁灰釉	(12.1)	(4.2)	7.1	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胴部下方から高台は露胎。
95-5	3面	SK36	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(10.6)	(5.6)	2.4	瀬戸美濃	―	1590～1610	内禿皿。見込みは釉剥ぎ。
95-6	3面	SK36	陶器	皿	丸形	草文	灰釉	(11.2)	(4.2)	3.3	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	簡素な文様の絵唐津。目跡 4 箇所。
95-7	3面	SK36	陶器	皿	輪花形	草文	透明釉	(13.0)	(4.4)	4.0	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	絵唐津の向付。見込みに目跡無し。
95-8	3面	SK36	陶器	皿	―	草文	透明釉	―	(4.6)	(2.7)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	絵唐津。畳付を残して全面施釉。見込みに目跡無し。
97-1	3面	SK37	磁器	碗	丸形	字文	青花	(10.9)	(4.4)	5.0	中国(漳州窯系)	―	16C 末～17C 初頭	森分類青花碗 C 群粗製。見込みに圏線と「壽」の字文。
97-2	3面	SK37	陶器	小坏	丸形	―	灰釉	(7.6)	(3.1)	4.4	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	高台は露胎。
97-3	3面	SK37	陶器	碗	丸形	―	藁灰釉	(11.5)	(4.0)	5.6	肥前(山瀬窯か)	Ⅰ-1	1580～1594	岸岳系の碗。胎土に 1mm 前後の長石を含む。
97-4	3面	SK37	陶器	碗	杉形	―	灰釉	(10.1)	(3.9)	6.1	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胴部下方から高台は露胎。
97-5	3面	SK37	陶器	碗	丸形	イッチン掛け	黒釉	―	(4.2)	(5.8)	肥前	Ⅱ	1610～1650	素麺手の碗。胴部下方から高台は露胎。
97-6	3面	SK37	陶器	皿	丸形	―	灰釉	11.6	4.3	3.5	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	碁笥底状の高台。見込みに目跡無し。
97-7	3面	SK37	陶器	皿	丸形	―	灰釉	11.5	4.2	3.3	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	見込みに目跡無し。
97-8	3面	SK37	陶器	皿	平形	―	灰釉	13.5	4.3	4.0	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	被熱を受けている。
97-9	3面	SK37	陶器	片口	丸形	―	灰釉	(17.3)	(8.3)	13.1	肥前	―	17C 前半	注口脇の両側に鋲止めの装飾。
97-10	3面	SK37	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(27.1)	(9.0)	13.1	肥前	Ⅰ	1590～1620	口縁部周辺から胴部上方に鉄釉。
97-11	3面	SK37	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(28.4)	(9.8)	12.6	肥前	Ⅰ	1590～1620	口縁部周辺から胴部上方に鉄釉。
99-1	3面	SK38	陶器	碗	丸形	―	灰釉	(11.3)	(4.5)	5.4	肥前	Ⅱ	1610～1650	高台は露胎。
101-1	3面	遺構外	陶器	碗	丸形	釉薬流し掛け	柿釉 黒釉	(10.4)	4.2	6.7	瀬戸美濃	―	16C 末～17C 初頭	高台は露胎。
101-2	3面	遺構外	陶器	碗	筒形	―	透明釉	(8.4)	(4.6)	7.4	肥前	Ⅱ	1610～1650	畳付を残して全面施釉。
101-3	3面	遺構外	陶器	碗	端反形	―	透明釉	(11.1)	(4.7)	7.3	肥前	Ⅱ	1610～1650	畳付を残して全面施釉。
101-4	3面	遺構外	陶器	大皿	折縁形	釉薬流し掛け	透明釉 緑釉・鉄釉	(38.0)	―	(7.9)	肥前	Ⅱ	1610～1630	二彩手の大皿。緑釉・鉄釉の流し掛け。
101-5	3面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(20.9)	―	(7.2)	肥前	Ⅰ	1590～1620	口縁部周辺から胴部上方に鉄釉。
101-6	3面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(30.8)	―	(7.2)	肥前	Ⅱ	1620～1630	口縁部周辺のみに鉄釉。
101-7	3面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(32.4)	―	(6.7)	肥前	Ⅱ	1620～1630	口縁部周辺のみに鉄釉。
101-8	3面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	―	(28.2)	(11.4)	12.1	備前	―	1600～1620	乗岡編年近世 1c 期。
102-1	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.3	4.4	1.6	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-2	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.3	4.6	1.7	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-3	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.3	4.4	1.7	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-4	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.4	4.7	1.6	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-5	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.5	4.7	1.6	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-6	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.6	4.4	1.7	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-7	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.6	4.4	1.5	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-8	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	7.7	5.6	1.4	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-9	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	10.8	5.2	2.5	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
102-10	3面	遺構外	土師器	灯明皿	―	―	―	12.6	5.4	2.4	京都系	―	―	手づくね成形。内面に「の」字状のナデ上げ調整。
103-1	3面	遺構外	磁器	小坏	端反形	人物文	青花	(6.7)	―	(3.2)	中国(景徳鎮系)	―	16C 末～17C 初頭	森分類青花小坏Ⅰ類。
103-2	3面	遺構外	磁器	小坏	―	草文 二重圏線	青花	―	(2.4)	(1.6)	中国(景徳鎮系)	―	16C 末～17C 初頭	森分類青花小坏Ⅲ類。
103-3	3面	遺構外	磁器	小坏	―	人物文 圏線	青花	―	(2.8)	(1.5)	中国(景徳鎮系)	―	16C 末～17C 初頭	森分類青花小坏Ⅰ類。
103-4	3面	遺構外	陶器	皿	長方形	幾何学文	長石釉 緑釉	―	―	5.2	瀬戸美濃(青織部)	―	16C 末～17C 初頭	青織部の変形向付。
103-5	3面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(11.6)	4.4	3.8	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	見込みに目跡無し。
103-6	3面	遺構外	陶器	皿	端反形	―	透明釉	(11.5)	3.5	3.0	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 4 箇所。碁笥底状の高台。
103-7	3面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(11.9)	4.5	3.5	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。
103-8	3面	遺構外	陶器	皿	―	蔓草文	透明釉	―	4.2	(2.1)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	絵唐津。高台は露胎。
103-9	3面	遺構外	土師器	皿	―	墨書	―	―	5.5	(1.1)	在地系	―	―	ロクロ成形。底部外面に「卯月御日待ち　三日」の墨書あり。

銭貨

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量 / 直径	備考
46-3	1面	SE02	寛永通寶	25.1	6.1	1.16	3.49	100	0.14	新寛永。背文に「文」をもつ文銭。
99-4	3面	SK38	熙寧元寶	23.9	6.6	1.33	2.89	100	0.12	1068 年初鋳の北宋銭。模鋳銭か。

金属製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	材質	法量		備考
						大きさ (cm)	重量 (g)	
52-5	2面	SB01	煙管(雁首)	―	真鍮	長さ4.85/高さ2.5/火皿径1.5	4.75	肩部を筒状におさめる。
52-6	2面	SB01	矢立	印籠形	真鍮	長さ2.4/幅3.8/厚さ0.1	19.28	金メッキを施した印籠形の矢立。
52-7	2面	SB01	小皿	丸形	真鍮	口径(8.7)/底径(5.5)/器高2.3	73.35	口縁端部を丸くおさめる。
64-2	2面	SK20	匙	流線形	真鍮	長さ25.1/幅3.5(柄部0.7)	55.40	ツボ部分が流線形の匙。
99-2	3面	SK38	煙管(雁首)	―	真鍮	長さ6.0/高さ2.2/火皿径1.1	6.13	肩部を筒状におさめる。
99-3	3面	SK38	煙管(吸口)	―	真鍮	長さ5.5/小口0.8/口付0.2	4.50	首部を口付に向かって細くする。
104-4	3面	遺構外	鎌	―	鉄	刃部 長さ(20.8)/幅4.5/厚さ0.1～0.3 柄部 長さ42.9/幅3.0～4.0/厚さ1.4～2.0	136.75 (刃部のみ)	全長 46㎝の鎌。2 箇所の目釘と楕円形の金具で刃と柄を固定する。

石製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	材質	法量		生産地	備考
					大きさ (cm)	重量 (g)		
52-4	2面	SB01	長方硯	凝灰岩	長さ8.0/幅5.7/厚さ1.2	59.10	―	墨池部分は欠損。矢立とセットか。

木製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	各称部位	法量 (cm)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
29-11	1面	SK10	漆器	平椀	11.6	5.5	4.3	―	―	腰張形の平椀。塗りは内外面とも黒漆。
29-12	1面	SK10	漆器	平椀	11.9	7.5	4.5	―	―	平椀。塗りは内外面とも黒漆。高台内に陰刻あり。
29-13	1面	SK10	漆器	平椀	11.7	6.7	5.0	―	―	平椀。塗りは内外面とも黒漆。
79-4	3面	SD06	漆器	丸椀	12.4	6.5	6.4	―	―	丸椀。塗りは内面が赤漆、外面が黒漆で無文。
79-5	3面	SD06	枡	木地枡	―	9.7	3.5	側板3.1 底板0.5	柾目 板目	内法一辺 5㎝の方形枡。4 箇所の目釘で底板と側板を接合。
79-6	3面	SD06	木簡	墨書木簡	13.9	3.1	―	0.5	柾目	木簡上端は欠損。片面に「大豆」の墨書あり。
79-7	3面	SD06	箆	―	(17.2)	2.7	―	1.0	柾目	箆部を弧状に削り加工を施す。
79-8	3面	SD06	箆	―	20.7	3.1	―	0.5	柾目	箆部を弧状に削り加工を施す。
79-9	3面	SD06	箆	―	24.5	4.9	―	0.6	柾目	箆部を弧状に削り加工を施す。
79-10	3面	SD06	箸	―	26.3	0.7	―	0.5	―	白木の箸。
79-11	3面	SD06	箸	―	27.6	0.8	―	0.6	―	白木の箸。
79-12	3面	SD06	箸	―	28.3	0.7	―	0.6	―	白木の箸。
79-13	3面	SD06	下駄	角型連歯下駄	14.3	6.7	3.9	1.3	柾目	歯高 2.6㎝。子供用の下駄。
79-14	3面	SD06	下駄	丸型連歯下駄	16.4	6.7	2.4	1.0	柾目	子供用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
79-15	3面	SD06	下駄	丸型連歯下駄	21.5	10.4	7.9	2.5	柾目	成人用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
102-11	3面	遺構外	人形	木彫り人形	―	6.7	9.2	―	―	大黒天の木彫り人形。胴体の両側は一部欠損。
102-12	3面	遺構外	漆器	重箱	19.9	5.0	―	0.6	柾目	内外面に黒漆を施した後、外面に金漆で絵付け。
102-13	3面	遺構外	下駄	丸型差歯下駄	20.8	8.0	4.4	2.2	柾目	成人用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
102-14	3面	遺構外	下駄	角型差歯下駄	22.7	8.5	(3.9)	3.9	柾目	成人用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
104-1	3面	遺構外	木簡	墨書木簡	20.0	上幅4.0 下幅3.1	―	0.6	柾目	短冊形の荷札木簡。片面に「堀尾山城守　荷物」、その裏面に「林吉兵衛殿参　奥田新右衛門」の墨書あり。
104-2	3面	遺構外	打鍬	風呂	17.5	10.5	―	3.1	柾目	柄部は欠損。風呂の先端に鉄製の鍬先を装着したものか。
104-3	3面	遺構外	下駄	角型刳り下駄	23.1	9.0	4.1	1.6	柾目	歯高 4.1㎝。成人用の下駄。

瓦

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	胎土	装飾	法量		備考
							大きさ (cm)	重量 (g)	
56-4	2面	SD02	鬼瓦	飾り瓦	灰色	宝珠文	高さ(16.5)/幅(16.6)/厚さ2.5	716	宝珠部分のみ残存。
66-2	2面	SK21	軒丸瓦	―	灰色	三巴文 珠文	外径(15.8)/内径(10.6)/厚さ1.7	271	松江城軒丸瓦分類 A-1 類 B。
66-3	2面	SK21	軒丸瓦	―	灰色	三巴文 珠文	外径(16.4)/内径(10.4)/厚さ2.0	302	松江城軒丸瓦分類 A-3 類 D。
66-4	2面	SK21	軒平瓦	―	灰色	三葉文	幅(13.5)/高さ4.3/厚さ1.8	316	松江城軒平瓦分類下向三葉 B-1 類。

陶磁器・土師器皿 (2 区)

遺物番号	トレンチ	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm)			生産地	九陶編年	生産地年代	備考
							口径	底径	器高				
112-1	T3	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	―	4.5	(3.1)	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。
112-2	T3	陶器	皿	折縁形	―	灰釉	(12.5)	4.4	3.9	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 2 箇所残存。碁笥底状の高台。
117-1	T7	磁器	碗	丸形	唐草文 二重圏線	青花	(10.0)	―	(3.0)	中国 (漳州窯系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森分類青花碗 F1 群。
117-2	T7	磁器	碗	丸形	馬文 丸文の陰刻	青花	(12.6)	―	(3.8)	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	型押成形の芙蓉手の碗。森分類青花碗 I1 群。
117-3	T7	陶器	皿	折縁形	口銹	灰釉	(11.4)	3.6	3.4	肥前	Ⅰ-2	1594～1610	胎土目皿。目跡 3 箇所。焼き歪みあり。
117-4	T7	土師器	皿	―	―	―	7.5	4.5	1.4	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。
117-5	T7	土師器	皿	―	―	―	8.1	5.0	1.9	在地系	―	―	ロクロ成形。底部に糸切り痕。

参考文献

研究資料・書籍

大手前通りを調べる会　2004『大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書』
関西近世考古学研究会　2010『関西近世考古学研究 18 －消費地からみた国産陶磁器の出現と展開－』
関西近世考古学研究会　2012『関西近世考古学研究 20 －関西における町屋敷の変遷－』
関西近世考古学研究会　2014『関西近世考古学研究 22 －中近世都市の堀状遺構について－』
関西近世考古学研究会　2016『関西近世考古学研究 24 －歴史資料としての近世貿易陶磁－』
関西近世考古学研究会　2022『関西近世考古学研究 28 － 19 世紀における陶磁器生産と消費－』
山陰考古学研究会　2014『山陰の近世城郭と城下町－遺跡調査と遺物組成から－』第 42 回山陰考古学研究集会資料集
松江市鹿島歴史民俗資料館　2007『松江城下を掘る』特別展図録
松江市史編集委員会　2014『松江市史　史料編 11　絵図・地図』松江市
松江市史編集委員会　2018『松江市史　別編 1　松江城』松江市

個人論文

小山泰生　2016「松江城下町遺跡における陶磁器の様相と編年」『松江市歴史叢書 9』松江市
佐々木倫朗ほか　2007「春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について」『松江市歴史叢書 1』松江市教育委員会
松尾信裕　2005「近世大坂の発掘調査と地域史研究」『日本歴史　第 690 号』吉川弘文館
松尾信裕　2017「近世初頭の都市における町人地の形態と内部構造」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 204 集』
村上伸之　2015「肥前有田の磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会
森　　毅　1992「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア　第 149 号』大阪歴史学会

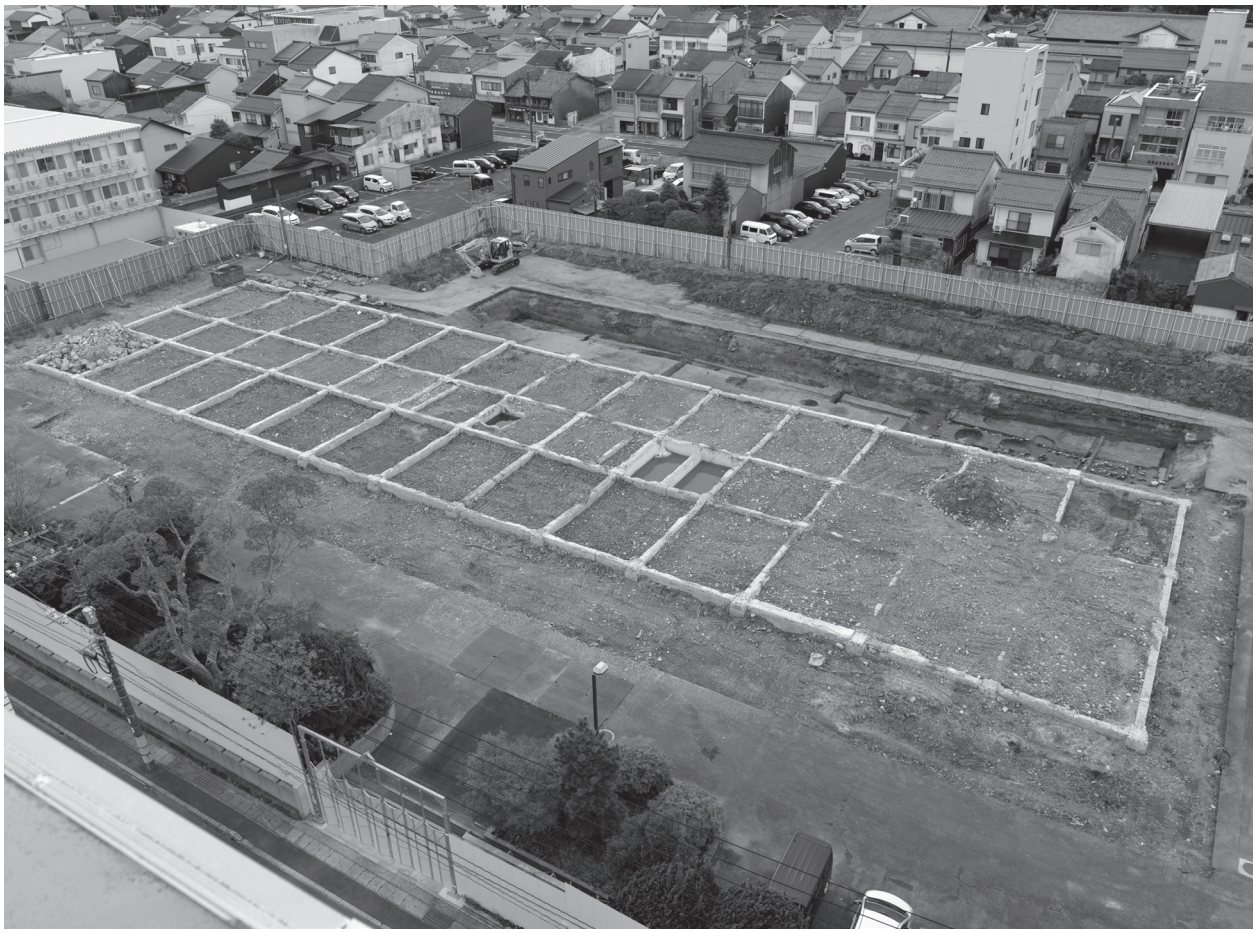
発掘調査報告書

落合昭久ほか　2011『松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡（殿町 287 番地）（殿町 279 番地外）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 139 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
小山泰生　2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 4 』松江市文化財調査報告書第 157 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
小山泰生ほか　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 5』松江市文化財調査報告書第 163 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
小山泰生　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 7』松江市文化財調査報告書第 171 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
小山泰生　2018『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 8』松江市文化財調査報告書第 185 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ・文化振興財団
西尾克己ほか　1984『冨田川－飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告 (4) －』島根県教育委員会
園山　薫　2013『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 2 』松江市文化財調査報告書第 154 集松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
園山　薫ほか　2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 3 』松江市文化財調査報告書第 156 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
徳永桃代ほか　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 6』松江市文化財調査報告書第 167 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
秦　愛子　2015『広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所合同庁舎新営工事に伴う松江城下町遺跡（母衣町 68）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 164 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
柚原恒平　2012『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 1 』松江市文化財調査報告書第 148 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団

写　真　図　版

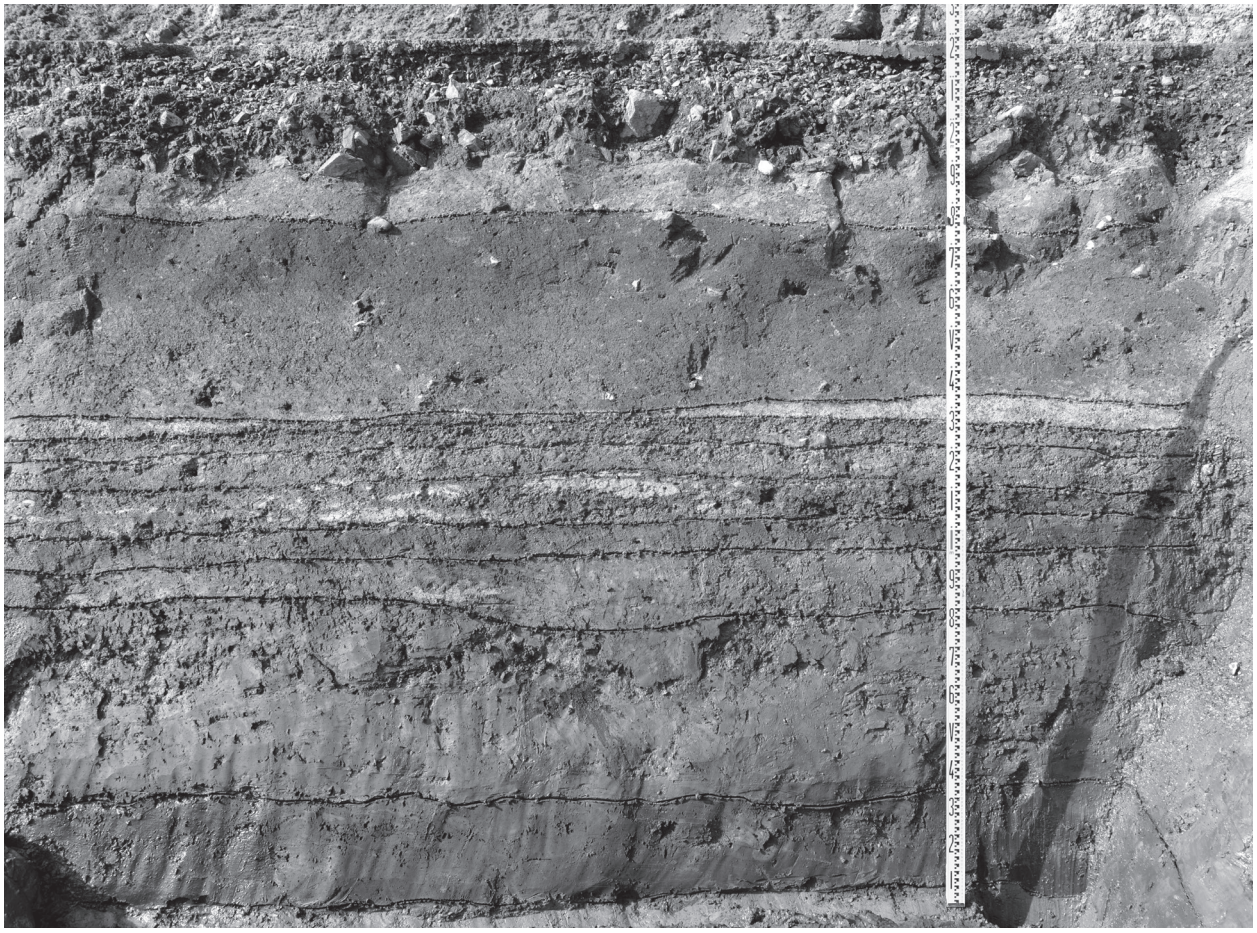
※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例：図版 29　16-1 は第 16 図 1 を示す。)

1　調査地北側と周辺部　（東から）　　写真奥に松江城、右側に外堀（北田川）



2　調査地全景　（北東から）　　写真奥が1区、手前が２区

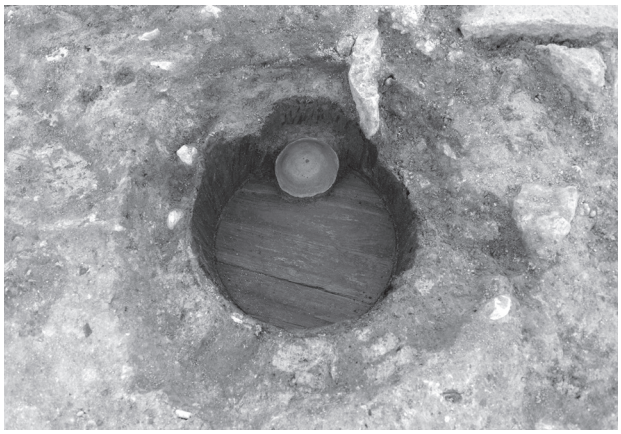
図版2　基本土層



1　基本土層　1区　西壁土層断面（一部）（東から）

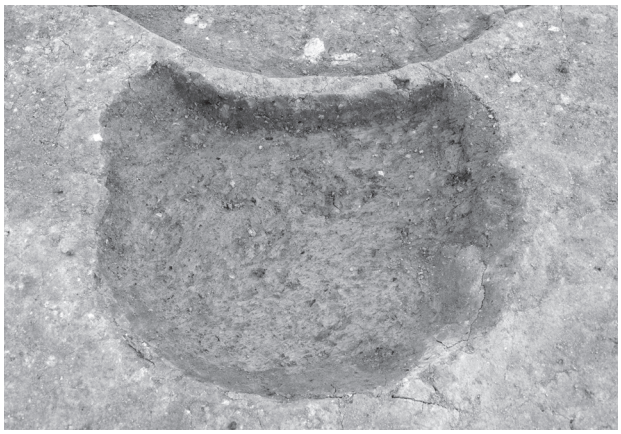
2　基本土層　1区　北壁土層断面　（南西から）

1　1区　調査前全景　（南から）



2　埋桶土坑SK01　完掘状況　（東から）

3　土坑SK02　完掘状況　（南から）



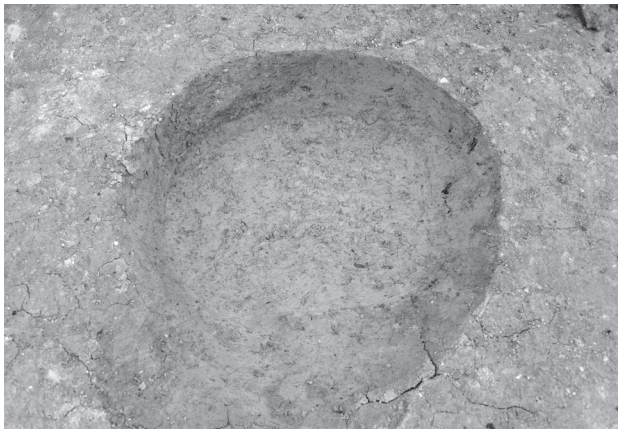
4　土坑SK03　完掘状況　（南から）

5　土坑SK04　完掘状況　（南から）

図版4　1区

1　埋桶土坑SK05　完掘状況　（東から）

2　埋桶土坑SK06　完掘状況　（東から）

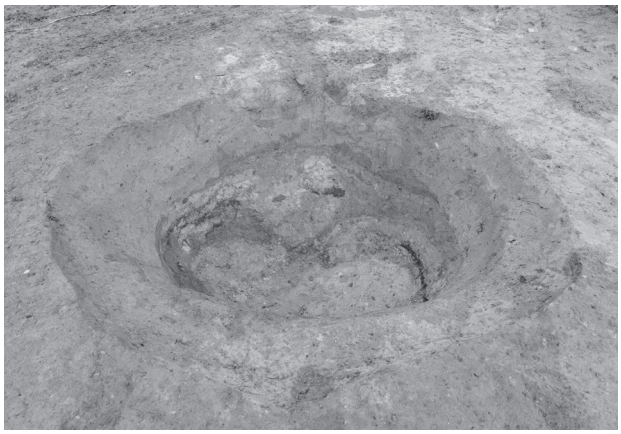


3　土坑SK07　完掘状況　（南から）

4　土坑SK08　完掘状況　（南から）

5　土坑SK09　完掘状況　（南から）

6　土坑SK10　半截状況　（南から）



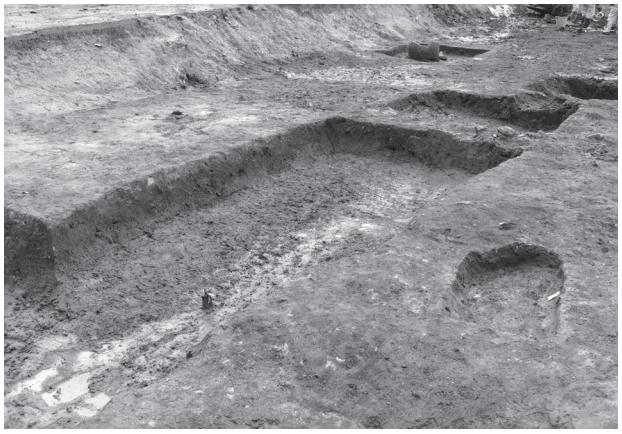
7　土坑SK10　完掘状況　（南から）

8　土坑SK11・12・13　完掘状況　（南東から）

1　土坑SK11　半截状況　（東から）

2　土坑SK11床面　木枠井戸　（東から）

3　土坑SK14　完掘状況　（南から）



4　土坑SK15　完掘状況　（南東から）

5　土坑SK16　完掘状況　（南東から）

6　土坑SK17　完掘状況　（南から）

7　来待石製井戸SE01　完掘状況　（北東から）

8　木枠井戸SE02　完掘状況　（北東から）

図版6　1区

1　第1遺構面　完掘状況　（南から）

2　第2遺構面　検出状況　（南から）

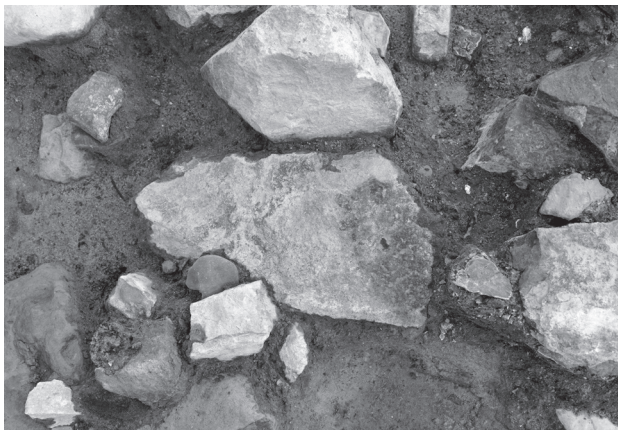
1　第2遺構面　調査区北側　遺構検出状況　（南から）

2　礎石建物跡SB01　完掘状況　（南から）

図版8　1区

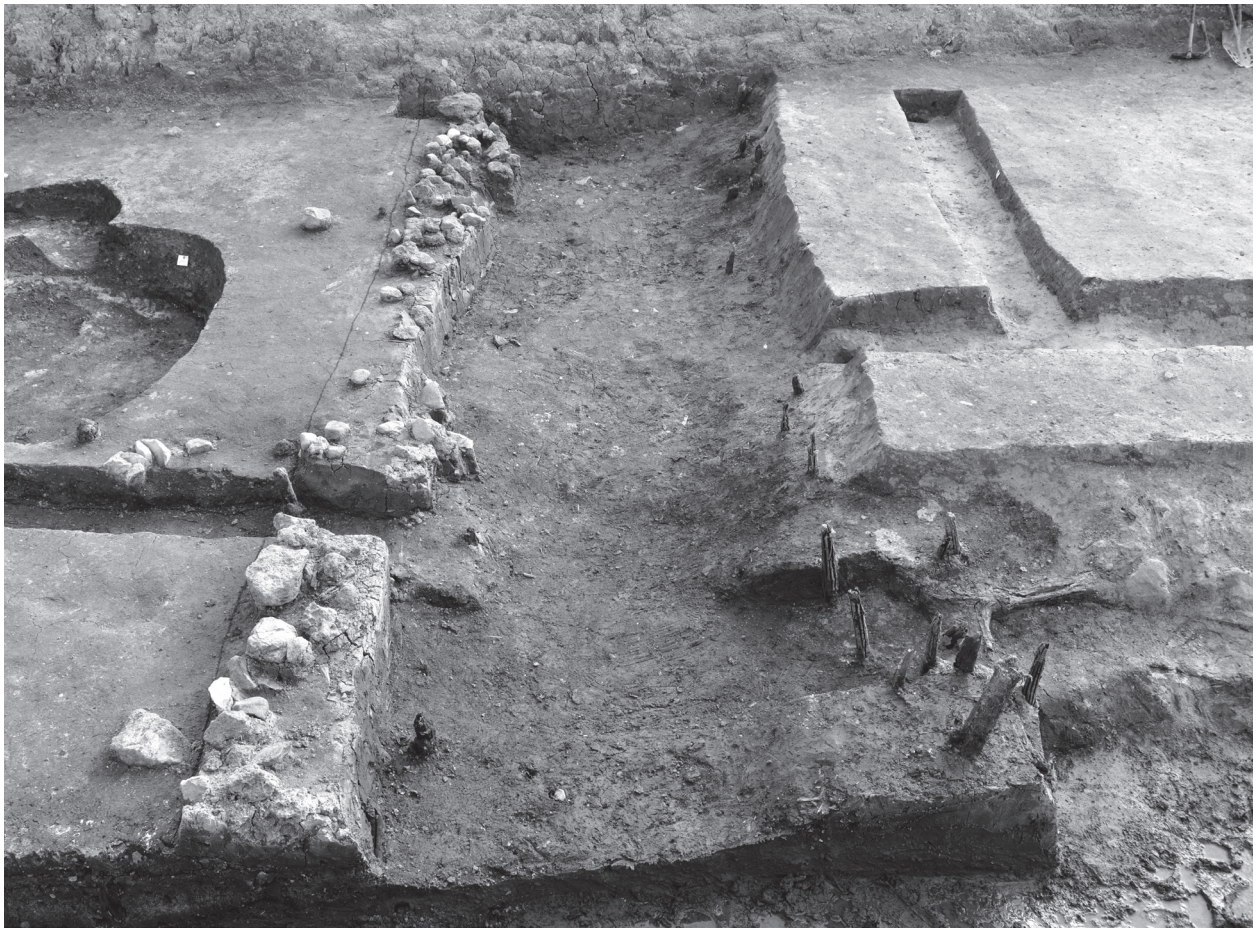
1　礎石建物跡SB01　完掘状況　（南西から）

2　SB01西側礎石列　（北から）



3　SB01礎石　（南から）

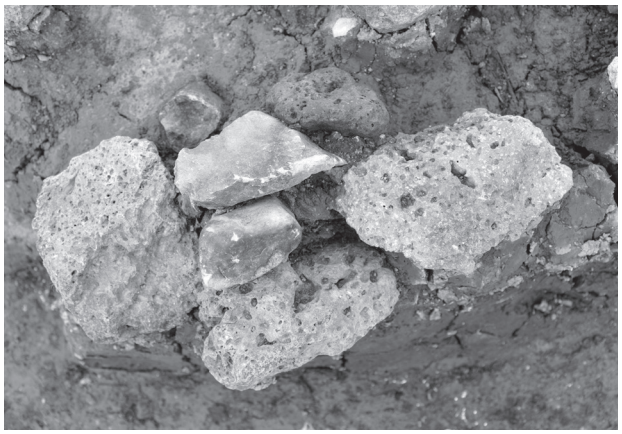
4　SB01礎石　（西から）



1　屋敷境溝SD01　完掘状況　（西から）

2　SD01溝肩北側石列　（西から）

3　SD01埋土断面　（東から）



4　SD01溝肩北側石列の被熱痕跡　（南から）

図版10　1区

1　区画境溝SD02　完掘状況　（南から）

2　通路跡SF01　検出状況　（南から）

3　SD02・SF01埋土断面　（南から）

4　SD02竹木舞　検出状況　（南から）

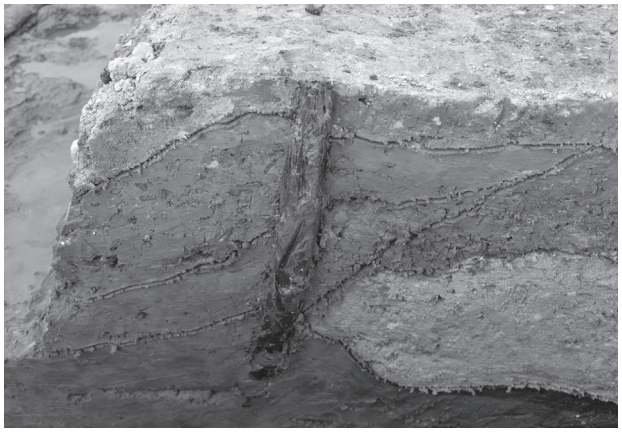
1　区画境溝SD02と屋敷境溝SD04　（北から）

2　溝SD03　完掘状況　（南から）

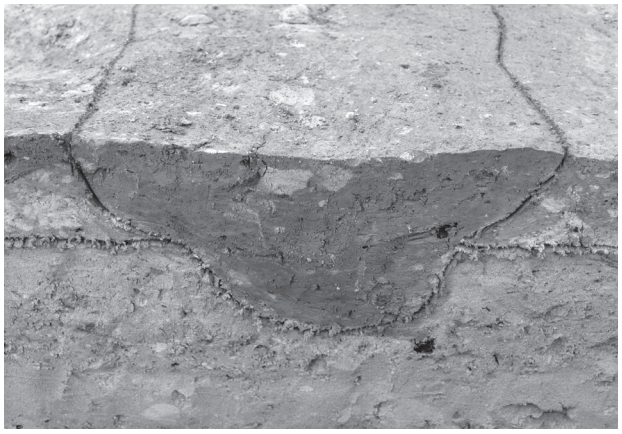
3　屋敷境溝SD04・溝SD05　完掘状況　（南から）

図版12　1区

1　屋敷境溝SD04　完掘状況　（南から）



2　SD04溝肩東側埋土断面　（南から）



3　SD05埋土断面　（南から）

4　SD04溝肩東側　柵SA01　検出状況　（北から）

1　土坑SK18　完掘状況　（南から）

2　土坑SK19　完掘状況　（北東から）

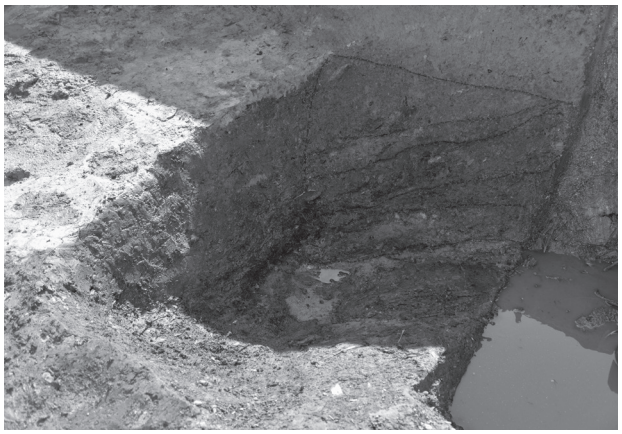
3　土坑SK20　完掘状況　（南から）

4　土坑SK21　完掘状況　（南から）

5　土坑SK22　完掘状況　（南から）

6　土坑SK23　完掘状況　（南から）

7　土坑SK24　完掘状況　（南東から）



8　土坑SK25　完掘状況　（北西から）

図版14　1区

1　第2遺構面　完掘状況　（南から）

2　第3遺構面　検出状況　（南から）

1　屋敷境溝SD06　完掘状況　（東から）

2　溝SD07　完掘状況　（南から）

3　溝SD08　完掘状況　（南から）

図版16　1区

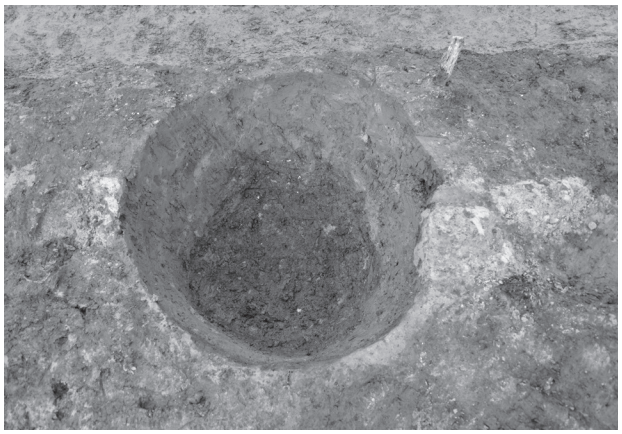
1　土坑SK26　完掘状況　（南から）

2　土坑SK27・29　検出状況　（南から）

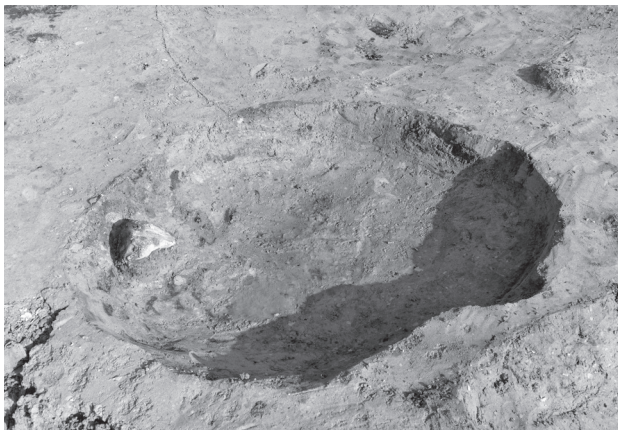
3　土坑SK27　完掘状況　（東から）

4　土坑SK28　完掘状況　（南東から）

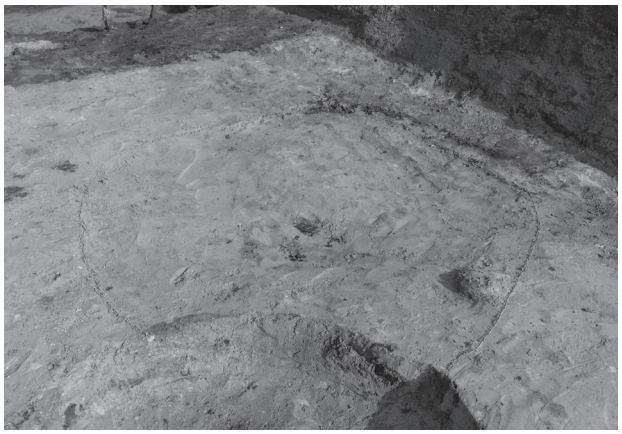
5　土坑SK30　完掘状況　（南西から）



6　土坑SK31　完掘状況　（南から）



7　土坑SK32　完掘状況　（南西から）



8　土坑SK33　完掘状況　（南西から）

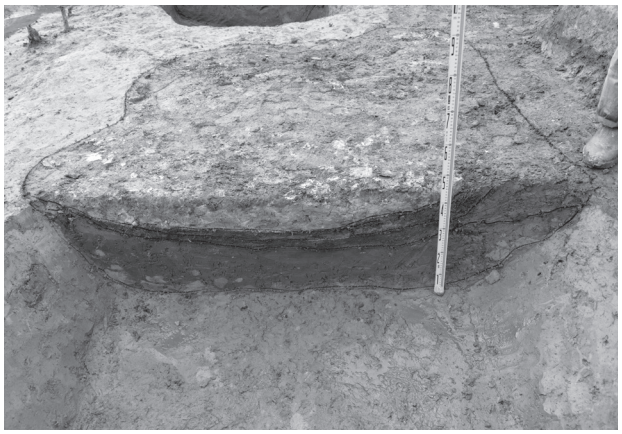
1　土坑SK34　完掘状況　（南西から）

2　土坑SK35　完掘状況　（南西から）

3　土坑SK36・37　完掘状況　（南東から）

4　土坑SK36　半截状況　（東から）

5　土坑SK36　完掘状況　（南東から）



6　土坑SK37　半截状況　（東から）

7　土坑SK37　完掘状況　（南西から）

8　土坑SK38　完掘状況　（南西から）

図版18　1区

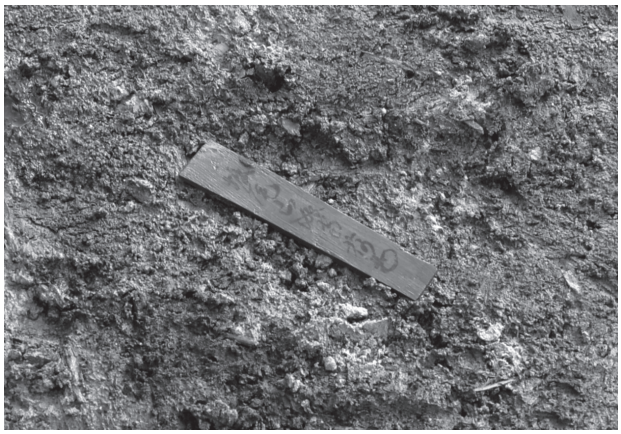
1　調査区中央付近　島状整地　検出状況　（南西から）

2　調査区北側　造成土境界平面プラン　検出状況　（西から）

1　調査区南側　屋敷地内造成土・有機物堆積層平面プラン　検出状況　（北西から）

2　造成土境界地点　東壁土層堆積状況　（西から）

3　有機物堆積層　土師器皿出土状況　（第102図-1～9）



4　第3遺構面遺構外　荷札木簡出土状況　（第104図-1）

5　第3遺構面遺構外　鎌出土状況　（第104図-4）

図版20　1区

1　第3遺構面　調査区北側　完掘状況　（南東から）

2　第4遺構面　検出状況　（南から）

1　性格不明遺構SX01　検出状況　（北東から）

2　SX01北端掘り込み面　土層堆積状況　（東から）

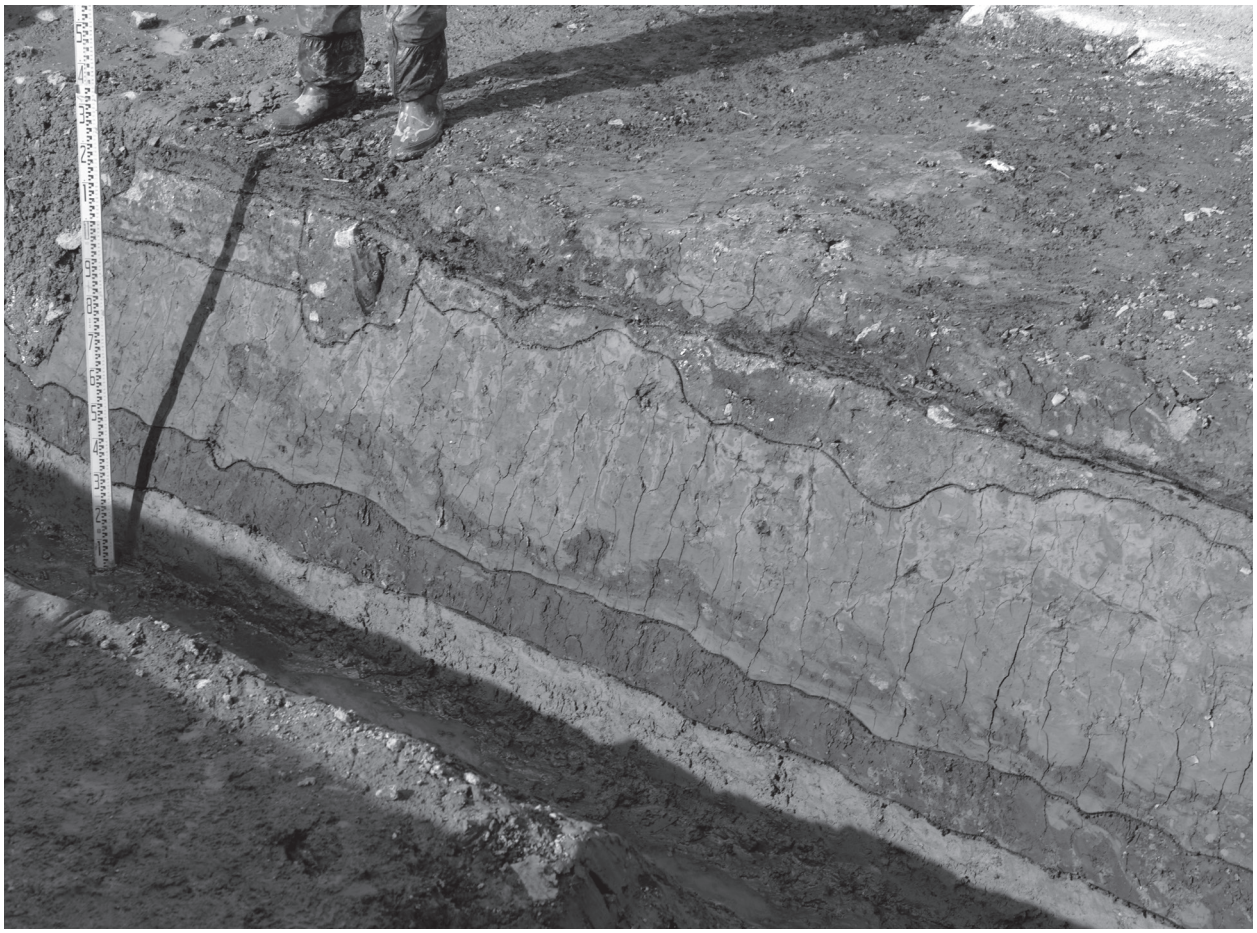
3　SX01埋土断面　（第106図A-A′間）

4　SX01埋土断面　（第106図B-B′間）

5　SX01埋土断面　（第106図C-C′間）

図版22　２区

1　2区　調査前全景　（北から）



2　第1ブロック　北壁土層堆積状況　（南東から）

1　第2ブロック　北壁土層堆積状況　（南東から）

2　第3ブロック　西壁土層堆積状況　（東から）

図版24　２区

1　第４ブロック　東壁土層堆積状況　（西から）

2　第５ブロック　西壁土層堆積状況　（東から）

1　第6ブロック　東壁土層堆積状況　（西から）

2　第7ブロック　西壁土層堆積状況（屋敷境溝SD09北側肩部）（東から）

図版26　２区

1　第９ブロック　西壁土層堆積状況（屋敷境溝SD09南側肩部）（東から）

2　第７・９ブロック　SD09埋土断面　（南東から）

1　第8ブロック　東壁土層堆積状況（屋敷境溝SD09北側肩部）（西から）

2　第10ブロック　東壁土層堆積状況（屋敷境溝SD09南側肩部）（西から）

図版28　２区

1　第8・10ブロック　SD09埋土断面　（南西から）

2　第8・10ブロック　調査区から東側の外堀（米子川）方向へ延びる屋敷境溝SD09　（西から）

16-1

18-1

18-2

20-1

20-2

24-1

29-1

29-2

29-3

29-4

29-5

29-6

29-7

29-8

29-9

29-10

29-11

29-12

29-13

図版30　1区　第1遺構面出土遺物

31-1

31-2

31-3

31-4

32-1

32-2

32-6

32-3

32-4

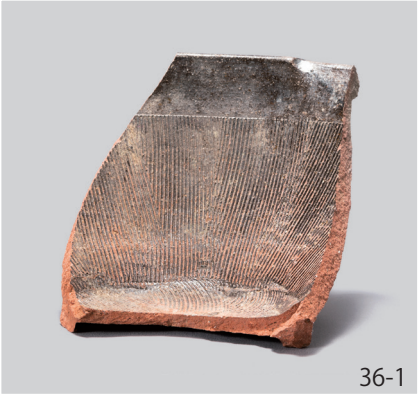
32-5

33-1

33-2

33-3

33-4


36-1

36-2

37-2

37-1

37-3

39-1

39-2

41-1

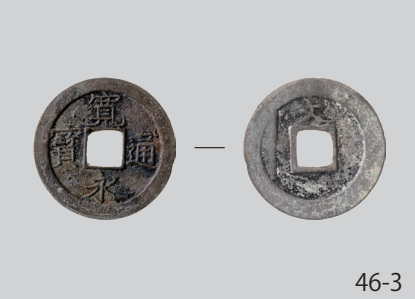
41-2

43-1

43-2

46-1

46-2


46-3

47-1

47-2

47-3

図版32　1区　第1遺構面出土遺物

47-4

47-5

47-6

47-7

48-1

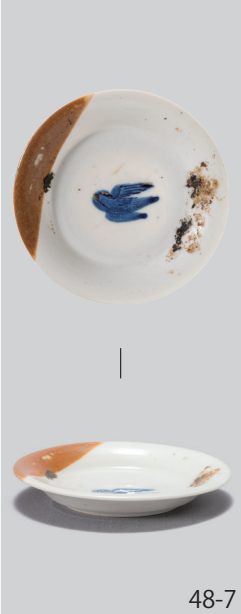
48-2

48-3

48-4

48-5

48-6


48-7

48-8

48-9

48-10

48-11

48-12

48-13

52-1

52-2

52-3

52-4

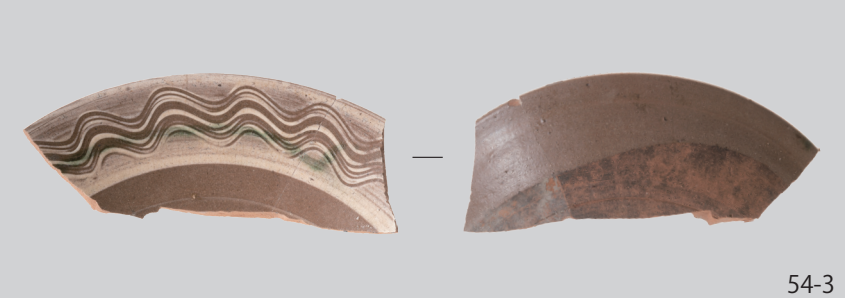
52-5

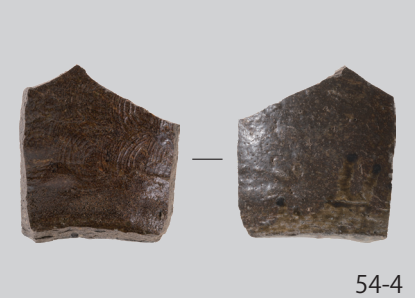
52-6

52-7

54-1

54-2

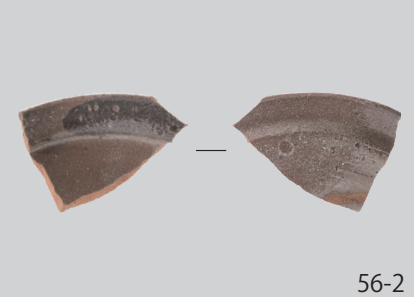

54-3

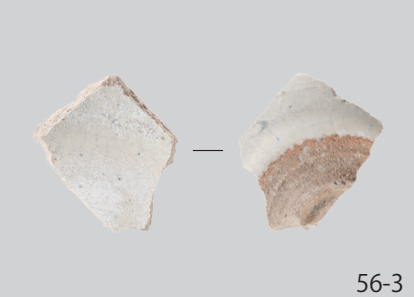

54-4

54-5

56-1

56-4


56-2


56-3

図版34　1区　第2遺構面出土遺物

59-1

59-2

59-3

59-4

61-1

61-2

61-3

64-1

64-2

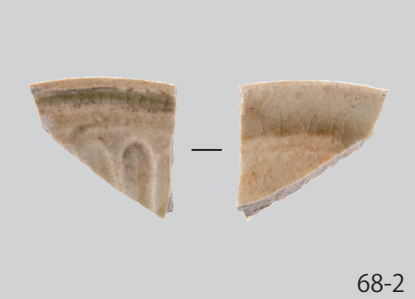
66-1

66-2

66-3

66-4

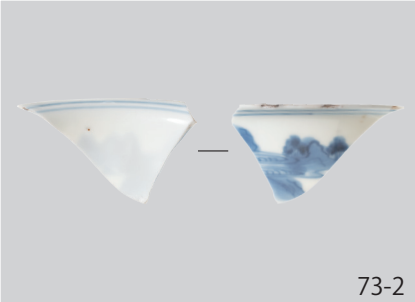
68-1


68-2

68-3

70-1

73-1

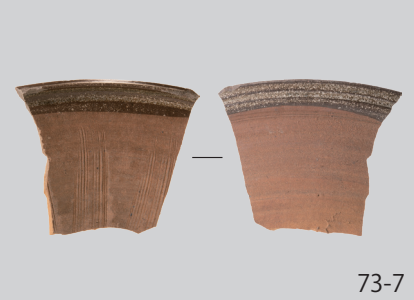

73-2

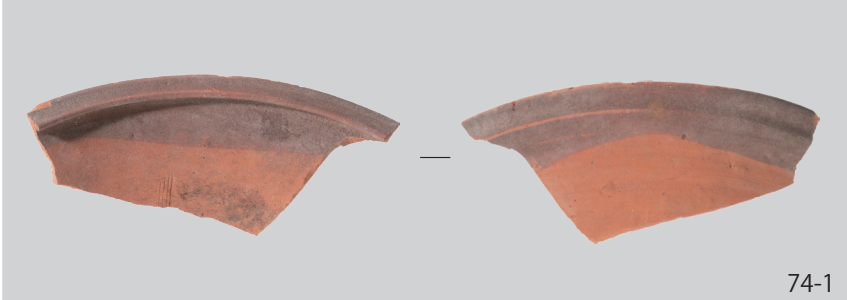
73-3

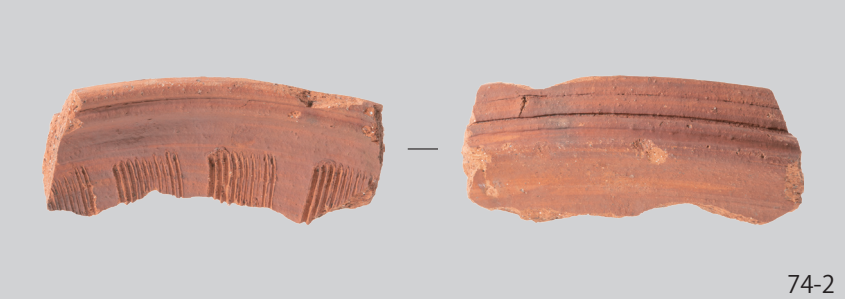
73-4

73-5

73-6


73-7


74-1


74-2

74-3

74-4

74-5

74-6

74-7

74-11

75-1

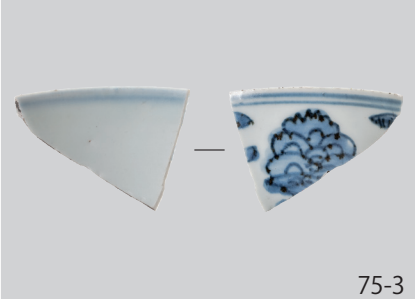
図版36　1区　第2遺構面出土遺物

74-8

74-9

74-10

75-2


75-3

75-4

75-5

75-6

75-7

75-8

75-9

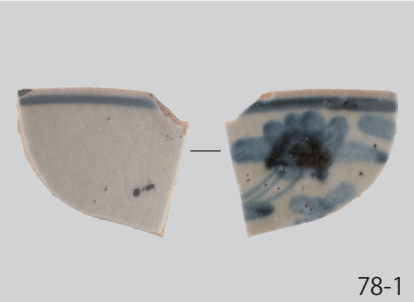
75-10

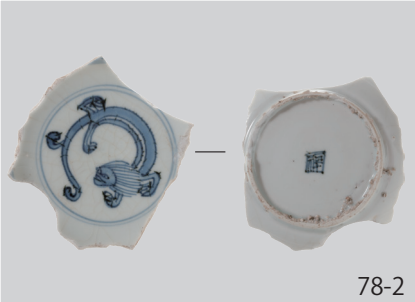
75-11

75-12

75-13

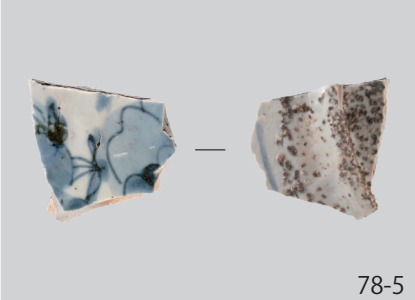
75-14


78-1


78-2

78-3

78-4


78-5

78-6

78-7

78-8

78-9

78-10

78-11

78-12

78-13

78-14

79-1

79-2

79-3

79-4

図版38　1区　第3遺構面出土遺物

79-5

79-6

79-7

79-8

79-9

79-10

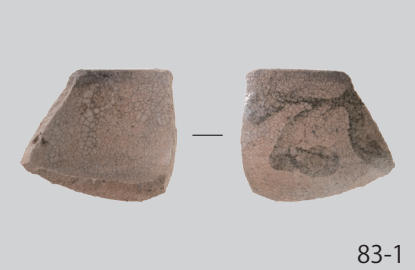
79-11

79-12

79-13

79-14

79-15


83-1

83-2

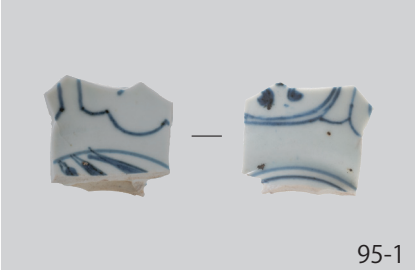
85-1

85-2

85-3

88-1

88-2

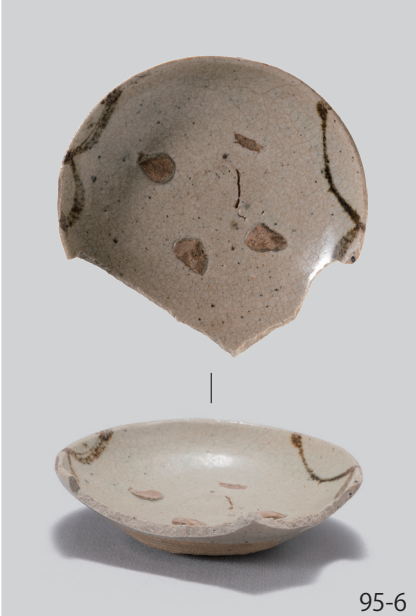

95-1

95-2

95-3

95-4

95-5


95-6

95-7

95-8

97-1

97-2

97-3

97-4

97-5

97-6

97-7

97-8

図版40　1区　第3遺構面出土遺物

97-9

97-10

97-11

99-1

99-2

99-3

99-4

101-1

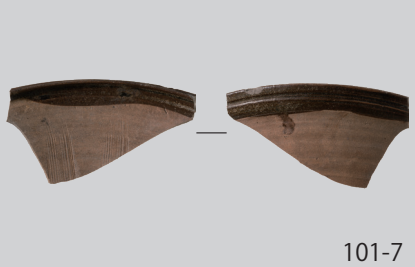
101-2

101-3

101-4

101-5

101-6


101-7

101-8

102-1

102-2

102-3

102-4

102-5

102-6

102-7

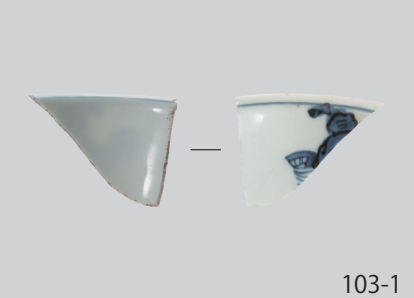
102-8

102-9

102-10

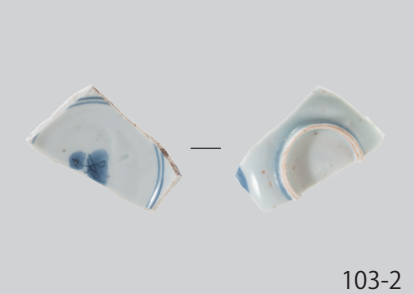
102-12

102-11

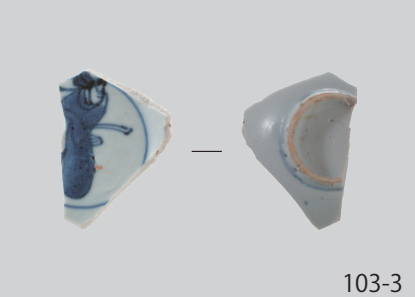

103-1

102-13

102-14


103-2

103-4


103-3

図版42　1区　第3遺構面・2区　T3・T7出土遺物

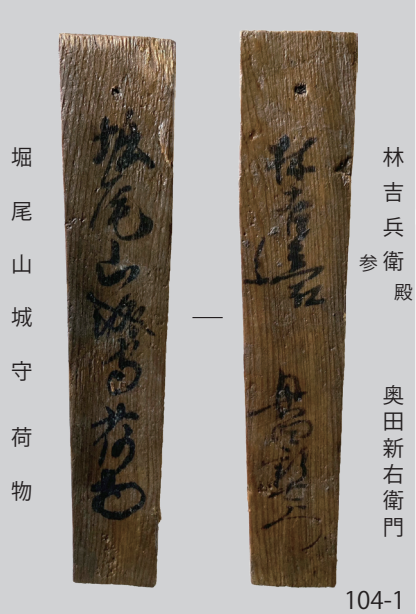
103-5

103-6

103-7

103-8

103-9



104-1

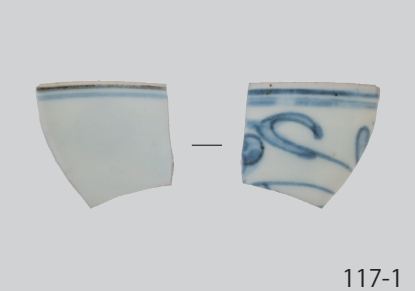
104-2

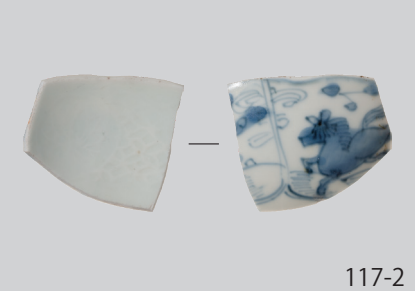
104-3

104-4

112-1

112-2


117-1


117-2

117-3

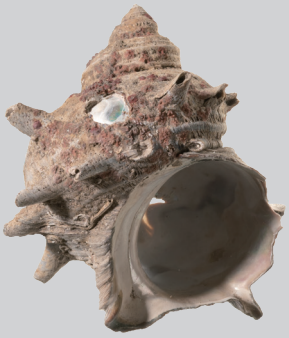
117-4

117-5

No.1　イタヤガイ(左)

No.40　テングニシ

No.20　サザエ



No.42　サザエ

No.43　サザエ

No.44　サザエ

No.45　サザエ

No.41　テングニシ

No.53　イワガキ(右)

No.54　イワガキ(左)

No.55　サザエ

No.21　サルボウ(右)

動物遺存体はいずれも実物の1/2

図版44　動物遺存体②

No.22　ハマグリ(左右)
No.23　ヤマトシジミ(左右)
No.46　サザエ 蓋
No.47　サザエ 蓋
No.48　サザエ 蓋
No.49　サザエ 蓋
No.8　カジキ亜目？ 椎骨
No.50　ハマグリ(左)
No.51　ハマグリ(左)
No.52　ハマグリ(左)
No.18　マダイ 上後頭骨
No.32　スズキ属 歯骨(左)
No.19　ブリ属 主鰓蓋骨(左)
No.36　スッポン 中腹骨板
No.35　スッポン 下腹骨板
No.34　スッポン 剣状腹骨板
No.33　スッポン 剣状腹骨板
No.3　不明鳥類 大腿骨(右)
No.39　サギ科？ 上腕骨(右)
No.31　不明鳥類 複合仙骨
No.4　不明鳥類 脛足根骨(左)
No.5　不明鳥類 脛足根骨(左)
No.6　ツル科 上腕骨(左)
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

No.7　不明鳥類
尺骨(左)
No.12　イノシシ属
肩甲骨(左)
No.10　ニホンジカ
上腕骨(左)
No.11　ニホンジカ
肩甲骨(左)
No.9　ニホンジカ
橈骨(右)
No.27　ニホンジカ
橈骨(右)
No.28　ニホンジカ
中手骨(右)
No.37　ニホンジカ
大腿骨(右)
No.38　ニホンジカ
中手骨(右)
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

図版46　動物遺存体④

No.2　ネコ
尺骨(左)
No.29　ネコ
肩甲骨(右)
No.30　ネコ
頭蓋骨
No.16　テン？
脛骨(左)
No.13　イヌ
上腕骨(右)
No.14　イヌ
大腿骨(左)
No.15　イヌ
大腿骨(左)
No.17　ヒト(成人)
大腿骨(左)
No.24　イヌ
上腕骨(右)
No.25　イヌ
橈骨(右)
No.26　イヌ
尺骨(右)
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

報告書抄録

ふりがな	まつえじょうかまちいせき（ほろまち５０ほか）
書名	松江城下町遺跡（母衣町 50 外）
副書名	松江法務総合庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 212 集
編著者名	小山泰生・石丸恵利子
編集機関 所在地	松江市 （松江市文化スポーツ部　埋蔵文化財調査課） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL：0852-55-5284
	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 （埋蔵文化財課） 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	令和 5（2023）年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
松江城下町遺跡（母衣町50外） （まつえじょうかまちいせき ほろまち ほか）	島根県松江市母衣町50番地外 （しまねけんまつえし ほろまち ばんちほか）	32201	D1026-73	35° 28′ 30″ 133° 03′ 19″	20200817 ～ 20210316	872㎡	庁舎新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松江城下町遺跡（母衣町50外）	近世城下町	江戸時代	礎石建物 屋敷境溝 水路 通路 柵 井戸 廃棄土坑 島状整地	陶器 磁器 土師器皿 木製品 金属製品 石製品 銭貨 瓦 動物遺存体	江戸時代の屋敷地内（町屋・武家地）の一部を調査し、1 区の第 2 遺構面では 17 世紀代前半（京極期）の町屋と考えられる礎石建物跡と敷地境溝や通路跡などの付属施設を検出した。 屋敷地の境界にあたる部分では素掘りの屋敷境溝を検出し、この調査成果を基に調査地における 17 世紀代初頭～前半（堀尾期）の屋敷地の規模と造成工法についての考察を行った。

松江市文化財調査報告書　第 212 集

松江法務総合庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

松江城下町遺跡（母衣町 50 外）

令和 5（2023）年　3 月

編集・発行　島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印　　刷　有限会社　高浜印刷
島根県松江市東長江町 902-57